

國立臺灣大學文學院日本語文學系

碩士論文

Department of Japanese Language and Literature

College of Liberal Arts

National Taiwan University

Master's Thesis



真杉静枝文学における女性像

—女性の自我の視点を通して—

Images of Women in Shizue Masugi's Literature:

from the Viewpoint of the Female Ego

詹柔蓁

Jo-chen Chan

指導教授：范淑文 博士

Advisor: Shu-wen Fan, Ph.D.

中華民國 111 年 7 月

July 2022



謝 辭

在傳統家庭中長大的我，在閱讀真杉靜枝的自傳小說〈女兒〉後，對於書中人物勇於反抗父權社會的姿態感到共鳴與感觸。在當世因不幸的婚姻遂出走以示反抗並追尋自我價值的真杉靜枝，所表現出的勇敢與堅強，令我更加堅信唯有勇氣與堅持才能獲得自由。

時光荏苒，四年的研究所生涯也將畫下句點。回首這段歷程，首先要感謝的是指導教授范淑文老師，不論是在學術研究上或是生活上都給予我很大的激勵與支持。感謝老師的諄諄教誨與細心指導，使得我順利完成論文；也感謝老師處處包容我、處處替我著想，使得我能以自己的步調完成研究所學業，老師猶如我人生中的貴人，感念之情，無以言喻。

接著，感謝兩位口試委員——東吳大學林雪星老師、輔仁大學黃翠娥老師，從提案審查至論文口試給予我溫暖的話語及實質且詳細的建議與指導。雪星老師針對研究作品的挑選及參考文獻的引用給予完善意見；翠娥老師則是針對先行研究的梳理分析及時代性的特徵提供寶貴建議。非常感謝兩位老師，才能使本篇論文更臻完善，在此獻上我最誠摯的敬意與謝意。

再者，感謝陳明姿老師、朱秋而老師、林慧君老師、林立萍老師、曹景惠老師、黃鈺涵老師、田世民老師、洪瑟君老師，於課堂上的啟發或是日常生活上的關心與協助。感謝擔任教學助理期間，李芸蓁老師、曾寶儀老師、張鈞竹老師的關愛與指教。感謝日文系系辦、日本研究中心、圖書館提供工讀機會，使我在撰寫論文期間，還能維持一定的生活水平。

此外，不論刮風下雨、平日假日都會在研究室相互提攜的同期夥伴——新昊、琮軒、乙瑞，特別感謝三位好友的照顧與陪伴，讓我在研究所的書山學海中，不迷失也不孤單。也要感謝後輩們——育萱、文甯、妙珍、婉彤、郁晴、家淇，於撰寫論文期間暖心的打氣與鼓勵。同時感謝譯者 Kevin Chen 協助翻譯英文摘要，並花時間及心力與我溝通，確保原意相符。

最後，感謝我的父母——詹馥旗先生、施玉好女士，願意讓我完成自己想做的事，並且一路上相信著我、默默地給予我支持，希望在未來的日子裡能夠報答你們為我付出的一切。感謝妹妹柔珊，始終在學校以外的地方陪伴我，讓我在研究所的壓力之下還有喘息的空間，以及在這不平等的世界裡，和我一起長大。



摘要

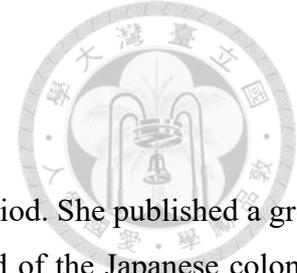
成長於日治時期臺灣的真杉靜枝，以 1920 年代~1940 年代日治時期的臺灣為背景，發表許多以日本女性為主題的作品。因此，本論文著眼於其作品中的女性形象，以「女性自我」的視角來探討當中女性人物是否符合性別角色、跳脫性別框架抑或拋棄自我以符合社會期待，藉此得知真杉筆下女性人物在面對戀愛、婚姻、人生等困難時所採取的態度。

本論文具體的研究過程如下：首先，第一章聚焦於〈站長的少妻〉、〈異鄉之墓〉、〈南方之墓〉及〈南方的記憶〉四部心境小說，探討為戀愛及婚姻而艱苦奮鬥的女性人物；再者，第二章以自傳小說〈女兒〉為文本並探討作品中母女關係間的糾葛以及梶子如何在成長過程中反抗母親及追求自我；最後，第三章聚焦於〈母親的傑作〉及〈烏秋〉兩部自傳小說中姊妹的生活方式，並分析兩者對於戀愛及婚姻的價值觀以及各自的女性形象。

基於上述分析可歸納出三項結論：(1)四部心境小說中的女性角色雖有反抗守舊社會的想法，但由於沒有經濟獨立的能力導致無法跳脫父權社會的拘束。(2)〈女兒〉中的梶子勇於反抗被母親強迫的婚姻，並追求自己理想的生活方式。(3)〈母親的傑作〉與〈烏秋〉中的妹妹喪偶後兼顧育兒與工作，展現頑強不屈的姿態；姊姊則是在面對沒有結果的愛情，仍然義無反顧地付出。

關鍵字：真杉靜枝、女性自我、女性形象、父權社會、女性嫌惡

Abstract



Shizue Masugi was raised in Taiwan during the Japanese colonial period. She published a great many literary works on Japanese females under the historical background of the Japanese colonial period from 1920 to 1940 in Taiwan. Therefore, the present study put focus on the female image in Masugi's works and delved into women's roles from the lens of the female ego to examine whether the women depicted in her works lived up to the gender role, popped out of the sexual frame, or abandoned themselves to fulfil the society's expectations. From doing so, the female figures' attitudes portrayed by Masugi could be clearly observed when they were faced with difficulties, such as the challenges of love, marriage, and life.

The procedures of conducting the present study can be divided into the following three steps. First and foremost, chapter one focused on the four I-novels: *Ekicyonowagakitsuma*, *Ikyonohaka*, *Namponohaka*, and *Nankainokioku*. the female figures who were struggling for love and marriage were deeply investigated. Secondly, chapter two focused on an autobiographical work, *Musume*, to discuss the intertwining relationship between the mother and the daughter and how Kajiko fought against her mother and followed her heart. Last but not least, chapter three focused on the lifestyles of two sisters in two autobiographical works, *Hahanokessaku* and *Ocyu*. The two sisters' thoughts on romantic relationship and the female image were carefully analyzed.

The results of the analysis mentioned above can be compiled into three points. First, although the female figures in the four I-novels bore the thought of revolting against thoughts of the conservative society, they still failed to crack the shackles of the patriarchal society because they were not financially independent. Second, Kjiko in *Musume* fought courageously against the marriage forced by her mother and pursued the ideal lifestyle. Third, in *Hahanokessaku* and *Ocyu*, after the death of the younger sister's husband, she needed to take care of her children and herself at work concurrently, displaying the unyielding spirit. On the other hand, the older sister was facing the fruitless love. Even so, she still did whatever needed to be done for the relationship unconditionally.

Keywords: Shizue Masugi, Female ego, Female image, Patriarchal society, Misogyny

要 旨



日本統治時代の台湾で育った真杉静枝は、1920年代から1940年代の日本植民統治期における台湾地方社会を背景に、日本の女性人物を主題として数多くの作品を書いた。そこで、本論文はそれらの作品を中心に、女性の自我の視点を通して作中の女性人物が、それぞれ制度内で期待される性役割を果たす女性であるか、制度内の調和からはみ出す女性であるか、または自我意識を制度内の役割に封じ込められたか、などを考察する。さらに、真杉文学における女性像を考察することによって、女性人物は恋愛、結婚、人生などの問題に直面した時どのような姿勢を構えているのか、という問題を明らかにする。

まず、第1章は真杉文学の出発点と言える身边小説「駅長の若き妻」、「異郷の墓」、「南方の墓」、「南海の記憶」を取り扱い、恋愛と結婚に苦闘する女性たちの描かれ方について考察する。次に、第2章は自伝的小説「むすめ」に描かれた母娘関係の葛藤に注目し、少女から女性への成長の過程において母の価値観を否定し、自我を求めた主人公梶子の女性像を考察する。最後、第3章は自伝的小説「母の傑作」と「烏秋」に描かれた二人姉妹の生き方に注目し、彼女たちが恋愛・結婚に対する価値観及びその女性像を考察する。

結論としては次の三点が挙げられる。(1) 4篇の身边小説における女性像は因習的な社会に反抗しようとする考えを持っているものの、経済的自立ができない理由で家父長制に拘束され、女性としての苦境から脱出できなかったことが窺える。(2) 「むすめ」の梶子は母親から押し付けられた結婚に反抗し、果敢に自分らしい生き方を追求する。(3) 「母の傑作」と「烏秋」における未亡人の妹は仕事と育児を両立させる逞しい姿が見られる一方、姉は結婚に至らない恋愛に無償の愛を捧げる姿が窺える。

キーワード：真杉静枝、女性の自我、女性像、家父長制、ミソジニー



目 次

謝 辭.....	i
摘 要.....	ii
Abstract.....	iii
要 旨.....	iv
序 論.....	1
第 1 節 研究動機.....	1
1. 作家・真杉静枝の生い立ち.....	1
2. 私の強い女性.....	5
第 2 節 先行研究.....	7
1. 真杉静枝文学における台湾表象と戦争協力について.....	8
2. 真杉静枝と女性作家の比較研究について.....	12
3. 真杉静枝文学における日本人女性像について.....	13
第 3 節 問題意識、研究方法及び研究範囲.....	17
1. 問題意識.....	17
2. 研究方法及び研究範囲.....	19
第 4 節 論文構成.....	21
第 1 章 身辺小説における恋愛と結婚に苦闘する女性たち.....	25
第 1 節 「駅長の若き妻」—自己投影の最初の作品.....	26
1. 異郷における既婚女性の生き方.....	26
2. 救われない美那子.....	29
第 2 節 「異郷の墓」—異郷で客死する女性.....	32
第 3 節 「南方の墓」—従順な女性と反抗的な女性.....	34



第4節	「南海の記憶」—居場所を探す女性たち	37
1.	既婚女性の恋の行方	37
2.	理想を追い求める志保子	40
第5節	結び	43
第2章	「むすめ」—母との葛藤を通しての自己探し	46
第1節	母との葛藤	47
1.	梶子の経歴—児童期から思春期まで	47
2.	ミソジニーに対抗する梶子	52
第2節	支配的な母と反抗的な娘	56
第3節	自己への再認識	61
1.	自己成長に繋がる恋愛	61
2.	過去との和解	67
第4節	結び	72
第3章	「母の傑作」「烏秋」—姉妹をめぐる物語	75
第1節	「母の傑作」—見せられたくない女の姿	76
1.	「幸福な普通の女の生活」について	76
2.	妻の役割が終わった妹	80
3.	結婚に至らなかった恋	84
第2節	「烏秋」—たくましい女の生き方	90
第3節	結び	94
結 論		96
参考文献（著者名五十音順）		102



序 論

第1節 研究動機

1. 作家・真杉静枝の生い立ち

真杉静枝 (1900-1955) は明治 33 年 (1900) 福井県で生まれ、明治 36 年 (1903) 両親と共に台湾に移住し、台湾で育った¹。大正 10 年 (1921)²、不幸せな結婚関係を逃げようとするため、親に逆らって日本へ出奔した。自由の身になった真杉は、「きっと作家になってみせる」³という意気込みで作家になるための計画も立てていた⁴。そうした 20 年近く住んでいた台湾を主題にした文学作品は少なくない。1927 年 7 月『大調和』にデビュー作「駅長の若き妻」を発表し、文壇に登場して文学活動を始めた。さらにデビュー作の発表を契機に、植民地台湾に生きる日本人女性の境遇を描き始めた。例えば、「異郷の墓」(1929 年 1 月『若草』)、「南方の墓」(1934 年 1 月『桜』) や「南海の記憶」(1936 年 8 月『婦人文芸』) などである。作家志望の真杉はついに 1938 年 12 月、最初の小説集『小魚の心』⁵を竹村書房から出版することになっていた。1939 年 2 月末ごろ、中村地平と共

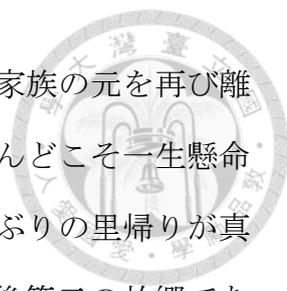
¹ 十津川光子『悪評の女』(虎見書房、1968 年)、19 頁。真杉の妹・道野勝代の証言によると、戸籍では明治 34 年 (1901) 生まれになっているが、それは真杉の両親が結婚した年であり、真杉はその前年 (明治 33 年、1900) に生まれている。

² 十津川光子、前掲書、58 頁。

³ 十津川光子、前掲書、63 頁。

⁴ 十津川光子、前掲書、52-63 頁。真杉静枝は台湾を出るときから、作家になるための計画を立てていた。第一は、経済的な独立のために看護婦として働くこと。第二は、よい文学の師と文学グループを見つけること。

⁵ 『小魚の心』(昭和 13 年 1938) は、12 篇の小説が収録され、表題作である「小魚の心」(1937 年 1 月『婦人文芸』) も含まれている。



に真杉は18年ぶりに台湾を訪問し、一ヶ月間滞在していた⁶。家族の元を再び離れる日に、汽車に乗っている真杉は「東京へ帰りましたら、こんどこそ一生懸命立派な存在になりませう」⁷と再び自分を励ました。その18年ぶりの里帰りが真杉にとっては重要な意味であったかのように、日本に戻った後第二の故郷である台湾に関する作品を相次いで発表した。例えば、1939年10月『ひなどり』（竹村書房）を、同年11月『草履を抱く女』（春陽堂）を、1940年7月『愛情の門』（国際女性社）を、9月『その後の幸福』（昭森社）と『甲斐なき羽撃き』（協力出版社）を発表した⁸。しかしながら、真杉静枝が描いた台湾ものの全盛期はまだ終わらない。随筆集『甲斐なき羽撃き』に収録されている「台湾印象の一部」に「近い内、もつと深く台湾を知るために、ぜひ出かけやうと考へてみる」⁹と記してある。そしてまさに彼女の望み通りに、1940年の暮れから1941年早春にかけて二回目の台湾訪問をすることになった¹⁰。その中に「年末から正月へかけて」

⁶ 『中村地平全集』第3巻に掲載している地平の年譜（皆美社、1971年）396頁参照。及び、『輝ク』1939年4月17日（『輝ク：復刻版』、不二出版、1988年、286頁）の「各地通信」に真杉静枝が台湾に旅行に来ている報告がなされ、4月初めに帰る予定が告げられている。また、「かくげい抄」に「中村地平 來台周遊中」という記事が掲載されている。（『台湾日日新報』1939年3月18日、<http://huntenq.com/ddn.htm>、「大鐸資訊」、2021年11月1日閲覧）。真杉静枝の随筆集『甲斐なき羽撃き』（協力出版社、1940年）にも、「一ヶ月ばかり台湾に滞在して、（略）僅か一ヶ月ばかりの台湾旅行」（194-200頁）と記してある。

⁷ 真杉静枝「南方の雨」『甲斐なき羽撃き』（協力出版社、1940年）211頁。

⁸ 真杉静枝の作品年譜は、河原功「解説」『ことづけ』『日本植民地文学精選集19巻』（ゆまに書房、2000年）と尾形明子「作家・真杉静枝—復権のための序章—」『その後の幸福』『近代女性作家精選集44巻』（ゆまに書房、2000年）を参考にした。

⁹ 真杉静枝「台湾印象の一部」『甲斐なき羽撃き』（協力出版社、1940年）200頁。

¹⁰ 真杉静枝の感想文「汽車弁当に地方色を」の文末に「筆者は作家、來台中」という記述がある。（『台湾日日新報』1940年12月13日、<http://huntenq.com/ddn.htm>、「大鐸資訊」、2021年11月1日閲覧）及び、真杉の紀行集『ことづけ』（新潮社、1941年、59頁）に「冬から新春にかけて、台湾から広東方面に旅行した」と記している。また、『輝ク』1941年2月17日の「輝ク部隊 南支方面慰問団日記—その一—」（『輝ク：復刻版』、不二出版、1988年、374頁）により、長谷川時雨らは1月8日に台北駅で真杉と会った。そして『輝ク』1941年1月17日、

11「広東滞在十日の間」¹²宇野千代と共に南支派遣軍を慰問していた¹³。日本に帰った真杉は台湾と中国で見聞したことを題材にし、作品集『南方紀行』¹⁴（1941年6月昭和書房）と『ことづけ』¹⁵（1941年11月新潮社）を相次いで発表した。このように、1939年の台湾訪問は18年ぶりに家族と第二故郷の台湾の再会であり、1941年早春の台湾訪問は、南方軍隊への慰問を兼ねた里帰りであった。そのような特別な背景と経験を持っている真杉静枝が、積極的に台湾を舞台にして文学創作に励んだ姿に惹きつけられ、私は真杉静枝文学の研究を始めたのである。

しかし真杉は生涯の中で男性との付き合いは、かくも激しいバッシングを浴び続けてきた。さらに他界した真杉に対しても容赦なく、石川達三は彼女の経歴

長谷川時雨の「蓬來の島より」に「嬉しかったのは、真杉静枝さんが台北の汽車の窓外に迎へに出てみてくれたこと、その晩、台南に立たれましたが、一緒に半日暮らしました。」と記している。（前掲書、369頁）よって、真杉は1940年12月台湾へ行き、年末から新春にかけての10日間は広東に滞在した後、台北に戻り、1月8日の夜に台南へ出発したと推定できる。

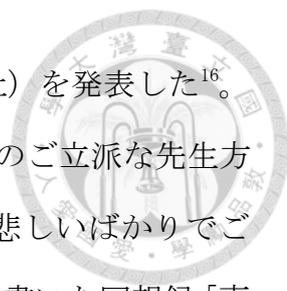
¹¹ 真杉静枝「国際結婚」『南方紀行』（昭和書房、1941年）97頁。

¹² 真杉静枝「佛山へ行く道」『南方紀行』（昭和書房、1941年）113頁。

¹³ 巖谷大四の著作『物語女流文壇史』（文芸春秋、1989年）によれば、「昭和十五年の春、陸軍報道部から、静枝のところに連絡があって、南支派遣軍に対する慰問の旅に行ってもらいたいという話があった。」（225-226頁）。そこで、『物語女流文壇史』には真杉静枝に対する軽蔑が何箇所ある。例えば、「派手な和服に紫色のショールをかけ「孔雀」の姿で出かけた。南支で彼女は参謀長と一夜を結んだ。まことに実質的な慰問であった」（226頁）、「大阪の夕刊新聞にもぐり込み、婦人記者になった。真杉はここでも孔雀のようににはでに振舞った」（224頁）、「相変わらず「孔雀」ぶりを発揮したので一層ひんしゃくを買った」（227頁）等々である。が、『物語女流文壇史』における真杉静枝に関する記述は、石川達三の真杉静枝をモデルにした小説『花の浮草』（新潮社、1965年）を参照して書かれたものである。

¹⁴ 『南方紀行』（昭和書房、1941年）は、「広東春日記」と「台湾の土地」の二部からなり、前者は9篇、後者は14篇を収録する。「台湾の土地」に関しては、『甲斐なき羽撃き』（協力出版社、1940年）に収録した「南方紀行」の作品群も再び『南方紀行』に収録されている。

¹⁵ 河原功の解説によると、作品集『ことづけ』は「日本の南進政策によって南方を扱った多くの文学作品が刊行されていく中で増刷を重ね、四二年九月には四刷三〇〇〇部を発行するに至った」（真杉静枝『ことづけ』、『日本植民地文学精選集 19巻』、ゆまに書房、2000年）3頁。



を揣摩臆測し、悪意に充ちた小説『花の浮草』（1965年新潮社）を発表した¹⁶。その小説を読んだ真杉の妹・道野勝代からは、「その間、文壇のご立派な先生方が姉のことをさまざまにお書き下ろされましたけど、私には悲しいばかりでございます」¹⁷という遺族の悲嘆を表している。また、吉屋信子の書いた回想録「真杉静枝さんの生涯」には、「真杉さんは女のおおかたに潜在する（英雄崇拜）が強かった。かつて武者小路氏、そして中山義秀氏もそれにちがいがなかった」¹⁸と記されており、戦後に至っても「占領下の日本では（時の英雄）は米軍の将官だったから、真杉さんの英雄崇拜も青い眼の英雄へと移ったのも当然だった」¹⁹と真杉の振る舞いを解釈した。真杉静枝をモデルにした小説であれ作家たちの回想録²⁰であれ、いずれも真杉の文学作品を論じるのではなく、むしろレッテル貼りをすることを通して真杉静枝の人間像を作り上げただけのものであろう。

一方、真杉の文筆活動については、1928年7月長谷川時雨が主宰していた『女人芸術』の創刊号の執筆に参加し始めた2年間、随筆や短編を合わせて6本書

¹⁶ 蜂矢宣朗が『花の浮草』について「真杉静枝の人間像と、『花の浮草』を読んで得られるものとは、かなり違いがある。もちろん、真杉静枝が純情可憐な女だとは思わないが、『花の浮草』の書きざまは、悪女ぶりがすこし酷すぎるようである。」と指摘した。（「真杉静枝と台湾—「むすめ」と「ながれ」から—」、『天理台湾学会年報』第4号、天理台湾学会、1995年）113頁。

¹⁷ 十津川光子、前掲書、12頁。

¹⁸ 吉屋信子「真杉静枝の生涯」（『小説新潮』新潮社1962年6月号）241頁。

¹⁹ 吉屋信子、前掲記事、242頁。

²⁰ 真杉静枝が他の作家の回想録や小説に描かれたのは、火野葦平「淋しきヨーロッパの女王」（『新潮社』、1955年1月号、230-262頁）、林真理子『女文士』（新潮文庫、1998年）、平林たい子「真杉静枝さんと私」（『自伝的交友録・実感的作家論』、文芸春秋新社、1960年、27-42頁）（初出『別冊文藝春秋』1955年10月号）、十返肇「真杉静枝の生涯」（『わが文壇散歩』、現代社、1956年、90-99頁）（初出『主婦と生活』1955年8月号）、和田芳恵「真杉静枝の愛」（『ひとつの文壇史』、新潮社、1967年、175-185頁）、清水信「真杉静枝との悲劇——中山義秀」（『作家と女性たち』、現文社、1967年、180-183頁）、宇野千代「自分に似た女の行く末」（『作家の自伝32宇野千代』、日本図書センター、1995年、176-178頁）などがある。



いた²¹。1933年5月、坂口安吾、井上友一郎、田村泰次郎等諸氏と『桜』という同人雑誌を刊行し、「南方の墓」「婚姻」など短編小説を同誌に発表した²²。そして、1937年盧溝橋事件を機に、時局の進展に応じた『輝ク』と「輝ク部隊」の活動に取り掛かり、社会的な活動も活発に展開した²³。尾形明子は、『『輝ク』後半で、時雨がもっとも期待していたのは、円地文子、大田洋子、真杉静枝の三人であった』²⁴という評価を述べた。そのうえ、1940年11月成立した「日本女流文学者会」のために真杉はよく働いており、敗戦後、吉屋信子らによって復活した「女流文学者会」が主催した女流文学賞の選考委員としても力を注いだ²⁵。以上のことを踏まえ、戦前から戦後まで羽ばたいていた真杉は、私生活で世間の批判に傷つき、恋愛や結婚に挫折しながらも自分の文学を求め続けひたすらに歩んだ稀な女性作家であったことは窺えよう。

2. 我の強い女性

真杉静枝は初めての随筆集『甲斐なき羽撃き』に収録されている「甲斐なき羽

²¹ 真杉静枝は『女人芸術』に「或る妻」（1928年7月創刊号）、「土蔵の二階」（1928年12月）、「無銭記」（随筆）（1929年8月）、「別離」（1929年10月新人小説号）、「町の子供」（1930年4月）、「彼女の恋物語」（1930年6月）を発表した。以上の情報は、紅野敏郎「解説」『女人芸術』解説・総目次・索引（不二出版、1987年）、尾形明子『「輝ク」の時代——長谷川時雨とその周辺』（ドメス出版、1993年、197-205頁）を参考にした。

²² 編集部「作家紹介（真杉静枝の巻）」中島利郎、河原功、下村作次郎編『日本統治期台湾文学・文芸評論集第3巻』（緑蔭書房、2001年）300-301頁。（初出『台湾芸術』1940年5月号）

²³ 真杉静枝は『輝ク』に12本を発表した。『輝ク』の執筆者以外に『輝ク部隊』の評議員をも務めている。さらに、真杉は「輝ク部隊文学部研究会」を円地文子、辻山春子、森三千代、大田洋子、網野菊、長谷川時雨らと毎月開いている。以上の情報は『輝ク：復刻版』別冊（不二出版、1988年）と尾形明子の前掲書（281-287頁）などを参考にした。

²⁴ 尾形明子、前掲書、287頁。

²⁵ 尾形明子の前掲書（270-287頁）と吉屋信子の「女流文学者会挿話」（『自伝的女流文壇史』、中央公論社、1977年、198-218頁）を参照にした。

撃き」において深尾須磨子の詩——「蛾」の一節²⁶を引用し、「私は、ひととびせめて、飛びめぐりたかつたのである」²⁷と出奔の心境を表した。さらに、「結婚によらない、女の独立生活を、ばくぜんと憧憬してゐた。そこにしか、生き甲斐はない」²⁸と考えている真杉は、女性問題について自分の見方と世間への批判を以下のように述べている。

酒に耽つてゐて、時折細君を殴る旦那さまがあつた。女を殴る酷薄なもの音は、私の心に、大きな悲鳴があがるほどの動揺を与へた。放蕩して、外泊して帰る良人を、家庭で笑顔で出迎へてゐる奥さんがあつた。その奥さんは、人々に賞められてゐた。私には全身に冷汗が湧くくらゐ判らない事柄であつた。(中略)

人々は、婦人に生れた、そのことが、死刑の宣告をでもされたことのやうに因果なことと諦らめきつてゐる。婦人に丈け何か前世で贖罪を必要とするやうな悪業でもあつたかのやうに、考へこんである。

さういふ一般の考へ方が、私には、恐ろしかつた。その楔²⁹を脱れるには、自分が自活の道を拓くことだ、といふ風に考へてゐた。³⁰

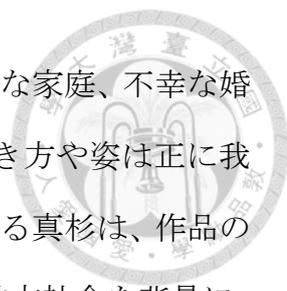
²⁶ 真杉が引用した内容は、「ひととびせめてとびめぐらうと、羽撃き羽撃きころみだが、やがては疲れた弱い蛾は、真昼の光の中に泣き寝入るのです」(34頁)である。真杉静枝「甲斐なき羽撃き」からの引用は『甲斐なき羽撃き』(協力出版社、1940年)により、旧字体を新字体に改めた。そして、深尾須磨子「蛾」の原文は、「ああ、一飛びせめて飛びめぐらうと、羽ばたき羽ばたきころみても、やがてつかれる弱い蛾は、ほのかな光に泣きねいるのです」である。『現代日本詩人全集』第九卷(東京創元社、1955年)49頁。

²⁷ 真杉静枝「甲斐なき羽撃き」『甲斐なき羽撃き』(協力出版社、1940年)36頁。

²⁸ 真杉静枝「甲斐なき羽撃き」『甲斐なき羽撃き』(協力出版社、1940年)37頁。

²⁹ 「自由を全く金縛りにしてくる両親といふ楔」真杉静枝「甲斐なき羽撃き」『甲斐なき羽撃き』(協力出版社、1940年)36頁。

³⁰ 真杉静枝「甲斐なき羽撃き」『甲斐なき羽撃き』(協力出版社、1940年)37-38頁。



男性中心社会に抗い、自分らしく生きるために、その封建的な家庭、不幸な婚姻に抑圧されてきた生活から脱出して自立する真杉静枝の生き方や姿は正に我々の強くて能動的な女性と言えよう。なお、女性問題に関心がある真杉は、作品の中に1920年代から1940年代の日本植民統治期における台湾地方社会を背景に、日本の女性人物を主題として数多くの作品を書いた。例えば、「駅長の若き妻」の美那子、「異郷の墓」の医者妻、「南方の墓」の駅長の娘、「むすめ」の梶子、「烏秋」の照枝などの女性人物のイメージは鮮やかに造形されている。果たして、真杉の文学作品における女性人物から、自分の置かれた境遇を拒んで抵抗する姿が窺えるか、または受動的な姿勢が窺えるか。ゆえに、真杉文学の中の女性像について改めて考察する余地があるのではないだろうか。そこで、本論文は真杉静枝の1920年代から1940年代の日本植民統治期における台湾地方社会を背景に、日本の女性人物を主題として描かれた作品を中心に、真杉静枝文学における女性像を究明したい。

第2節 先行研究

1990年後半以降、日本統治期台湾文学の研究の隆盛とともに、台湾経験を描いた日本人作家の一人として、真杉静枝への再評価の兆しが出てきた。そして、真杉作品に関しては、1998年刊行の『日本統治期台湾文学日本人作家作品集別巻』に短編小説「南方の墓」が再録されたことに加え、岩見照代、尾形明子、岡田孝子、岡西愛濃、高良留美子の5人の女性研究者が真杉の復権をめざして未復刻の作品やエッセイを主にした作品集の出版に取り掛かり³¹、『小魚の心』(1938)、『ひなどり』(1939)、『その後の幸福』(1940)、『南方紀行』『ことづけ』

³¹ 高良留美子「真杉静枝・悪評の作家——昭和文学の失われた輪」『ミッシング・リング 樋口一葉と女性作家——志・行動・愛』(翰林書房、2013年) 310頁。(初出『社会文学』第29号、2009年2月)

(1941)、『母と妻』『帰休三日間』(1943)などが復刻された³²。それとともに真杉研究も始まり、李文茹、高良留美子が複数の論文を発表しており³³、一冊にまとめられた本格的な真杉研究書としては、呉佩珍『真杉静枝與殖民地台灣』(聯經出版公司、2013年)がある。では、近年行われてきた真杉静枝の研究を大まかに3種類に分けて検討してから、研究動機に沿って真杉静枝研究においてまだ提起されていない研究の方向を提示していきたい。

1. 真杉静枝文学における台湾表象と戦争協力について

真杉静枝の台湾経験に関する研究の嚆矢は、蜂矢宣朗「真杉静枝と台湾—「む

³² 作品集の復刻版は、『ひなどり』『小魚の心』(『近代女性作家精選集 17・18 巻』ゆまに書房、1999年)、『その後の幸福』(『近代女性作家精選集 44 巻』ゆまに書房、2000年)、『ことづけ』(『日本植民地文学精選集 19 巻』ゆまに書房、2000年)、『南方紀行』(『女性のみた近代 24 巻』ゆまに書房、2000年)、『母と妻』『帰休三日間』(『<戦時下>の女性文学 12・14 巻』ゆまに書房、2002年)がある。ほかには10篇の作品が再収録されている。「母の傑作」吉屋信子(編)『<戦時下>の女性文学 4 巻・女流作家十佳選』(ゆまに書房、2002年)、「出発のあと」「戒壇」「葵の前」「真李子」「その名は愛慾といふ列車」「本日は晴天」「或る女の生立ち」「アメリカの十字架」「花怨」尾形明子・長谷川啓(監修)『戦後の出発と女性文学 2・3・5・7・8・9・14 巻』(ゆまに書房、2003年)

³³ 李文茹『帝国女性と植民地支配：1930～1945年における日本人女性作家の台湾表象』(名古屋大学博士論文、2005年)における真杉に関する論考は1、3、6章である。第1章は、『日本台湾学会報』第5号(日本台湾学会、2003年)に掲載された「植民地を語る苦痛と快楽——台湾と日本のはざまにおける真杉静枝のアイデンティティ形成」に加筆・訂正を加えたものである。また、第3章は『日本台湾学会報』第7号に掲載された「「番人」・ジェンダー・セクシュアリティ——真杉静枝と中村地平の台湾表象からの一考察」に加筆・訂正を加えたものである。『臺灣文學學報』第12号(國立政治大學台灣文學研究所、2008年)に掲載された論文「植民地・戦争・女性—探討戦時真杉静枝台湾作品」は、第6章「戦時下の真杉静枝の台湾表象」が中国語に翻訳されたものである。本論では、主に李氏の学位論文『帝国女性と植民地支配：1930～1945年における日本人女性作家の台湾表象』を検討する。一方、高良留美子の評論集『樋口一葉と女性作家——志・行動・愛』(翰林書房、2013年)で真杉についての評論は4篇があり、「真杉静枝・悪評の作家——昭和文学の失われた輪ミッシング・リング」、「真杉静枝の結婚小説『駅長の若き妻』を読む——想像力と言葉による<家>の粉碎・消去」、「真杉静枝が書いた台湾——陰影あるエッセイ」、「真杉静枝『南方の言葉』を読む——本島人と台湾語への愛」である。



すめ」と「ながれ」から一」(『天理台湾学会年報』第4号、天理台湾学会、1995年)と言えよう。それは真杉と中村地平が1939年台湾を訪問した経験に基づいて描かれた自伝的小説を対象として真杉と中村の関係を明らかにしたものである。李文茹は「戦時下の真杉静枝の台湾表象」³⁴という一節で、戦時下の日本人女性作家を「戦争協力によって男性と対等な社会地位を獲得しようとした女性作家たち」³⁵と見なし、真杉の作家活動を例にあげて二回の台湾訪問と戦争協力の繋がりを考察した。李氏は一回目の台湾訪問の後に発表された随筆集『甲斐なき羽撃き』に所収されている「木麻黄と芸妓」、「移り行く台湾」、「淡水」を例に、「台湾を小説化するに当たり、真杉の関心の多くは皇民化運動と関連する部分であったため、植民地社会における数々の不平等問題や、不合理な政策などがその創作の題材にのらなかった」³⁶と批評し、戦時下の真杉の台湾表象を「戦時体制に巻き込まれる作家の側面を物語るものである一方、自発的に植民地支配に加担する作家の一面を暴き出すものである」³⁷として捉えた。それと関連して、河原功「日本人作家の見る淡水」では、「淡水」において「皇民化運動・皇民化教育を盲目的に支持しているところがある」と提起し、皇民化運動を推進させようとする政策に対する「罪悪感はずいぶん真杉静枝に生じていない」³⁸と批判した。

李氏と河原氏の論点に対し、高良留美子「真杉静枝が書いた台湾——陰影あるエッセイ」では、「淡水」における皇民化政策に賛美する叙述を「奴隷の言葉」

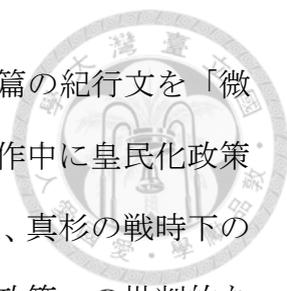
³⁴ 李文茹『帝国女性と植民地支配：1930～1945年における日本人女性作家の台湾表象』(名古屋大学博士論文、2005年)109-133頁。

³⁵ 李文茹、前掲博士論文、109頁。

³⁶ 李文茹、前掲博士論文、125頁。

³⁷ 李文茹、前掲博士論文、130頁。

³⁸ 河原功「日本人作家の見る淡水」『翻弄された台湾文学——検閲と抵抗の系譜』(研文出版、2009年)174頁。



と見做し、『南方紀行』³⁹の「台湾の土地」に所収している12篇の紀行文を「微妙な物言いの多い、陰影のあるものになっている」と提起し、作中に皇民化政策に対する真杉自身の感傷が表れているところを考察した。また、真杉の戦時下の創作意図について「出版物の検閲制度のもとで、日本の皇民化政策への批判的なまなざしと、「奴隷の言葉」を交互に対置することによって、読者の心に矛盾やゆらぎを生じさせる」ことを通して「紀行文という形式を生かし、検閲制度をかいくぐって、植民地台湾の実情をできるかぎり読者に伝えようとしたということが出来る」⁴⁰と指摘した。それから「真杉静枝『南方の言葉』を読む——本島人と台湾語への愛」で高良氏は、台湾の本島人男性と内地からきた日本人女性との結婚を描いた「南方の言葉」⁴¹について、真杉は同情者の立場から結婚と言語という重要な主題を通して、皇民化政策への対抗を示した作品ですぐれた表現力と批評精神が窺える⁴²と指摘した。つまり、高良氏は真杉の復権と弁解を企て、真杉文学におけるヒューマンニズムの可能性を見直そうと試みたと言えよう。

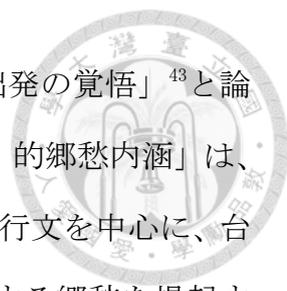
なお、邱雅芳「殖民地新故郷——以真杉静枝〈南方之墓〉、〈南方的語言〉的臺灣意象為中心」は「南方の墓」と「南方の言葉」両作品における主人公の境遇の比較を通じ、前作のモチーフを植民地空間の禁錮と家父長制の陰影で満たされた「死亡」として捉え、後作のモチーフを主人公の流転によって植民地が日本人女性の新故郷になったという政治寓話を見かけた「新生」として捉えた上で、そ

³⁹ 『南方紀行』（昭和書房、1941年）は、「広東春日記」と「台湾の土地」の二部からなり、前者は9篇、後者は14篇をそれぞれ収録する。

⁴⁰ 高良留美子「真杉静枝が書いた台湾——陰影あるエッセイ」、前掲書、331頁。（初出『植民地文化研究』第4号、2005年7月）

⁴¹ 『ことづけ』（新潮社、1941年）に所収。

⁴² 高良留美子「真杉静枝『南方の言葉』を読む——本島人と台湾語への愛」、前掲書、333-347頁。（初出『植民地文化研究』第5号、2006年7月）



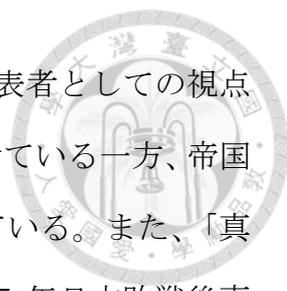
の「死亡」から「新生」への変化を真杉の南方に対する「再出発の覚悟」⁴³と論じた。許麗芳「試論真杉静枝《南方紀行・臺灣の土地》(1941) 的郷愁内涵」は、『南方紀行』の一部である「台湾の土地」の中にある 11 篇の紀行文を中心に、台湾表象の分析を通して作品に内包されている真杉の台湾に対する郷愁を提起することによって、真杉が皇民化政策に対する賛同と自省の立場が見られる⁴⁴と指摘した。

それに対して、吳佩珍『真杉静枝與殖民地台灣』は真杉の戦争協力に対する批判について、「植民地文学と国策文学への断罪は、戦後植民地支配による負の遺産を清算する「公平と正義」の原則と符合するものである。しかし、このような結論は各国の戦時下の文学における「普遍性」という点で類似が見られると言える。ゆえに、真杉静枝文学の特徴や、創作の風格も美的感覚も浮かび上がらないのである」⁴⁵と論じた。また、真杉は戦争協力の国策文学であるとされた随筆集『甲斐なき羽撃き』『南方紀行』と作品集『ことづけ』に所収される戦時下の台湾を描いた作品を通して、一方では積極的に南進政策における「中介者」としての台湾の役割を目立たせ、一方では自分と植民地台湾との繋がりを繰り返し強調することによって、日本文壇において台湾の代表者として発言権を得ることを

⁴³ 邱雅芳「殖民地新故郷——以真杉静枝〈南方之墓〉、〈南方的語言〉的臺灣意象為中心」『文史臺灣學報』第 2 号（國立臺北教育大學台灣文化研究所、2010 年）、95 頁。原文：「〈南方之墓〉寫殖民地空間的禁錮，男性家長制的陰影；〈南方的語言〉則以木村花子的流轉身世，見證殖民地成為新故郷的政治寓言。真杉静枝兩篇作品的主题，從死亡到新生，有一種歸零再重新出發的覺悟」（本文の日本語訳は引用者、以下同じく。）

⁴⁴ 許麗芳「試論真杉静枝《南方紀行・臺灣の土地》(1941) 的郷愁内涵」『國立彰化師範大學文學院學報』第 9 号（國立彰化師範大學、2014 年）、165-184 頁。

⁴⁵ 吳佩珍『真杉静枝與殖民地台灣』（聯經出版公司、2013 年）、13 頁。原文：「對於殖民地書寫以及國策文學的断罪，固然符合清算戰後殖民地負面遺產的「公平正義」原則，但這樣的結論其實可謂與各國戰時下所共有的具「普遍性」的文學現象相同，難以看出真杉静枝文學的真正特徵，以及其文學作品所牽涉的創作風格與美學問題。」



企図したのである⁴⁶と指摘している。それに、真杉が台湾の代表者としての視点から台湾を描くことは、戦争協力の一翼を担う一員として寄せている一方、帝国日本による植民地政策をも批判している⁴⁷とその姿勢を捉えている。また、「真杉静枝の「花樟物語」三部作とその台湾表象」で呉氏は、1945年日本敗戦後真杉が自らの家族史という視点から、日本による領台以後の歴史と重ねながら、植民地台湾を描いた作品「花樟」（1946年『東北文学』）、「左門治と千代」（1947年『東北文学』）、「老脚の賦」（1948年『仇ごよみ』所収）を真杉家一族をモデルにしたシリーズ作品——「花樟物語」と見做している。「花樟物語」三部作における日本の植民地政策への批判と日本敗戦により惨憺に極まる「引揚者」の境遇を提起し、三部作を左門治一家の植民地台湾における「家族史」に加え、日本の台湾における「植民地史」の縮図⁴⁸として捉えた。

2. 真杉静枝と女性作家の比較研究について

蜂矢氏「真杉静枝と窪川稻子—『南方紀行』と『台湾の旅』—」（『天理台湾学会年報』第6号、天理台湾学会、1997年）では、真杉と窪川が台湾の風物・風景に対する感受性の異同を考察した。林雪星「兩個祖國的漂泊者—從坂口禰子的《鄭一家》及真杉静枝的《南方紀行》《囑附》中的人物來看」は、『南方紀行』と『ことづけ』に描かれている台湾人が真面目に「国語」を学ぶ姿勢、原住民が野生と勇猛を失って順民となった姿、日中ハーフの中国人が日本軍を協力する姿

⁴⁶ 呉佩珍、前掲書、89頁。原文：「真杉的台灣書寫一方面積極凸顯台灣在南方戰事中的「中介者」角色，同時也反覆地強調自己與「台灣殖民地」的連帶關係，企圖進一步藉此取得日本文壇中代表台灣的發言權。」

⁴⁷ 呉佩珍、前掲書、90頁。原文：「身為中介「中介者台灣」的代言人，真杉静枝文本中的聲音，正如她所代言的台灣被寄予扮演戰爭協力的角色」「藉由積極扮演戰爭協力者中所爭取的籌碼，真杉對於帝國的台灣政策也同時進行批判。」

⁴⁸ 呉佩珍「真杉静枝の「花樟物語」三部作とその台湾表象」『立命館文學』第652号、中川成美教授退職記念論集（立命館大学人文学会、2017年）、1332-1338頁。

勢を提起し、真杉を「皇民化政策の功績にほめあげるという統治側の立場」⁴⁹として捉えた。呉氏「真杉静枝と坂口禰子の台湾表象——「自伝的小説」に描かれた日台植民地史」では、真杉の「花樟物語」三部作における樟木の家具、そして教育理念をめぐる左門治と上位官僚との衝突の描写を、「戦後の真杉自身の日本の植民地政策やタパニー事件の大量の虐殺に対する批判と自省」⁵⁰と捉え、戦後の真杉の「台湾表象」の作品を通して、日本の台湾植民地政策への批判を明らかにした。

3. 真杉静枝文学における日本人女性像について

李文茹「植民地を語る苦痛と快樂——台湾と日本のはざまにおける真杉静枝のアイデンティティ形成」⁵¹という一節で、「南方の墓」と「南海の記憶」に描かれている不幸な日本人女性像を提起し、植民地台湾を「苦痛の思い出を産んでいる場所であり、女性を不幸にする記号である」⁵²と捉えた。真杉は植民地にいる女性たちに不幸をもたらす意味を付与した原因は、「真杉の台湾経験をめぐるとラウマと創作態度と大きな関係がある」⁵³と李氏が指摘している。また、李氏は「女性を抑圧し、不幸にする理由を、すべて「植民地」に求めるのは、「植民地」＝「女性の墓」＝「暗黒世界」という図式を描き出そうとしているからである」

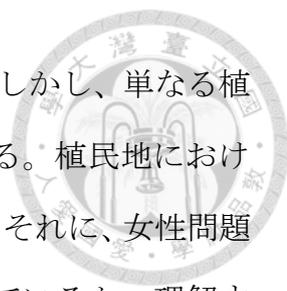
⁴⁹ 林雪星「兩個祖國的漂泊者——從坂口禰子的《鄭一家》及真杉靜枝的《南方紀行》《囑附》中的人物來看」『東吳外語學報』第22号（東吳大學外語學院、2006年）、63頁。

⁵⁰ 呉佩珍「真杉静枝と坂口禰子の台湾表象——「自伝的小説」に描かれた日台植民地史」マシュー・オーガスティン編『明治維新を問い直す——日本とアジアの近現代』（九州大学出版会、2020年）201-222頁。

⁵¹ 李文茹『帝国女性と植民地支配：1930～1945年における日本人女性作家の台湾表象』（名古屋大学博士論文、2005年）、15-35頁。

⁵² 李文茹、前掲博士論文、22頁。

⁵³ 李文茹、前掲博士論文、21頁。



⁵⁴と真杉の不幸な日本人女性像を描いた意図を解釈している。しかし、単なる植民地台湾を不幸の原因とする考えにはまだ考察する余地がある。植民地における女性扱いの男性描写も考慮に入れるべきではないだろうか。それに、女性問題に関心がある真杉の思想をこれらの作品にどのように反映しているか、理解する必要があろう。なお、李氏は真杉の作品に見られるような女性を不幸にする植民地台湾をめぐる描写と、18年ぶりの台湾訪問後に発表された作品「台湾の女性達」⁵⁵、「木麻黄と芸妓」⁵⁶における台湾女性の美しさを賛美する記述との描き方の変化は「植民地を他者として差別化する営為からきたもの」⁵⁷として捉えた。その上で、「真杉が植民地台湾に対する心情の変化を物語ると同時に、日本人としてのアイデンティティが確立されるにいたるまでの過程を語るものでもある」と論じ、「植民地育ちの真杉にとって、植民地で体験した悲惨の少女時代、不幸な結婚、植民地／日本を同時に背負う自分の一部を、すべて抹消しなければ完全な日本人としてのアイデンティティを確立できないのである」⁵⁸と指摘している。

高良留美子「真杉静枝の結婚小説『駅長の若き妻』を読む——想像力と言葉による〈家〉の粉碎・消去」は、家と妻である美那子についての描写に注目し、小説の中で「夫婦の生活の場としての「家」は、一つのまとまりをもった場所としては存在していない」、「家の掃除をする」とか「家を整える」「家を守る」といった発想も表現も、ここには全く出てこない。まるでばらばらの夫婦が家の各部分に分かれて暮らしているかのように、家は二人それぞれの場に細分化され、ほとんど分解されている」と指摘し、このような家の細分化は「言葉やその欠如に

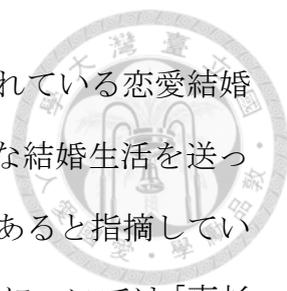
⁵⁴ 李文茹、前掲博士論文、22頁。

⁵⁵ 『甲斐なき羽撃き』（協力出版社、1940年）に所収。（初出『婦人公論』1939年5月）

⁵⁶ 『甲斐なき羽撃き』（協力出版社、1940年）に所収。

⁵⁷ 李文茹、前掲博士論文、26頁。

⁵⁸ 李文茹、前掲博士論文、34頁。



よる家の粉碎」だと捉えている。さらに、高良氏は作品に描かれている恋愛結婚や理想的な家に憧れた美那子は、その空想に耽りながら不幸な結婚生活を送ったと批判し、家はその「不満と夢想による粉碎」⁵⁹だったのであると指摘している。真杉の描いた植民地台湾における結婚をテーマとした小説については「真杉の表現の特徴をもっともよく表しているだけでなく、作品の完成度や劇的性格という面でも優れていて、なによりも植民地における男女関係や、結婚という普遍的なテーマを考える上で、多くの示唆をふくんでいる」⁶⁰と真杉の結婚小説の重要性を明示した。それと関連した「真杉静枝・悪評の作家——昭和文学のミッシング・リング失われた輪」と題した論文では、「真杉が生涯をかけてとり込んだのは、まさに今日重要性が見出されつつある女性問題と植民地問題という二つのテーマであった」と指摘し、「植民地台湾をその創作活動の原点とした作家としても、フェミニズム作家としても、また初期に原爆小説を書いた作家としても、真杉静枝は日本近代文学、とくに昭和文学のいわばミッシング・リング失われた輪というべき作家である」⁶¹と真杉の作家としての側面を喚起している⁶²。

呉氏の前掲書は、「駅長の若き妻」「南方の墓」「南海の記憶」における植民地在住の日本人と日本人女性を「帝国のマイノリティ」と捉え、「植民地台湾」の日本人移住者の中で下層階級である真杉は、これらの「帝国のマイノリティ」の社会的地位や直面している経済問題をありありと描くことができたのである⁶³

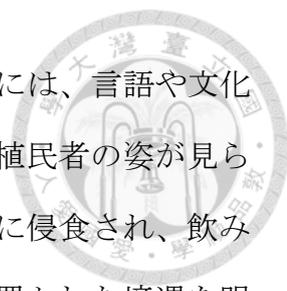
⁵⁹ 高良留美子「真杉静枝の結婚小説『駅長の若き妻』を読む——想像力と言葉による〈家〉の粉碎・消去」『樋口一葉と女性作家——志・行動・愛』（翰林書房、2013年）、311-324頁。

⁶⁰ 高良留美子、前掲書、311頁。

⁶¹ 高良留美子「真杉静枝・悪評の作家——昭和文学のミッシング・リング失われた輪」、前掲書、309頁。（初出『社会文学』第29号、2009年2月）

⁶² 真杉の復権を提唱する論説は、高良氏の論以外、尾形明子（解説）「作家・真杉静枝—復権のための序章—」『その後の幸福』（『近代女性作家精選集44巻』ゆまに書房、2000年）がある。

⁶³ 呉佩珍、前掲書、58頁。原文：「真杉静枝所隸屬的「殖民地台湾」下層移民結構，讓她能深刻解析這群「帝國邊緣者」在社會地位以及經濟問題的底層結構。」



と指摘している。その上で、「これらの日本人移民者たちの身には、言語や文化を通して「被植民者」を同化させようとするステレオタイプの植民者の姿が見られない一方、「植民地台湾」に彼らの言語、文化と記憶を徐々に侵食され、飲み込まれてしまったのである」⁶⁴と論じ、植民地在住の日本人が置かれた境遇を明らかにした。

なお、呉氏は自伝的小説「むすめ」（1940年5月『新潮』）と「或る女の生立ち」（1953年5月『新潮』）の分析を通して、真杉の思春期から母娘の不仲と母親からの支配を逃れるため、婚姻によって母親のもとを離れて「身体自主権」を取り戻せた⁶⁵と指摘している。それから、20代の真杉は必死に植民地台湾を逃げようとしたが、十数年後台湾は逆に真杉の「精神原郷」になった原因——そこは両親のいる「故郷」——を呉氏が解明した。さらに、そのような曖昧性は、彼女の奔放な恋愛経験を持っているものの、「処女イデオロギー」に対する強い先入観と劣等感を抱いている側面からも窺える。つまり、その矛盾の根源は、母親が真杉に固定観念を植え付けるということと「植民地台湾」の生い立ちであり、真杉静枝と「台湾≡母」間のアンビバレンス（愛憎感情）だということ⁶⁶を指摘している。

⁶⁴ 呉佩珍、前掲書、58頁。原文：「在這樣的移民者身上，難以看見典型的以語言、文化來同化「被殖民者」的殖民者形象，反而讓「殖民地台灣」一點一滴侵蝕他們的語言、文化與記憶，最終將他們吞噬。」

⁶⁵ 呉佩珍、前掲書、29頁。原文：「真杉所企圖呈現的是在青春期成長過程「身體自主性」如何受到嚴格的管控，因而思考如何利用婚姻逃離與母親的關係。」

⁶⁶ 呉佩珍、前掲書、42-59頁。原文：「在真杉靜枝的自傳小說〈女兒〉與〈某個女人的生平〉中，「台灣」成為愛憎交錯(ambivalent)的記號，雖想逃離卻無法割捨。也正如〈女兒〉的結尾所呈現的，起初她一心想逃離的殖民地「台灣」，卻成為她精神安定的寄託，因為這是父母所在的「故鄉」。這樣的曖昧性，一如她雖有輒多采多姿的戀愛關係，卻又對「處女情節」有著強烈的迷思與劣等感。透過她自傳小說強烈的暗示，這矛盾的根源似乎可解讀為來自母親強加於她身上的觀念及其「殖民地台灣」的成長背景。」「殖民地台灣」的魅影卻盤據於其靈魂深處，成為她的「精神原郷」，而這也一定程度地反映了真杉靜枝與「台灣≡母親」之間的愛恨糾葛。」



一方、范淑文「真杉静枝文学に語られる「壁」——「烏秋」、「母の傑作」の主人公たち」では、「母の傑作」（1939年7月『婦人公論』）と「烏秋」（1941年6月『婦人公論』）を姉妹編として考察し、前作では主人公・姉（桂子）が台湾から会いに来た妹に対する態度を自分の内面に築かれていた「壁」——「台湾につながるレッテルを拒んでいた自分の中にある「壁」⁶⁷として捉え、そのあとの「烏秋」に主人公・姉（八重）の故郷帰りとは妹に会ったことを通して、「その「壁」を越えたという仕組みを見出すことができる」⁶⁸と指摘している。要するに、「むすめ」にとどまらず、「母の傑作」と「烏秋」においても真杉が台湾や母親へのアンビバレンスが見られると考えられる。そこで、1934年に真杉の妹が台湾から訪れた⁶⁹ことが描かれた作品「母の傑作」、少女時代で母との不和から1939年に一回目の台湾訪問で母親と和解に至る経過が描かれた作品「むすめ」、1941年に二回目の台湾訪問のことが描かれた作品「烏秋」という台湾の家族と再会することを題材にした三つの作品については、更に深く考察し、真杉の内面にアプローチする余地があると思える。

第3節 問題意識、研究方法及び研究範囲

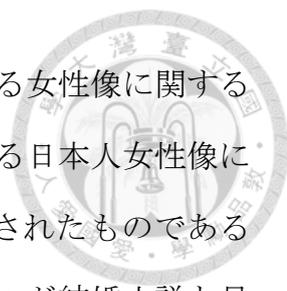
1. 問題意識

今までの先行研究では、戦前から戦後に至るまでの真杉静枝の主な著作における台湾表象や戦時下の戦争協力の作品に示されている皇民化政策に対する協

⁶⁷ 范淑文「真杉静枝文学に語られる「壁」——「烏秋」、「母の傑作」の主人公たち」『お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所比較日本学教育研究部門研究年報』第14号（お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所、2018年）、129頁。

⁶⁸ 范淑文、前掲論文、129頁。

⁶⁹ 『婦人文芸』1934年7月創刊号に掲載されている随筆「私の妹」に「十年振りに会ふ妹である（略）私は、財布に金をこしらへて大阪まで、妹を迎へに行つた」という記述がある。『婦人文芸：復刻版』第1巻（1987年、不二出版）100-101頁を参照。



力的姿勢と批判が論述されてきた。且つ、真杉静枝文学における女性像に関する研究は、「駅長の若き妻」、「南方の墓」、「南海の記憶」における日本人女性像に関する論及は植民地台湾の表象を解明するための手掛かりとされたものであるという李氏の論考がある一方、高良氏論文では「駅長の若き妻」が結婚小説と見做され、作中における女性人物を通して真杉の女性観と結婚観が明らかにされる。そして、呉氏の著書で提起された自伝的小説「むすめ」と「或る女の生立ち」における母娘関係は、真杉と台湾の愛憎感情を示している。さらに、范氏の論文では女性の結婚や人生を姉妹の目を通して見詰めることが描かれている「母の傑作」と「烏秋」両作品を着目し、女性たちが直面している困難をどのように越えるのかを考察する。以上整理してきたように、真杉静枝文学における女性像に関する先行研究は、一つか二つの作品に偏っており、真杉の全作品にわたった分析を行った研究は管見の及ぶ限りではまだ検討する余地がある。

なお、竹中信子『植民地台湾の日本女性生活史 大正篇』は、大正初期の日本人女性の境遇を提起し、とくに花柳界女性という日本人下層民の悲惨さに注目し、彼女たちの日本社会及び台湾総督府政治に無視されること⁷⁰を批判し、台湾の日本女性の大部分が模範的良妻賢母であり、読書の必要はないと思うこと⁷¹を指摘している。また、竹中氏は昭和初期の台湾女性の解放運動を提起する一方、台湾在住の日本既婚女性が逆に女性問題を避けていること⁷²を指摘している。それに、植民地台湾に住む日本人には「辺境に住んでいることによる“田舎者コンプレックス”が意識の底にあって、内地の人に対して気後れしてしまう。胸を張って台湾生まれの台湾育ちです、というのに勇気を要する時代だったのである」⁷³と竹中氏が植民地台湾の日本人の弱い部分を分析している。そのような当時の

⁷⁰ 竹中信子『植民地台湾の日本女性生活史 大正篇』（田畑書店、1996年）40-41頁。

⁷¹ 竹中信子、前掲書（1996年）、193-194頁。

⁷² 竹中信子『植民地台湾の日本女性生活史 昭和篇〔上〕』（田畑書店、2001年）19-20頁。

⁷³ 竹中信子、前掲書（2001年）、20-21頁。

台湾社会に生きていくことは日本女性にとってはなおさら複雑で難しい課題であることは推測できるであろう。

そこで、本論文は 1920 年代から 1940 年代の日本植民統治期における台湾地方社会を背景に、日本の女性人物を主題として数多くの作品の女性像を考察することによって、私の強い真杉が描いた女性人物は恋愛、結婚、人生などに直面した時どのような姿勢を構えているのか、という問題を明らかにしていく。そして、女性作家である真杉が女性を描いている時、その自我はどのように物語に投影しているのかをも究明してみる。

2. 研究方法及び研究範囲

真杉文学における女性像を分析する際、どのような視点から捉えるか。水田宗子によれば、文学に描かれた女性像を見ていくために二つの視点——「制度として女性を見る」と「女性の自我の表現」——が必要である⁷⁴。制度として女性をみる視点とは、「女性は男性と同様に制度内に生き、制度の制約のもとにある生き方を選ぶ、あるいは余儀なくされるものと考え、女性の生き方を制度との関係において見ていく視点」⁷⁵であり、制度に先行する女性の本質があるのではなく、制度が女性を作ると見る視点である。そして、女性の自我の表現という視点とは、「女性の自我——その充足と表現への意志——を文学はなんらかの形で反映してきた、と考える視点」であり、「女性の生き方がある型で提出され、女性像が形づくられ、あるいは女性の〈本質〉が語られる背後には、女性の自己主張と、その自己表現に対処する男性の自我および制度との葛藤があると見る」⁷⁶ことである。よって、この二つの視点は相互に深くかかわっているとよい。

⁷⁴ 水田宗子『ヒロインからヒーローへ』（新版）（田畑書店、1992年）、25頁。

⁷⁵ 水田宗子、前掲書、25頁。

⁷⁶ 水田宗子、前掲書、25頁。



このように、真杉文学に描かれた女性像を「女性の自我」という視点から考察していくと、これらの女性人物は、制度内で期待される性役割を果たす女性であるか、制度内の調和からはみ出す女性であるか、または自我意識を制度内の役割に封じ込めるか、といったことを明らかにすることができる。

本論文はデビュー作「駅長の若き妻」をはじめ、「異郷の墓」、「南方の墓」、「南海の記憶」、「母の傑作」、「むすめ」、「鳥秋」という計7本の作品を扱って討論する。まず、真杉文学の出発点と言える身辺小説「駅長の若き妻」、「異郷の墓」、「南方の墓」、「南海の記憶」を取り扱い、恋愛と結婚に苦闘する女性たちの描かれ方について考察する。次に、3篇の自伝的小説を取り上げ、「むすめ」に描かれた母娘関係の葛藤に注目し、少女から女性への成長の過程において母の価値観を否定し、自我を求めた主人公梶子の女性像を考察する。最後、「母の傑作」と「鳥秋」に描かれた二人姉妹の生き方に注目し、母親でもあり「未亡人」⁷⁷でもある真杉の妹をモデルにした女性人物の造形を分析する一方、伝統的な価値観に縛られない姉の女性像を考察する。

より明確に見えるように本論文で研究対象とする作品を新たに表1のように示しておく。

表1 研究範囲

発表時	作品	女性人物	ジャンル
1927. 08	「駅長の若き妻」	美那子	身辺小説
1929. 01	「異郷の墓」	医者 of 妻	
1934. 01	「南方の墓」	駅長の娘	
1936. 08	「南海の記憶」	志保子	

⁷⁷ 『記者ハンドブック』第13版（共同通信社、2016年、494頁）によると「未亡人」は性差別語である。本論では、当時の慣用語としてそのまま使用した。



		絵描きの妻	自伝的小説
1939. 07	「母の傑作」	桂子／妹	
1940. 05	「むすめ」	梶子	
1941. 06	「烏秋」	八重（姉） 照枝（妹）	

以上のように、まとめて言えば、本論文の研究方法としては女性の自我という視点から真杉文学における女性像を考察した上、その自我はどのように理解され、表現されたのかを究明してみる。なお、作品に描かれた主人公にとどまらず、それ以外の重要な女性人物をも考察の射程に入りたい。

第4節 論文構成

前述した研究動機、先行研究と研究方法を含め、さらに今節の論文構成を加えたのは本論文の序章の内容になる。「身边小説における恋愛と結婚に苦闘する女性たち」、「「むすめ」一母との葛藤を通しての自分探し」、「「母の傑作」「烏秋」一姉妹をめぐる物語」との3章によって構成される。各章の梗概は下記の通りである。

第1章 身边小説における恋愛と結婚に苦闘する女性たち

第1章では、デビュー作「駅長の若き妻」、「異郷の墓」、「南方の墓」また「南海の記憶」という4篇の身边小説を中心に、作品に登場する恋愛と結婚に苦闘する女性たちの描かれ方について考察する。



第1節 「駅長の若き妻」—自己投影の最初の作品

第1節では「駅長の若き妻」の妻・美那子に着目し、好きではない人と結婚した彼女はいかにこのような結婚生活に対処するかを探っていく。異郷における既婚女性の生き方を考察することによって、美那子の婚姻制度に対する考えを明らかにしたい。

第2節 「異郷の墓」—異郷で客死する女性

第2節では「異郷の墓」に描かれた内地から植民地台湾へ新しい生活を始めたようとした医者妻が、結局夫に殴られて異郷で客死したことに着目し、妻の死の意味合いを考察する。

第3節 「南方の墓」—従順な女性と反抗的な女性

第3節では「異郷の墓」の増補版とされた「南方の墓」を取り上げ、駅長の娘が婚約を破棄して異郷の台湾を家出することと唐山氏の娘の婚約に着目し、駅長の娘と親友である唐山氏の娘の言動を読み解ける。

第4節 「南海の記憶」—居場所を探す女性たち

第4節では「南海の記憶」を取り上げ、息子と夫を日本に残したまま愛人と共に異郷へ逃避し、婚外恋愛の絵描きの妻に焦点を合わせ、内地の都会生活に憧れて植民地台湾を出た志保子と比較し、二人の造形と作中に劇作家ストリンドベリの「ダマスカスへ」部分の台詞を引用する寓意も探求していきたい。

第5節 結び

第5節では前の4節の考察を通して、本論文で究明しようとしている真杉静枝の身辺小説における恋愛と結婚に苦闘する女性たちの描かれ方を把握してみ

る。



第2章 「むすめ」一母との葛藤を通しての自己探し

第2章では、「むすめ」に登場した主人公梶子が母親との葛藤に注目し、母親との不和からやがて和解に辿り着くまでのプロセスを通して、梶子の自己成長及び自意識からその女性像を明らかにする。

第1節 母との葛藤

第1節では、梶子の少女から女性への成長過程において母親との葛藤に注目し、幼少期の梶子と母親の関係に亀裂が生じた原因を考察した上で、梶子の思春期で母親に対する態度を明らかにし、さらにミソジニーの観点から母と娘の関係を読み解いていく。

第2節 支配的な母と反抗的な娘

第2節では、支配的な母親に結婚を強いられた梶子は、作家志望で夢を追いかけるため家から出奔し、母親の支配から逃れることを通して自分の人生の支配権を取り戻すという家父長制への反抗の姿勢を明らかにする。

第3節 自己への再認識

第3節では、都会で十数年も生活している梶子の心境と恋愛に対しての考え方を究明する。そして、十数年ぶりの里帰りの心境の変化を考察していきたい。

第4節 結び

第4節では、梶子が母親との葛藤を究明した上で、母親との不和からやがて和解に辿り着くまでのプロセスを通して、梶子の自己成長及び自意識からその

女性像を明らかにする。



第3章 「母の傑作」「烏秋」—姉妹をめぐる物語

第3章では、「母の傑作」、「烏秋」に登場した姉妹二人を中心に、彼女たちが恋愛・結婚に対する価値観及びその女性像を考察していく。

第1節 「母の傑作」—見せられたくない女の姿

第1節では、「母の傑作」の主人公桂子と12年ぶりの妹に着目し、若くして未亡人になってしまった妹及び結婚に至らなかった恋に悩んでいる梶子、その対照的な二人の生き方と言動を考察する。

第2節 「烏秋」—たくましい女の生き方

第2節では、「烏秋」の主人公八重と未亡人の妹・照枝に焦点を合わせ、姉・八重の視点を通して、植民地台湾で生き延びるために闘う照枝の姿を考察してみる。

第3節 結び

第3節では、前の2節の考察した姉妹二人が恋愛・結婚に対する価値観、言動を通して、姉妹二人の女性像を考察する。

結論

結論では、第1章から第3章までの考察結果をまとめ、これまであまり注目されていなかった真杉文学における女性像の特徴を解明する。そして、私の強い真杉静枝が女性を描いている時、その自我は物語にどのように投影しているかを結論としてまとめてみる。



第1章 身辺小説における恋愛と結婚に苦闘する女性たち

真杉静枝は坂口安吾に「平安朝の物語の中の女達」にたとえられ、「彼女達は身も世もあらぬ恋に泣き、ときに静かな無常をさとり、また四たび五たび、昔に変らぬ身も世もあらぬ恋に苦しむ。ただ女そのものの心情の世界が、生き、愛し、歎いてゐる」と評価され、真杉の作品には「古い物語の女達の、あの心情の世界のみが、ひたむきに語られてゐる」¹と指摘されている。且つ、岡田禎子は台湾を出奔して自立した真杉の姿を「どういふ情熱がどういふ法則によつてそれをさせるのか、人生が自分のためにのみあると考へてゐる人のやうに、大胆で、あたり構はない」²と評価している。それに、真杉の恋愛に対する態度について、岡田氏が「恋愛とは、捧げつくすこと以外のなにごとでもない。彼女の情熱は、自分の身をおくに相応しい殿堂を探し歩き、見つけたと思ふと全身を投出し、殿堂の見事さと捧げるものの無様さとの比較に思ひ悩む」³と指摘している。

本章では、「駅長の若き妻」、「異郷の墓」、「南方の墓」、「南海の記憶」に描かれた恋愛と結婚に苦闘する女性について女性の自我の意識に注目しながら論じていく。四つの作品には様々なタイプの女性が、どのように描かれているのか、彼女たちの境遇についての考察を通してそれらの女性像を明らかにする。

¹ 坂口安吾「序〔真杉静枝『小魚の心』〕」『坂口安吾全集 02』（筑摩書房、1999年）543頁。

² 岡田禎子「跋」『小魚の心』（『近代女性作家精選集 18巻』ゆまに書房、1999年）315頁。

³ 岡田禎子、前掲書、316頁。



第1節 「駅長の若き妻」—自己投影の最初の作品

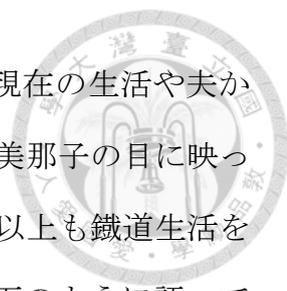
1. 異郷における既婚女性の生き方

真杉静枝のデビュー作「駅長の若き妻」⁴は、1927年に『大調和』に発表され、後に『その後の幸福』（1940年昭森社）に収録された作品である。本作は真杉の少女時代から住んでいた台湾での望ましくなく不幸せな結婚生活と、そこからの脱出の熱望を主人公である美那子に投影した物語と思える。高雄でK駅の駅長の新妻である美那子は、17歳年上で面白くなく張り合いのない夫吉川と結婚している。朝6時に起きて汽車の時刻表に従い、お役目のようにご飯を作るといのが美那子の日課である。美那子は自分の結婚生活に対して次のような考えを持っている。

十八位でお嫁に来て終わつたんだ、私は間違つた結婚をして仕舞つたんだ。今が十九と、もう落着いてはゐられない、二十二や三と云つたら何んなに値打が無くなるだらう。——今の中だわ、本当に今のうちだわ。どうすればいいかしら。——そのうち、私が此処を弾ね破つて出ていく、そんな素晴らしい出来事が出来ないか。——屹度出来る。私がもし万一恋でもしたら、——そんな事があつたら、まあどうだらう。——彼女はぽつと胸を熱くした。「愛しあつた者同志の夫婦つて、どんなだらう。——」近頃それを考へると、いつも彼女の胸はときめいた。

或る時は又、それから今の夫や世間をのり越えて、輝かしい恋愛生活と云ふ様なものの火の様な想像に迄、うつとりひたつて終ふ事もあつた。(230-231頁)

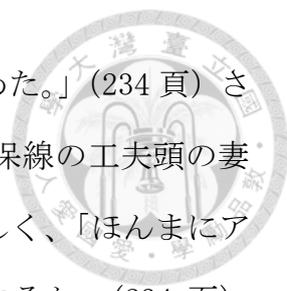
⁴ 「駅長の若き妻」の引用は真杉静枝『その後の幸福』（『近代女性作家精選集 44巻』ゆまに書房、2000年）により、旧字体は新字体に改めた。



上記の引用文からわかるように、美那子は恋愛結婚に憧れて現在の生活や夫から逃げようと思っている。そして、観察者のように眺めている美那子の目に映っている周りの既婚女性の結婚生活を見てみよう。まず、10年以上も鐵道生活をする夫と辛酸をなめた助役の妻は、美那子に自分の境遇を以下のように語っている。

「私程不運な者は此の世にありません。これ丈苦勞して夫につかへて来ましたけれど、あの人は一寸も有難いと思つてやしません。私が病気で死んで呉れないかと祈つてますわ、屹度。私は毎日々々苦しんで貯金をしてますけれど、それもやがて内地へ歸つて商売でも始めねばと思ふ一心からですが、ねえ奥さん、考へると馬鹿馬鹿しいぢやありませんか。万一商売して金持にでもなつてごらんない、あの方は結構私を捨てて若い芸者でも引つぱつて来るにきまつてゐますよ」(232-233 頁)

ここでは、家庭の中における女性の従属性が表れ、社会が求める役割に適應する女性の姿が見られる一方、夫は苦勞を重ねてきた妻をいたわらないことが分かった。しかし、長年の苦勞で夫への不信感が増えてきた妻は、このような苦境を打ち破ろうとするというより、夫に捨てられる不安を抱いたまま生活を続けていく。四棟に別れた舎宅には、助役の妻のほか二人の電信係の妻と保線の工夫頭の妻がいる。若い二人の電信係の妻について、「揃つて結婚後日の浅いせい、終日インコの様に、檻の中の獣の様に、夫へからまりつゐて、あとは昼寝の時間をもつ位で、美那子にはあまり口を利く機会もなかつたが、二人共何だか動物的な印象しかもてなかつた」(233 頁)と描かれている。助役の妻が美那子の耳に入れた話によると、一人は写真結婚で単身九州から嫁入りしてき、内地でいたずらっ子がある。もう一人は母親につれられて内地から嫁入りしてきたが、「山出



しで初々しい彼女を、若い夫はまるで可愛い猫の様に扱つてみた。」(234頁)さらに、四人目の女性が一番よく美那子のところへやってきた保線の工夫頭の妻であり、いつ来ても同じ話を繰り返すのにも気もつかないらしく、「ほんまにアテの指輪迄ぬいていきよりましてん。あの位罪な男がおますやろか」(234頁)と中指を突き出して喋り出したのだった。それは、去年の夏、郷里の大阪からある妻や子供のある男と駆け落ちして台湾へ来たのだったが、台湾の南端のある港町へ来ると、男は彼女を仲居奉公に入れ、自分は阿里山の山奥で一稼ぎしてくると言って別れたのだが、今年の正月になってふらりと彼女のところへ会いに来て、永い間山で病気をしてたくさん借金ができ、その借金で山を引きあげて来られないからと言い、彼女の貯金と指輪まで抜いて出て行って行方不明になったということである。工夫頭の妻は「よく身の上話を含めると、懐しさうに、大阪で働いてみた紡績会社の話を」し、「手振りで軽快な仕事の事や、月末に精を出した程、余計に金がとれる楽しみなぞを云つて、「旅費さへ出来たら、又大阪へいにたうおます」と、附加へて、いつも淋しい顔」(235頁)をした。

美那子にとって「此処の人たちに向き合ふときながら、墓場をのぞいたような恐怖におそはれた」ことで、「一步々々自分も其処へずり込むのかと思ふと、彼女は身を震は」(235-236頁)せた。要するに、彼女たちの結婚生活は、正に人生の「墓場」のようなものである。そして、美那子は「此処へ来て三月程の間に、すつかりこんな人々の間の異端者と云ふ位置に自分を見出し、気だるい一日の時間をもてあまして暮す様になつた」。(236頁)美那子を囲むこれらの女たちは、夫に養ってもらったり従ったりしている「動物的」に感じられ、または異常とも言えるほどの過去や悩みや不満を抱えていながら現状を打ち破ることもしない従属的な女性のみで描かれている。一方、このような生活に適応せずに異端者みたいな存在の美那子は、自分が人生に何を求めているかはっきりと分かっている。引き続き、日暮れに美那子が一人で空想に耽るシーンを見てみよう。



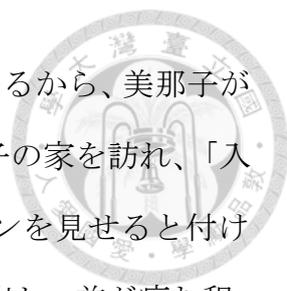
遠くみえない竹藪に包まれた土人の部落から、心を刺す様な胡弓の哀音が流れて来る。それが咽ぶ様な土人の歌の余韻にからまって聞えた。美那子は、異郷、と云ふ針を含めたそんなたそがれの哀愁の中に胸をひたして、にじみ出る一つの淋しさを楽しんだ。すつかり暮れおちると、闇に紛れて、城の前の叢へ出かけた。(中略) それに腰かけ、じつと身を闇の中におちつくと、それから、とりとめの無い夢に耽る事が、美那子の最後の日課である秘められた唯一の楽しみだった。(中略) 彼女は幻の楼廓を建てて、現実では到底話にもならない、まぶしい程な華やかな境遇に、自身を乗り出させ、そこで彼女は、思ふ存分、有り丈けの理想を生かしてみ、ひそかに胸を高鳴らせた。そして——さうなつたら何んていいんだらう——。

果ては、暗闇の中で、にッと笑ひこぼした我れに、彼女はハツと気付かねばならなかつた。夢はもろく、サツと消えて、つまり暗がりの中に身をしやがませて足をしびらせ、こんな気遣ひ染みた空想に迄耽らねばならない程の淋しい彼女の現在が、いやと云ふ程そこへ蘇つて来るのだつた。さうすると、彼女はいつもそこで泣いて仕舞つた。(237-238 頁)

引用は長くなるが、以上の美那子の叙述から、結婚で異郷に居残る美那子は現実と妄想の狭間で彷徨って無力感を抱いて涙に暮れるばかりであったことが明らかである。ここでは婚姻制度に苦しむ女性の姿が見られ、婚姻制度が女にとってもはや女性の自立と実現を阻む壁となった。さて、そうした状態の中で、美那子はこの境遇を如何に改善するのか、次項で考察していく。

2. 救われたい美那子

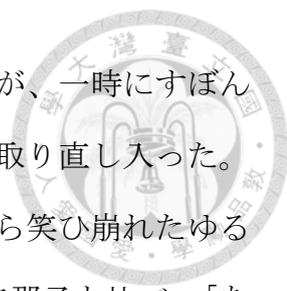
物語の後半では、美那子が恋に落ちた場面が描かれている。相手は隣の大駅か



ら助勤に来ている助役の沼田であり、彼は若くて仕事に腕があるから、美那子がすぐ沼田に惚れてしまう。ある日、沼田が頼みがあって美那子の家を訪れ、「入るなり玄関で抱へてみた上着を投げ出して、握つて来たボタンを見せると付けて欲しいといふ」ことで、美那子は、「うろたへながら針箱を出し、首が痛む程、肩に力を入れて黙りこくつたまま」ボタンをつけてしまった。そして、美那子はまた「ばたばたと立つて、あわてながら茶器を持って、そこへ坐ると沼田は立つて、庭の堀池を覗いてゐる」で、美那子もすぐに「そのそばへ行つた」が、焦っている彼女からは話しかける言葉が「うまく出なかつた」のである。沼田はお茶を飲んだ後感謝せずにはすぐ出て行き、その後ろ姿を見送る美那子は「にはかに一人で家中をはしやぎ度くなつた」(241 頁)と喜んでいる。沼田は頼みに美那子の家を訪れた場面から見ると、沼田は紳士的でなく身勝手な男性である一方、恋に落ちた美那子は献身的な姿勢を見せられることが分かる。

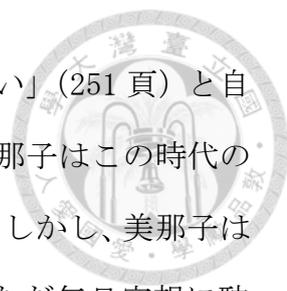
ある時、沼田は美那子の読みさしの書物をみつけ、読書好きな彼女に共感を示した。それによって、美那子は初めて理解し合える人に出会ったと考えた。「純粹で、熱情家で、そして、果てしない程な仲のびした広い社会に立つてゐるあの人は、一人の可憐な女を救つて、立ちあがり、戦う事位は平気な人だ」(245 頁)と美那子は眠れなく、救済者のような沼田のことを考えている。それ以来、美那子は暇な時間を「ありつたけ沼田の幻との会話」(246 頁)に埋め尽くした。その幻の沼田は、「しつかりしなければいけない。勇氣と確信さへあれば、私たちはどんなにしても生きられる。あなたの様にあやまられた結婚で、一生身を生き埋めにしてゐる女の人が、今の世の中にどれ丈け多い事か。それを婦徳だと心得されてゐるのだから哀れ過ぎる」(246 頁)と美那子の空想の中で彼女にそう言った。そうした中、美那子は「熱病にかかつた程、しつこく沼田の幻に向き合つて暮した」。(248 頁)

しかし、ある日美那子が借りた本を返すため沼田の家を訪れたとき、丁度沼田



の家から出てきた二人の芸者をみかけた。「急に開いてみた花が、一時にすぼんだ様な泣き出し度い気持」(248 頁)になった美那子は、気を取り直し入った。が、目に入った沼田は「軽快でキチンとしてゐなくて、何かしら笑ひ崩れたゆりみが、まだ顔に残つてゐて」(248 頁)、さらに芸者の美貌を美那子と比べ、「あなた程美しくない。僕はさう思ふ」(248 頁)とその語尾を「ぐっと沈めて、何か強い情熱がこめられてゐた」(249 頁)ように美那子に話した。軽薄な沼田は、その日から美那子の空想の中で「明るい勇者」(249 頁)として現れることができなくなった。それから一週間程会わずに過ごした沼田から、妹の結婚に関するお願いの手紙を美那子に送り、その翌晩美那子は「心の全部を云つて仕舞ふ決心」(249 頁)をして沼田の家を訪れた。結局その夜、沼田の家を走り出した美那子は、「吉川さんにわかる様になつたら、やめればいから——」(250 頁)という沼田の一言で「悲惨に裏切られた」(250 頁)ので、今まで彼女が見ていた空想や理想は全部消えていった。なぜなら、美那子は沼田が自分を連れてこの墓場を逃げ出せると勘違いしたのである。「泣きくづれるわけには行かなかつた」(250 頁)美那子は自分の境遇のどこにも、「泣きくづれてもいい安息所の無い事を悟らねばなら」(250 頁)ないことが分かった。

さらに、美那子は夫に今夜の事を謝るよりも「あなたの罪だと云つて恨み度かつた」(251 頁)と考えており、「冷えびえしてゐて、夫らしい味ひも無い生活にあなたが平気だから」(251 頁)と弁解しながら他の男を慕うという自分の不貞行為を正当化する。相愛関係よりむしろ肉体関係のほうが沼田の意図であったから、沼田の好意を勘違いした美那子がそのような自己を嫌悪するより、全部の責任を無関心な夫へ押し付けることにした。彼女は自分を「濁流に投げ込まれた人」(251 頁)にたとえ、「常に何かを求めて喘いでゐる自分の日々を考へると、沁みじみいたはり度くなつた」(251 頁)ので、「溺れるようとしてゐる者にとつて、相手がわらすべか、檻の木か見定めてゐるひまがあるだらうか」(251 頁)、



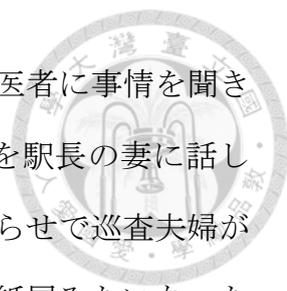
「此のままではいつ又私に、こんな事がおこらないとも限らない」(251頁)と自分の置かれた状況をあらためて認識した。以上から、主人公美那子はこの時代の女性を束縛していた婦徳の枷に反抗しようとする女性である。しかし、美那子は一人で自立して真正面から制度に立ち向かうことができず、ただ毎日空想に耽って心の中で救済者のような男の出現を祈っている女性にとどまっている。言わばまだ男性に依存している女性ではないだろうか。

第2節 「異郷の墓」—異郷で客死する女性

「異郷の墓」⁵は1929年1月に『若草』で発表された作品で、植民地台湾の高雄に芸者をしていた医者の妻が異郷で客死する事件を扱った短編小説である。小説の題名の「異郷の墓」は、前節で言及した作品「駅長の若き妻」の異郷での結婚生活——「墓場」——を思わせる。「異郷の墓」は高雄の古城（現、左営）を舞台にし、古城の背後の海に面した小さい土人町に、たった二つの日本人家族がある。一つは背の低く髭の長い医者であり、もう一つは派出所の巡査部長である。一方、古城駅の駅長と駅長の妻は駅舎の近くに住んでいる。医者妻はこの間まで台南で芸者をしており、肺結核にかかった後芸者ができなくなり、借金が増えてきたような状況で医者が「病気は癒してやる、自分は財産がある」(18頁)と彼女を騙して引き取った。ある夜、九時に過ぎた頃、利久下駄を履いた医者妻が夫の不在の時、急いで駅に着いたところを駅長の妻に見られた。駅長の妻が医者妻に声をかけ、医者妻は「驚いたやうに顔を振り向け、同時に腰をまげてお辞儀をした。血の気の無い神経質な笑顔だった」(15頁)に見えた。その夜、「非常な血走つた目をしてみた」医者妻は、「時々戸外へ向けた唇が、胸の中の咽び泣きで震へて」(16頁)おり、高雄行きの終列車に乗った。

翌朝、彼女の遺体が城の隣りの小山の下で発見され、殺鼠剤を飲んで自殺した

⁵ 「異郷の墓」の引用は『若草』5巻1号（宝文館、1929年）により、旧字体は新字体に改めた。



疑いであった。駅長夫婦と巡査夫婦は、医者之家に駆け込んで医者に事情を聞き取り、その場で巡査の妻はその死因が医者にあるという推測を駅長の妻に話し出した。それは、先日医者と妻は酷い喧嘩をして近所の人知らせで巡査夫婦が様子をうかがいに来、目に映ったのは「酷く殴られたあとの、紙屑みたいなつた医者之妻が、此の土間之隅にへたばつてゐて、医者は医者で浴衣之袖の千切れた格好で、真蒼に怒つてゐた。妻の方はさめざめと泣いてゐたし、夫は、『生意気だ、生意気だ。』を繰返してゐた」(18頁)場面であつたということである。さらに、巡査之妻の話によると、16歳之継子と医者はこの間から毎日虐め、継子が彼女をお母さんと呼ぶどころか、「下女みたいに、おつね、つて呼び捨て」(18頁)肺病之薬も飲ませないという状況であつた。そうした状況之中で、医者之妻之念願は「一人前之女らしいカタギ之人之気持ちで死に度い」(19頁)と巡査之妻が言つた。

以上から見ると、病を患つて借金も返せなく、医者之家に身を寄せるしかない医者之妻は、夫に付属する奴隷みたいに毎日のように暴力を受け続けても逆らふことができなく、結局、家庭内暴力で苦痛に耐えられない彼女は、夫に殺されるより自分で自己之命を絶つたその心境が分かるだろう。妻を自殺に追い込んだ医者は、妻之寝棺を「時々上眼で盗み見」(19頁)、そして火葬が始まつたとき、医者之顔が「不動之やうにうつつた」(19頁)。小説之終盤では、みんなは墓場から戻る途中、「押し黙つた皆之心を貫ぬいたものは、内地之故郷へ急ぎ度い気持ちだつた。『こんな所で、死に度くないなあ——。』誰かゞ云つた。——」(19頁)という異郷で客死することを危惧する様子が描かれてゐる。このように、「異郷之墓」における医者之妻は夫に支配、抑圧、虐待されてから苦境から逃げる手段として自己之命を絶つたことが窺える。家父長制のような男性中心之社会制度による女性之抑圧が描写されると同時に、自ら命を絶つたのも一種之その制度へ之反抗、男性社会へ之不屈ではないだろうか。



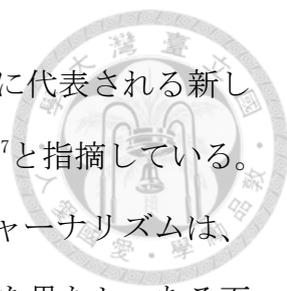
第3節 「南方の墓」—従順な女性と反抗的な女性

「南方の墓」⁶は、1934年1月『桜』に発表された作品であり、「異郷の墓」と同じく医者の妻の自死が描かれており、また、親に強制結婚させられる駅長の娘と巡査部長唐山氏の娘は人生の行方に悩んでいる場面が数多く描写されている。駅長の娘が17歳の時強制的に結婚させられ、相手はある駅の助役である。しかし、結婚してから一年目の秋、駅長の娘は夫と喧嘩して嫁入り先から実家へ帰ってきてしまった。親友である唐山氏の娘は、その消息を聞いたあとすぐ駅長の家を訪れた。駅長の娘は親友の顔を見た途端、彼女の手を引っ張って昔よく通った秘密基地のような場所へ行った。そこで、駅長の娘が親友に自分の境遇と婚姻観については次のように述べている。

愛してもみない男に、娘の身をささげる。——それは、何といふ情け無い事だらう。——駅長の娘は、涙が出てならないのだ。それ程、大きな悔ひが、自分のものだつた。もし婦人雑誌が教へてくれなかつたら、その情け無さには、気付かずにすんだかもしれないけれど、気がついてみれば、自分が、その実験者であつたのだ。 (297頁)

「良妻賢母」また妻は夫に従うことが当たり前の社会で駅長の娘は育った。しかし、彼女は運命に身を委ねるのではなく、その勝気な性格を持っていて夫から離れた。一方、下線部により、女性向けジャーナリズムである女性雑誌は、貴重な情報源として女性の生活の中で重要な位置を占め、女性読者の価値観形成に重要な役割を果たしていたことが分かる。それに、木村涼子は「明治期の婦人雑誌の主流は上流家庭の婦人を対象に良妻賢母を目標に掲げた家庭記事中心のも

⁶ 「南方の墓」の引用は真杉静枝『小魚の心』（『近代女性作家精選集 17 巻』ゆまに書房、1999年）により、旧字体は新字体に改めた。



のであったが、1910年代には民主的な風潮を背景に、『青鞥』に代表される新しいタイプの婦人雑誌の流れが生まれ、多様化がすすんでいく⁷と指摘している。このように多様なタイプの女性雑誌を発達させた女性向けジャーナリズムは、「ある面では学校教育における標準的な女性像を補強する役割を果たし、ある面では人々の実際の生活に対応し、さらにある面では因習的な女性像を打破し、国家の期待の枠内にとどまらない女性像を創造し普及させる機能を果たしていた」⁸と木村氏が指摘している。つまり、木村氏の指摘に従えば、駅長の娘は大正期の女性雑誌を通して自分が因習的な社会に影響されたことに気づき、それを打破して新しい生き方を目指そうとしていると言えよう。さらに、結婚以来ずっと虐待を受けつづけてきた駅長の娘が自分の経験と周囲の女性の状況を以下のように語っている。

舎宅の奥さん達は、餘程、馬鹿で無い限り夫に殴られてゐる。碁を打つてゐる夫を、食事に呼びに行つて殴られ、口答へをしたと言つて殴られ、婦人雑誌を読む奥さんは、大かた男にきはれてゐる。「嬢の奴、ぶんなぐつてやつた。」と言へば、その夫は、男仲間で、あがめられる。何処迄行つても、女は、女婢でしかあり得ない。(298頁)

引用から見ると、彼女たちにとって夫から暴力を振るわれることは日常茶飯事である。夫は妻を虐待しつづけるのは、「男仲間で、あがめられる」(299頁)とあるように、まるで、そのような振る舞いによって自己の優位性をくりかえしくりかえし確かめ、保つためのようなものであった。一方、「知識を身につけたい」あるいは「本を読みたい」という妻は夫に嫌われるのも、男性の優位性を保つ目

⁷ 木村涼子『〈主婦〉の誕生：婦人雑誌と女性たちの近代』（吉川弘文館、2010年）23頁。

⁸ 木村涼子、前掲書、23頁。



的の一つではないだろうか。一方、唐山氏の娘は自分にも不本意な縁談がきたと
いうことを駅長の娘に話した。それを聞いた駅長の娘は「痛い程強い視線」(299
頁)を唐山氏の娘に投げ、「しつかりしなくちや駄目よ」(299頁)、また、「あんな
た、あんな人好きぢや無いんでせう」(299頁)と親友に注意を与えた。そして、
唐山氏の娘ははっきりと「うん、とても嫌ひ」(300頁)と答えるのであった。
しかし、その日から十日後、唐山氏の娘の手紙が駅長の娘に届いた。

「私は、矢張り、とてもとても不幸な娘です。母に、よくよく言ひきかされ
てみれば、私のやうな者は、決して、理想通りの夫を持つやうな事は出来な
い。女学校も卒業してゐないし、親の言ひつけに反対する資格なんか無い娘
だといふ事が、よくよく判りました。何卒私を哀れんで下さい。あなたも、
矢張り、御主人の方にお帰りになる方が本当だと思ひます。」(中略)「矢張
り吉名さんと結婚する気になつたんだ。」からだを火傷したやうに、じいん
と熱くしながら、駅長の娘は手紙を読んだ。(300頁)

手紙の内容により、親に説教された唐山氏の娘は自信を奪われて自分のこと
を卑下するようになったことが分かる。そして、女性は男を選ぶ権利がないの
で、男性に選ばれるよりほかはないという唐山氏の娘の考え方が読み取れる。親
友である駅長の娘に夫のそばに戻った方がよいと勧告し、母親に決められた、自
分の好きでもない男と結婚することを漸く決心した唐山氏の娘は、ある意味で
彼女は家父長制に従順な女性であると言えよう。駅長の娘にとって、その家父長
制や婚姻制度に服従する女性は「自分を見捨てた」(301頁)行為である。そし
て、こうした女性がいつしか自分を見捨てた原因は「娘の前で毎日のやうに嘆い
てみせる」(301頁)母親であった。駅長の娘は母親からの愚痴に対し「こんな
愚痴をきいてゐるより、殴られても、智識慾の無い夫のそばに帰つてゐる方が、

ました」(301 頁)とさえ思う。「南方の墓」の終盤で駅長の娘は、「旅費しか持つてみないのに、彼女は、身寄りの無い、東京へ行つた」。(314 頁)そのような結末は、家出を通して家父長制への徹底的な抵抗であろう。

このように、「南方の墓」では、駅長の娘の、女性を支配している家父長制への命がけの反抗やそこから離脱しようとする自我への目覚めは家出の行為で具現しているのであろう。こうした駅長の娘が求めようとする家庭は、女性を抑圧、束縛する男尊女卑・家父長制の封建的な「家」ではなく、恋愛に基づく夫婦対等な家庭である。駅長の娘と対照的に、唐山氏の娘は駅長の娘の生き方に憧れながら、一方で母親が進めている自分の縁談にとうとう反抗できず、現実を受け入れたのである。

第 4 節 「南海の記憶」一居場所を探す女性たち

1. 既婚女性の恋の行方

「南海の記憶」⁹は、1936 年 8 月『婦人文芸』に発表された作品であり、東京で演出家である志保子が深夜にパニック発作に襲われて眠れなくなるから、スウェーデンの作家ストリンドベリ (Johan August Strindberg, 1849-1912) の戯曲『ダマスクスへ』(Till Damaskus, 1898-1904) の脚本を読みながら、10 年前高雄で出会った絵描きの妻のことを回想している物語である。

当時、少女の志保子は岬の突端に立っていて台湾の南端にあたる高雄の港の景色を見ていた。海の景色を見ている志保子のそばには、親友である美しい絵描きの「妻」がおり、二人で志保子の都会に出たい望みについて次のように会話している。

⁹ 「南海の記憶」の引用は真杉静枝『小魚の心』(『近代女性作家精選集 17 巻』ゆまに書房、1999 年)により、旧字体は新字体に改めた。



「ああ、私だつて屹度。」私は胸の底から突きあげられたやうに強くいつた。

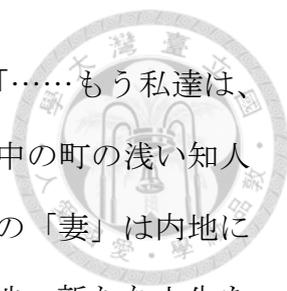
「東京へ出たい、と仰言るの。都会といふところは、昨日もいつたけれど、衣裳のやうなものですからね。」

着る人によつては、どんなに美しくもなれば、どんな醜いものにもなる。と私は心でそれに続けたが、「私だつたら屹度、立派に着こなしてみせますわ。」といつた。

「でもねえ。……」夫人はなほ不安げに声を落し、薄暗の中で美しい眉を考へ深げに伏せた。(中略)

「ま、いつてらつしやい、いつてらつしやい。衣裳が似合はないと気付いたら、早速ぬぎ捨てればよろしいわ。」すぐ思ひ直したふうにいつて、奥さんは快活に顔をあげた。(201 頁) (下線は筆者による。以下同様。)

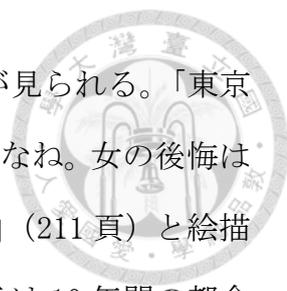
下線が付けてある文により、絵描きの「妻」は都会を衣装にたとえば、生き方を着こなしと見做すことができよう。都会という衣装を身に着きたい志保子は、その着こなし方に自信が持て、自分が望む生き方を選択し自分らしい生き方をするという考えを持っていると見られる。一方、絵描きの「妻」は志保子の自信に満ちた発言を聞いた後心配げな様子であったが、環境に馴染めないと感じたら、その生活環境を変えればよいと志保子に勧める。ところで、東京からきた絵描きの「妻」と「夫」はお互い気持ちよく付き合い、「妻を殴ることが常識になつてゐた」(202 頁) 植民地官吏の家庭と違っている。こうした「夫婦」の付き合い方が志保子には「何か素晴らしい小説をでも読んだ時みたいに満足であつた」(203 頁) ことである。しかし、ある日絵描きの「妻」の内地に置いてきた6歳の息子五郎の現れで、絵描き「夫婦」の平穏な日常に大きく影響を与えた。五郎の実父がその後東京から追いかけてきたから、絵描きの「夫婦」はやむをえず高雄から台中へ出発することにしたのである。旅館に絵描きの「妻」に会いに来



た志保子は、旅館の女中から一通の封筒を手渡された。手紙に「……もう私達は、東京へは帰れない身の上になりました。とにかくこれから、台中の町の浅い知人をたよつてまいります……」(208 頁)と書いてある。絵描きの「妻」は内地に息子と法律上の夫を残したまま、絵描きの愛人と二人で植民地へ新たな人生を始めようとするが、五郎の出現で再び現実に引き戻されて別の町へ引っ越しを余儀なくされたのである。その噂を耳聡く聞きつけた植民地の人々が「駆け落ち者」という言葉で絵描きの「妻」と愛人にレッテルを貼り、その言葉について志保子は「私の胸の至純なものを横暴にけがした」(208 頁)というような気持ちになった。

1年後、志保子がようやく東京へ向かう日に、船に乗る前に台中の町に絵描きの「妻」に会いに行った。そこで、絵描きの愛人と五郎の生活に大きな変化が目映った。「土人の子供達にまじつて、煉瓦を積みあげる遊びをしてゐる」五郎は、「みちがへるほど、よごれた子供になつて」おり、また、「トタンで屋根をふかれたバラック建てのとある一軒」家に住んでいる。志保子は部屋に入ると狭い一間きりの座敷で「針仕事をしてゐた大柄の婦人」が目に入った。絵描きの「妻」の姿は「無雑作に後ろで束ねた髪毛は、すっかり色あせてゐたし、化粧を忘れた頬は、台湾のどこでもみかける、あの土色に近く、カサカサしてゐた」と描かれている。その苦労を重ねた絵描きの「妻」の姿に志保子は悲しい気持で「いよいよ私、東京へたちますの」と言ったが、絵描きの「妻」がその言葉に「何の感激もみせなかつた」(210 頁)という反応は、楽しみにしていた志保子にとって期待外れであった。

一方、絵描きの「妻」の話では、愛人の絵描きは絵筆を捨てて鉄道の運送会社に雇われ、僅かな収入で酒と女に溺れる様子だったのである。彼のことを話す時絵描きの「妻」は、「胸からあふれてくるもの」を「せい一つぱいの力でおさへつけたにちがひない。暫くこめかみを痙攣させながら俯いてゐたが、あわてて



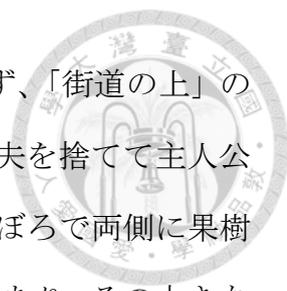
鼻紙をとり出すと、もう涙をかくさうとはせず」という反応が見られる。「東京へいらしても、後悔するやうなことだけは、決してなさいませぬね。女の後悔は男の後悔よりか、よつぽと、とりかへしがつきませぬことよ。」(211頁)と絵描きの「妻」が泣き顔を上げて志保子に言った。その後、志保子は10年間の都会生活で何回も絵描きの「妻」の姿を思い浮かび、彼女の悲鳴が聞こえるような気がした。このように、自分に正直に生きるために婚姻制度から逃れた絵描きの「妻」は、夫を捨てて愛人と出奔したが、結局のところ現実に追われて自由に自分の人生を生きることができなくなったのである。小説の冒頭では、絵描きの「妻」が「衣裳が似合はないと気付いたら、早速ぬぎ捨てればよろしいわ。」(201頁)と言ったものの、志保子が台湾を発つ前に台中で会った彼女はもう台湾の衣装を脱ぎ捨てられなく、その悔しさと無力感が上記の彼女の姿からしっかりと感じ取れる。つまり、絵描きの「妻」にとっては人生や恋愛の選択を間違えれば、男性より女性のほうが挽回することができなくなるのである。ところで、こうした痛ましい境遇に陥った絵描きの「妻」に対して哀れみを抱く志保子は、10年の都会生活で自分の生き方と恋愛に対する悩みや後悔はないか、また『ダマスクスへ』が引用されたのは何を意味しているのか、次項で明らかにしたい。

2. 理想を追い求める志保子

「南海の記憶」では、スウェーデンの作家ヨハン・アウグスト・ストリンドベリ¹⁰ (Johan August Strindberg, 1849-1912) の戯曲『ダマスクスへ』¹¹ (Till Damaskus,

¹⁰ ストリンドベリがその有名な自伝小説『大海のほとり』を始め、その他数多くの作によって小説界にも重きをなしている。また、戯曲作家として非常な貢献や影響をもたらした。彼の戯曲『令嬢ジュリー』特にその序文は自然主義戯曲の為に処方箋を示したものであるといわれ、又三部作『ダマスクスへ』はドイツ表現主義戯曲の源泉であると称せられる。以上の情報は、茅野蕭々「あとがき」『近代劇全集』第3巻北欧篇(第一書房、1928年)543頁を参照した。

¹¹ 『ダマスクスへ』について、茅野蕭々が「あとがき」『近代劇全集』第3巻北欧篇(第一書房、



1898-1904) の第 1 部の第 5 節「街道の上」が引用される。まず、「街道の上」の内容について簡単に述べておこう。女主人公「夫人」が既婚の夫を捨てて主人公「知られぬ人」とある町へ駆け落ちをし、二人の身なりはぼろぼろで両側に果樹のある街道を歩きながら会話をする。その町の隣に大きな河があり、その大きな河の向こう側は「夫人」の故郷である。「夫人」は故郷を離れる日について以下のように語っている。

夫人「ええあれが、その側で私が生れ育つた大河です。遠くに青く霞むで居るものを見ようと思つて、あの河を越えて此方の岸へ来たのは私が十八歳の時でした。それも今は見てしまひましたわ。」

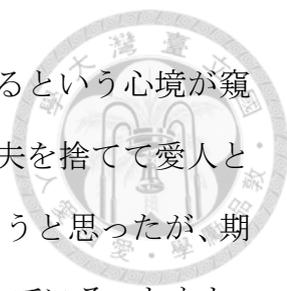
知られぬ人「泣いてゐるね。」

夫人「あのよい老人、私が小舟に乗つた時その老人は云ひましたよ。あそこに世間がある。ね、存分に見てしまつたら、又山へ帰つておいで、山は隠まつてくれるからねつて。——さうですわ、私は存分に見てしまひました、存分に。」¹²

上記からでは、「夫人」が好奇心で外の世界を見ようとするために 18 歳の時故郷から離れ、異郷で苦勞をしていたことが分かる。下線部により、少女の頃故郷

1928 年) で、「窮極に於て我々に示してゐるところのものは、知識によつて世界を理解することの困難から信仰へ赴く経路であり、無常極まりなき人間的評価に煩はされない魂の発展を肯定することであり、女性によつての人生の救済を断念して神の支配に身心を委託し、罪惡の觀念から解脱することである」(546 頁) と指摘している。また、作中の「主人公知られぬ人と夫人との相愛相剋の関係は、さうして夫人が既婚の良人を捨てて知られぬ人と走ることとはストリンドベリの最初の結婚を思い起こさせることともがある。彼の最初の妻シリ・フォン・エッセンは矢張り人妻であつて、而も其の良人は作中の医者と同じやうに、彼に対しては始め十分の好意を持つてゐた」(547 頁) と指摘している。

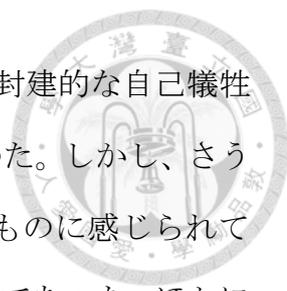
¹² ヨハン・アウグスト・ストリンドベリ著・茅野蕭々訳『ストリントベルク全集』第 1 巻 (岩波書店、1924 年) 73 頁。



を離れた「夫人」はさんざん苦勞を味わった後帰鳥になりたがるという心境が窺える。『ダマスクスへ』の「夫人」に比べ、絵描きの「妻」が夫を捨てて愛人と一緒に遠くの異郷に赴き、そこで一緒にそのあとの人生を歩もうと思ったが、期待していたような幸福な生活が送れなかったという点で類似している。しかし、絵描きの「妻」は故郷へ帰れず、異郷に残ったまま生涯を終える一方で、『ダマスクスへ』の夫人は身を隠す場所があるという点では異なっている。このように、女性にとっては自分の「居場所」¹³の選択より、作るチャンスが与えられた方が重要な意味を持つのではないであろうか。なぜなら、自分の居場所を他人に託した場合、いざその理想的な生活が崩れた時、すなわち自分の居場所を失ってしまったという窮地に陥るのである。要するに、台中に転居した絵描きの「妻」は、その同居人が経済力のない頼りにならない人であるため、別の居場所を作ることができなく、現状のままで生きていくしかない受動的な女性と見受けられる。

ところで、小説の中で志保子の生い立ちは不明で、植民地は彼女にとって故郷であるか、異郷であるかということは明らかにされていないが、内地の都会生活に憧憬している志保子は、そのような理想を実現することができて東京で10年も生きてきたということから、彼女は夢にとどまらず、自分で居場所を作るという能動的で自我に目覚めた女性であることが窺えよう。なお、ここでは深夜にパニック発作に襲われて眠れない志保子は『ダマスクスへ』の脚本を読む前に、好意を持っているAのことを思いついた場面に注目して志保子の恋愛観を見てみよう。

¹³ 「居場所」について、『日本国語大辞典第二版』（小学館、2001年）の「居場所」項目に記された「人が、世間、社会の中で落ちつくべき場所。安心していられる場所」という解釈に従う。本論文では「身を落ち着ける場所」という心理的な側面から居場所を定義する。



Aには、どういふ時でも笑顔をみせてゐたい。さういふ封建的な自己犠牲が、私にとっては、大切な人にささげる唯一のものであつた。しかし、さういふ私の真実が、物乞みみたいに哀れで押しつけがましいものを感じられてくると、私は、代わりになにをもてばよいのか判らないのであつた。ほかになに一つ、女として生きられる、安心をもつことができない。さしづめ、大切な人に、女としての私はなにを以つて、つながつてゆけばよいのか判らないのが、恐しくてならなかつた。(197頁)

引用から、志保子にとって女性が大切な人に献身的に捧げること以外、何をすれば分からないことが窺えるだろう。要するに、女性は男性のために自己犠牲を払わなければ安心できない、女として生きていけないと言えよう。しかも、相手に大切にされなくても飛んで火に入る夏の虫のように、自分の欲望や幸福を捨てて相手に尽くすような考え方を志保子も同じく持っているのである。このように、志保子は自らの意志で恋愛を決めることができても、大切な人と恋愛関係を築くために女性にはどのような振る舞いが望ましいのかについて不安を感じる。つまり、封建的な結婚に束縛されたくないと言いながら、志保子は、愛情や愛人に拘束される可能性があることが示されている。

第5節 結び

本章では、「駅長の若き妻」、「異郷の墓」、「南方の墓」、「南海の記憶」における女性像を考察してきた。まず、「駅長の若き妻」の美那子は、女性を緊縛していた婦徳の枷に反抗する意識があるものの、自立して真正面から制度に立ち向かうことができなく、逆に毎日空想に耽って心の中で救済者のような男性の現れを祈っている、言わば男性に依存する女性として描かれている。次に、「異郷の墓」では、夫に支配、抑圧、虐待される医者妻は、苦境から逃げる手段とし、



自分の命を絶つことを通して能動的な意思表示を見せるほか、家父長制のような男性中心な社会制度に殺され、社会制度による女性の抑圧が描かれている。

「南方の墓」では、駅長の娘は女性を支配している家父長制への反抗と不幸な結婚生活から離脱しようとする自我への目覚めを家出の行為で具現させる。一方、駅長の娘と対照的に、唐山氏の娘は母親が進めた自分の縁談に対して、自分の権利や価値を考える前に現実を受け入れ、自己を完全に抑圧するような「良妻賢母」の運命に服従する女性であるのは明らかであろう。最後に、「南海の記憶」では自分に正直に生きるために既定の婚姻関係から逃れた絵描きの「妻」は、夫を捨てて愛人と出奔したが結局のところ現実に追われ、頼りない愛人に加えて自分も経済力がないため自分の居場所が作れず、他人に左右されるような状況に陥ってしまったのである。それに対して、都会生活に憧憬し理想的な生活を送りたいという願望を持っている志保子は、それを実現することができて東京で10年も生きてきたということから、彼女は夢のままにとどまらず、自分で居場所を作るという能動的な女性である。しかしながら、恋愛において志保子は自らの意志で恋愛を決めることができても、大切な人と恋愛関係を築くために女性には自己犠牲をする以外どのような振る舞いが望ましいのかについて不安を感じる。ある角度から見れば、封建的な結婚に束縛されない志保子は愛情や愛人に拘束される可能性が読み取れるのであろう。

このように、本章で取り上げた結婚前後の時期にある女性像は、自由恋愛に憧れて封建的な結婚に反抗しようとする考えを持っていながら、経済的自立ができなくて因習的な社会に拘束されている苦境に置かれた女性として描かれている。そして、これらの女性人物は恋愛や結婚がうまくいかなかったとき家出、自死、従順、離脱を選ぶというパターンが見られる。とはいうものの、「駅長の若き妻」と「南海の記憶」における美那子と絵描きの妻の婚外恋愛の表現を通して、作者は自由恋愛、既婚者の恋愛も支持しているように見えるが、既婚女性が既定

の婚姻関係を廃棄して新しい結婚生活を始めることの困難さをも示しているこ
とが窺える。







第2章 「むすめ」—母との葛藤を通しての自己探し

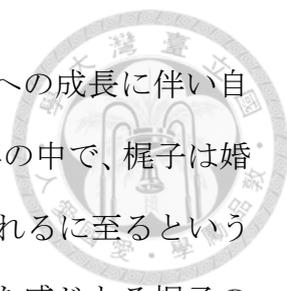
真杉静枝の母・黒川みついは妊娠してから真杉の父・千里が内縁の妻のあることを知り、胎の中の真杉の死を願って一日中冷水にかけ、未婚の母として実家の黒川家で私生児の真杉を出産した¹。よって、みついの胸には娘さえいなければ、好きでもない男と一緒にならず済んだという根強い恨みがくすぶり続けており、それは真杉を傷つけたためであろうか、母と娘はよく衝突し憎みあうようになった²。母と娘の関係について、河原和枝は「母にとって娘は、自己愛の延長であるとともに自己嫌悪の投射対象でもあり、また自分と、夫や社会との関係を映し出す鏡でもある。それゆえ母の娘への感情はときに複雑なものとなり、娘はそれを受け止めて同様に複雑な感情を母に抱くことにもなる」³と母娘関係の複雑さを指摘している。そのような家庭環境で育った真杉は、自分の生い立ちに基づいた自伝的作品「むすめ」⁴の中で、母親との不和からやがて和解に辿り着く

¹ 十津川光子『悪評の女』（虎見書房、1968年）19頁。黒川家に下宿して近くの小学校に通勤していた真杉千里はそこから7、8キロ離れた殿下村の実家に内縁の妻がありながら、美しいみついに夢中になり、強引に誘惑してしまったのである。しかしみついは、はじめからいかつい顔の千里があまり好きではなかった。士族の出で医者の子であることに信用を置いたのがあった。

² 十津川光子、前掲書、20頁。真杉の妹の証言によると、真杉の生まれた年の翌年、父・千里は内縁の妻と清算し、両親の反対を押し切ってみついを入籍した。みついは千里の正式な妻となっても喜ばず、家庭生活は円満ではなかった。その上、千里は身分違いのみついと結婚に反対しつづける両親と、事々に衝突するという毎日で、さらに、妊娠させたまま捨てた内縁の妻との事情も重なり、心の休まる暇のない状態であった。そのため、千里が台湾移住を決意し、妻子とともにやり直そうという願いが込められていたのである。

³ 田端泰子・河原和枝・野村幸一郎編著『母と娘の歴史文化学——再生産される〈性〉』（白地社、2009年）x頁。

⁴ 「むすめ」の引用は真杉静枝『愛情の門』（国際女性社、1948年）により、旧字体は新字体に改めた。



までのプロセスを綴りながら、主人公の梶子が少女から女性への成長に伴い自分の人生に対する心境の変化が細かく描かれている。その描写の中で、梶子は婚約を破棄し、親許を離れ、異性を知り、恋愛するが、やがて別れるに至るという自分の生き方や居場所を模索する過程で、特に母親の重要さを感じとる梶子の心境が窺える。

小説の冒頭では、梶子の十数年会っていない母親が電車に轢かれて病院に搬送される夢を見るという場面がある。それは、真杉の実際に経験したことである。1937年8月17日の『輝ク』に掲載されている随想「母の夢」⁵は、「むすめ」の冒頭部と同じく夢の中に出てきた出来事が描かれているが、真杉と母親との関係については随想の中で触れなかった。そこで、本章は「むすめ」を手掛かりにして真杉の、母親との葛藤が作品にどのように反映しているかを考察していきたい。そのような登場人物梶子が母親との葛藤がどのように描かれているのかを見ていく過程で、梶子の自己成長及び自意識からその女性像を明らかにする。

第1節 母との葛藤

1. 梶子の経歴—児童期から思春期まで

「むすめ」の冒頭では、

夢の中の手術室には、あかあかと灯がついてゐて、母の「痛い、痛い」とい

⁵ 真杉静枝は母の夢を見る理由は「母の夢をみるのは、私には珍しいことだ。もう母には十三年も会わない。前日の夕方、妹から来た手紙に母が悪くて入院したとかいてあつたことから、こんな夢をみたものであらう」と述べている。それに、「手紙をみた時、入院した母よりも、私にはいろいろのわけがあつてその手紙の内容から、妹の可憐な姿ばかり強く来たのであつた」と母の病気より妹のほうが心配であることが記してある。『輝ク』1937年8月17日3面を参照。（『輝ク：復刻版』、不二出版、1988年、215頁）



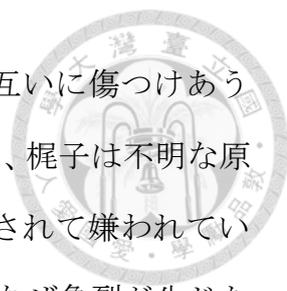
ふ、かぼそい呻きは、何やら異様にたかぶつてゐる梶子の頭にしみ入つてゐた。手術台の上には、母の足が大腿部から轢き千切れて、大きな花びらの形に、腿の肉が外側にひらいてゐる。肉の中から、千切れた棒ぎれみたいな骨が突き出てゐて、肉は母の呻きと一緒に、小刻みに震へてゐた。(4頁)

というような、東京で生活している梶子の14年も会わない母親が電車に轢かれる夢をみる様子が描写され、母親の重傷が赤裸々に表現される衝撃的な場面である。夢の中で梶子は、白衣を着ている医者に縋り付いて「これはあんまりです。残酷です。麻酔をかけて下さい」(4頁)と叫び続けている。十数年会っていない母親が電車に轢かれる夢から目覚めた梶子は、その大きな苦痛の叫び声が彼女の心に突っ込んでくるように受け取れた。母親の夢を見た理由は、恐らく先日母親が病気で入院したという妹光枝からの手紙の知らせがあったからであろう。しかし、梶子が母親に対する気持ちは、以下のように描写されている。

十四年会はない母を、梶子は心でひどく冷淡に扱ひつづけて来てゐるのでその冷淡に対して「これでもか」と、やりこめて来る、ある「意志」のやうなものの手触りがあつた。叱られさへしなければ、きつと素直に母を愛せたのではないか、と思へる位ゐ、少女の頃から「母を愛してゐない」と、嚇しつけられ、ほんとに自分は愛してゐないのだと、あらためて思ひしまふ。(中略) そんな思ひ込みで、そこだけが小さく蝕まれた娘になつてゐた。母は始終、さういふ梶子の顔を、激しい怒りの震へる顔で睨みすゑてゐた。

「母を愛しない娘が、あるだらうか」この苦しみは、母の心をひどく嘖んでゐたやうである。(5-6頁)(下線は筆者による。以下同様。)

以上の引用から見ると、梶子が母親との関係はこじれたことが分かる。不機嫌な



顔を隠さない母親がいつも梶子を傷つけてきたほか、二人は互いに傷つけあう関係になっていると見られる。また下線を引いた描写のように、梶子は不明な原因により母親から叱られ、少女の頃から母親に親不孝な娘とされて嫌われている。つまり、「むすめ」において幼少期の梶子と母親の関係になぜ亀裂が生じたか詳しく描かれていない。呉佩珍によれば、「むすめ」における梶子が母親に対する嫌悪は唐突な描写であるように見えるが、母と娘のこじれた関係を読み解けば、「或る女の生立ち」における幼少期の真杉と母親の関係に関する描写を照らし合わせる必要がある必要であったのである⁶。そこで、「或る女の生立ち」⁷に描かれる初めて台湾へ向かう途中の船室で子供の真杉が母親に叱られる場面を通して、母娘関係の悪化の主要な原因が明らかにされると考えられる。

この子供が母から貰った自分の中の半分の血のために、半身が黒ずむ程、苦しむ事になったのは、この船室の中からのことである。

「気取って、お父さんに似て、神経質でへんな子供」だと母は、直ぐ興奮して叱った。船で母の多量の出血を子供が、ふと発見した時、母は、子供が親を大切に思はないから、こんな事になったのだよ、と説明して、亜熱帯近い海上で、彼女を怯えあがらせた。（中略）その後のある時、同じ母の血をみて知った。この恥ちの衝撃で、真赤になった顔を、十五歳の彼女は、そのまま、全身の半分の黒アザにする位、心に染み込ませた。そのまま、母への

⁶ 呉佩珍、『真杉静枝與殖民地台灣』（聯經出版公司、2013年）、28-31頁。原文：「在〈女兒〉裡，梶子對母親厭惡情感的描寫，似乎顯得突兀。相對地，在戰後創作的傳記小說〈某個女人的生平〉中，主人公「静枝」對母親厭惡情感的起源與生成有了確切的描摹。」、「寫於戰前1940年〈女兒〉中母女關係的裂痕，仍須對照〈某個女人的生平〉中「静枝」自幼小時期與母親關係的描寫，才能有較清楚的解讀方向。」

⁷ 「或る女の生立ち」の引用は尾形明子・長谷川啓監修『戦後の出発と女性文学第8巻』（ゆまに書房、2003年）により、旧字体は新字体に改めた。

怒りを持った。⁸

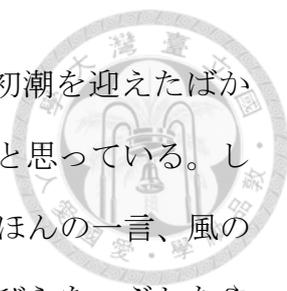


「或る女の生立ち」の引用に照らし合わせて見ると、当時、女性の生理現象について知らぬ児童期の真杉は、母親から出血の責任を負わされて親不孝のレッテル貼りされたように脅かされたことが分かる。そのため、母親に歪んだ性教育が植え付けられた真杉は思春期に入ってから初めて月経を知った時、彼女の心の中で恥ずかしさと同時に怒りが入り交じり、複雑な感情になっている。さらに、作品集『ひなどり』（1939年、竹村書房）に収録されている小品文「母親」では、母親の真杉に対する嫌悪感を抱く理由は、「母は、嫁に来て以来の苦勞を、からだ一ぱいに吞んでゐるやうな、普通の愚痴ぼいたちの女であるが、充分愚痴をいふ資格があるほど、私の父について苦勞したのである。夫に苦勞させられた、それを子供に向けて、何かの型で発散させなくては、彼女は生きてゐられぬやうな気がするにちがひない。けれども、その娘の一人にもそむかれてしまったのであつた」⁹と真杉が解釈している。したがって、真杉にとって母親は不遇な人生を娘のせいにし、不機嫌なとき娘に当たり散らして生きているのである。その一方で、やられた側の真杉は母親への反発心が湧いてきて母親から離れることにした。以上から、「むすめ」において梶子を愛せない母親と、母親を許せない梶子はこうした羽目になった顛末は、前述した十津川光子による真杉の母親の妊娠から出産までの事情と小品文「母親」、そして自伝的小説「或る女の生立ち」における母親に関する記述を通して明らかになったのであろう。

さて、真杉と母親との母娘関係の悪化の主要な原因を一通り論じたが、それがどのように小説に反映したかを解明するために、「むすめ」における母親が梶子の初潮に対する対応と梶子が母親の流産を知る場面を通して、梶子の母親の生

⁸ 真杉静枝「或る女の生立ち」（『戦後の出発と女性文学第8巻』ゆまに書房、2003年）139頁。

⁹ 真杉静枝「母親」『ひなどり』（『近代女性作家精選集18巻』ゆまに書房、1999年）251頁。



理現象に対する態度を詳しく見てみよう。女学校の寄宿舎で初潮を迎えたばかりの梶子は、母親にだけは「死んでも云ひたくない」(9頁)と思っている。しかし、夏休み中に母親から生理のことについて聞かれた時、「ほんの一言、風のやうにそれに触れただけであつたが、梶子の心は、無惨に、花びらをつぶしたやうに打ち砕かれた」(9頁)と、母親に自分の初潮を軽く見られて傷つけられた。その後、梶子は母親の顔が「どうしても不潔で正視できないもの」(9頁)で、母親から遠ざかろうとするのである。その一方で、梶子の妹・光枝が梶子より母親に女性の生理現象について自然に触れられる。例えば、母親が着物についた経血シミに気づかなかつた時、梶子より妹の光枝の方が母親にそれを注意したのである。そして、注意された母親は「恥ぢ入るかほりに、そんな露見が、却つて女同士の親しい触れあひのきっかけにでもなつたといふやうな、そんなはしたない笑顔で、着物を振り返つたりして」いるという振る舞いであり、そういう母親を見ている梶子は「自分が凌辱されてもしたやうな、顔のあげられない怒り」(7-8頁)を感じ、「さういふものを娘の眼からかくさうとしない母の神経」(7頁)を憎んでいる。

また、ある日母親の急病の知らせで北部女学校の寄宿舎から家族のいる中部に急いで帰る。家に駆けて帰る途中で、梶子は母親を訪問診療したところの医者と出会い、医者は「大したことはございません。三ヶ月目の御流産です」(7頁)と梶子に言った。母親の流産のことが分かつた梶子は、「表情がバラバラに千切れ飛ぶ位み狼狽し」、「母の病床へゆくのが、いやでたまらな」いため、家に着いたが病室の障子を開けずに引き返したのである。梶子には「母の、女としての生理に触れること」(7頁)を「咽喉がつまる位み拒否」(7頁)するほどの強い嫌悪感を示している。

前に言及したように「或る女の生立ち」における児童期の真杉は、母親から出血の責任を負わされて親不孝のレッテル貼りして脅かされたため、思春期の真



杉は初めて月経を知った時、母親と同じく出血が起こることに恥ずかしさと同時に怒りが入り交じて複雑な感情になっている。そのため、「むすめ」においては梶子の場合でも母親の生理や流産という出血現象に生じた嫌悪感、そして自分の生理を母親に告げることに抵抗感を抱くのは同様な原因が当てはまるであろうと思われる。母親と娘の関係性の独特さについて斎藤環が「娘にとって母親とは、最も身近な女性でありながら、その女性性や世俗性という点において、強い反発や嫌悪の対象でもありうるということ」¹⁰であると指摘している。そこで、身近な女性である母親が児童期の梶子に歪んだ性教育を植え付け、女性の生理を恥や不祥事であるかのように受け取らせるため、同じく女である梶子が母親の女性性に対して強い反発や嫌悪感を抱くのである。こうして、梶子は児童期で母親に対する疎外感を抱いている一方、思春期で女性の生理現象にも屈辱感と嫌悪感を抱いていることは明らかである。次に、ミソジニーの観点からこうした梶子と母親との間に生じたぶつかり合いを読み解いていく。

2. ミソジニーに対抗する梶子

本項ではまず、梶子は父親と同じ学校¹¹に勤める国語の龍田先生と散歩する場面に注目し、母親と思春期の娘との対立の引き金を考察していく。

夏休み中のある日の夜、文学に熱心であった梶子は龍田先生と散歩をしながら、文学について話し合いをしている場面である。文学に惹かれている梶子は東京へ行きたい熱意を言い出したが、暫くの沈黙のあと龍田先生は、「しかし結婚して、赤ちやんが生まれられたりすると、文学の勉強はどんなになりますかね」

¹⁰ 斎藤環『母は娘の人生を支配する一なぜ「母殺し」は難しいのか』（日本放送出版協会、2008年）22頁。

¹¹ 『臺灣總督府職員録』により、1913年から1921年にかけて真杉の父親・千里は台中廳台中公学校の教師を務めている。（『臺灣總督府職員録』214頁、<https://who.ith.sinica.edu.tw/>、「中央研究院臺灣史研究所」、2022年6月9日閲覧）

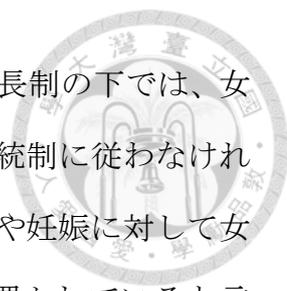
(13 頁) と言った。その言葉に対する梶子の反応は、以下のように描かれている。

「赤ちやんが生まれる」といふ言葉を男の声できくのは初めてであつた。どきりと胸のふくらみを斬りつけられて来られるたやうな衝動をうけた。その衝動でしばらく口が利けなかつた。はなれて立つてゐる龍田先生の姿が、突然、お医者様でもあるやうな、人の恥ぢらひに踏みこんでくるものに思へて足許が震へた。そして、この言葉のもつてゐる刺激は、そのあといつまでも梶子の体のあちらこちらに、小さな悪魔のやうな仕草で、妙に痛むやうに残つた。(13 頁)

引用から見ると、出産・育児という母親としての役割が梶子にとっては羞恥にまみれたことであり、その「産む性」¹²——母性としての性——に抵抗感を持っていると捉えられる。水田宗子がこういう社会性役割とする産む性については「産む、そして母になるという意識が、女性の個人としての自我を侵害するものという意識と重なる」と解釈し、そして「産む性としての女性の性は、社会的日常生活の中でも明確に意味づけされ、賞賛され、保護されると同時に、女性を束縛してきた」¹³と指摘している。つまり、文学に興味を持って小説家になりたい梶子にとっては、龍田先生の一言は自分の夢に水を差したやうな発言であつて傷つけられたのではないであろうか。また、その一言は、梶子が女性として自分の夢より社会から与えられた義務や役割を先に果たすべきであることを示しており、梶子はその一言にもう一度自分が女性性に縛られていることを認識させられたことが窺えよう。上野千鶴子 (2018) によれば、生誕のときから性別で人間の値打ちが違うことは社会に潜むミソジニーであり、こういうミソジニーを

¹² 水田宗子『ヒロインからヒーローへ』(新版)(田畑書店、1992年)、184頁。

¹³ 水田宗子、前掲書、185頁。



核として組み込んだ社会に家父長制があることである¹⁴。家父長制の下では、女と子どもの所属が決まり、すなわち男に所属する、男の支配と統制に従わなければならないことである¹⁵。小説の内容に戻れば、つまり、結婚や妊娠に対して女性の自己決定権が認められない梶子は、家父長制の支配下に置かれていると言えよう。しかし、梶子が龍田先生の発言に不快感を感じたことから見れば、梶子はその支配を受け入れられないことが窺える。女性が社会から与えられる義務や役割について上野氏は以下のように述べている。

人は「女になる」ときに、「女」というカテゴリーが背負った歴史的なミソジニーのすべてをいったんは引き受ける。そのカテゴリーが与える指定席に安住すれば、「女」が誕生する。だが、フェミニストとはその「指定席」に違和感を感じる者、ミソジニーへの「適応」をしなかった者たちのことだ。だから、ミソジニーから出発しなかったフェミニストはいない。フェミニストであるとは、このミソジニーとの葛藤を意味する。¹⁶

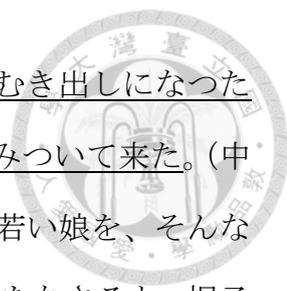
上野氏の説に従えば、自我に目覚めた梶子は社会からの役割期待から抜け出したい意識を持っているため、ミソジニーを核として組み込んだ家父長制に対抗する彼女はフェミニストと言えよう。ところで、龍田先生と一時間の散歩で梶子の帰りが遅くなったため、母親が梶子にその理由を質問すると次のような事が起こった。

「途中で、龍田先生にお会いしてしまつて……」なにげなく、すらすらと云

¹⁴ 上野千鶴子『女ざらい—ニッポンのミソジニー』（朝日新聞出版、2018年）107-108頁。

¹⁵ 上野千鶴子、前掲書（2018年）、144頁。

¹⁶ 上野千鶴子、前掲書（2018年）、155頁。

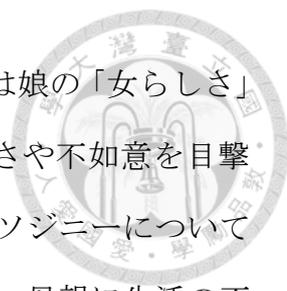


ひかけたが、突然その声が凍った。母の予想が、その顔にむき出しになつた
のである。その予想の汚らはしさが、ふと梶子の体からみついて来た。(中
略)「ねお父さま、龍田先生もあんまりでございますね。若い娘を、そんな
にして夜、連れ出しなさつたりして。あんまりそんなことをなさると、梶子
を、ほんとうに医者にもみませんならんかと思ひます。何を傷つけられて
ゐるかわかりませんからね」声が震へてゐた。梶子はこの時ほど、母の言葉
で無惨に心を傷けられたことはなかつた。かういふ母と、一緒に暮さない為
めには、どんなことでもしようと思つた。(14-15 頁)

下線を引いた文から、梶子が異性とのかかわりについて母親は大袈裟な反応を
し、思春期の梶子の身体に対して母親が支配しようとする意図が窺える。では、
そういう母親の意識的に自分と異性との関わり方を想像する行為と大袈裟な反
応に梶子が傷けられる理由は何であろうか。まず、少女の思春期について上野氏
は「自分の身体が男の性的欲望の対象になると自覚したとき、その年齢にかかわ
らず、少女にとって思春期は始まる」と解釈しており、「それからの女の人生は、
自分の身体が男の視線によって値踏みの対象となることを自覚させられつづけ
る経験となる」¹⁷ことを指摘している。それに、この解釈に基づいて考えれば、
梶子を女性と見なす龍田先生と母親の眼差しは、梶子にとって侮辱を受けたよ
うな感じであつたのではないであろうか。要するに、母親にとって梶子の価値は
まるで彼女の身体で決まるかのようなものであり、龍田先生にとって女性は伝
統的な性別役割に基づいた存在であるため、梶子はそれらの価値観、あるいは家
父長制的な意識が浸透している人々に傷つけられたと言ってよいであろう。

ところが、家父長制の被害者でありながら加害者であつた母親は、娘にとって
はどのような存在であろうか。上野氏はそのような母親を「反面教師としての

¹⁷ 上野千鶴子、前掲書 (2018 年)、252 頁。



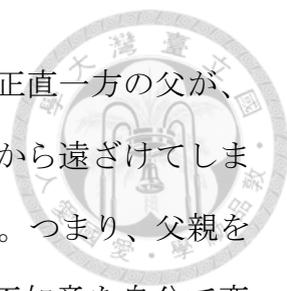
母」¹⁸と称する。なぜなら、「女はミソジニーを母から学ぶ。母は娘の「女らしさ」を憎むことで娘に自己嫌悪を植えつけ、娘は母の満たされなさや不如意を目撃することで母を蔑むことを覚える」¹⁹からであると母と娘のミソジニーについて上野氏が論じていた。要するに、前項で言及したように梶子は、母親に生活の不如意を当たり散らされ、「親を愛していない娘」というレッテル貼りをして脅かされてきたため、母親の生理や流産などの出血に嫌悪感を抱き、さらに母親と同じ女性性を持つことに対しては恥ずかしさを抱いているのである。長年母親から疎外されてきた梶子にとって母親が自分に対する態度はすなわち、一種のミソジニーの表現と言えよう。さて、梶子はそのような「反面教師としての母」にどのように立ち向かっていくのか、次節で見てみよう。

第2節 支配的な母と反抗的な娘

その夜のことで安堵しない母親は、娘の身体をコントロールしようとするために卒業前の冬休みに梶子の縁談がすぐに決まった。こうした母親の行為は女性のセクシュアリティを男が庇護すべきもの、すなわち男の所有物という前提に立っていると考えられる。しかし、母親を嫌うために卒業と同時に家を出ようと図った梶子はその縁談さえ拒否しなかった。梶子より17歳も年上の松本忠左衛門は母親と姻戚関係があるため、前から梶子の家に入出入りしている。母親が忠左衛門に対しては「何ともいへん放胆な男ぢやものね。うちのお父さまなんかとは、全然正反対の性格ぢや。あんな男についてゐれば、一生心配はないからね。梶子を、嫁とは思はん、娘ぢやと思つてやつてゆきます、つて云つてゐるものね。いい婿ぢや、ほんとに……」(16頁)と肯定的な評価を語っている。一方、そのような母親の発言について梶子は「母は、父に添つて幾年もした苦勞を、そつく

¹⁸ 上野千鶴子、前掲書(2018年)、157頁。

¹⁹ 上野千鶴子、前掲書(2018年)、157-158頁。

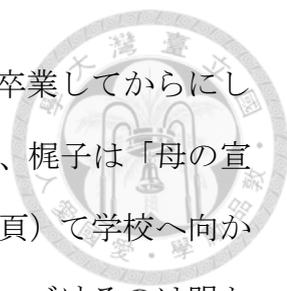


り、この忠左衛門でとり返したやうな気がしてゐる。善良人で正直一方の父が、生活的に無能力であつたことを、そのことでも、梶子の心を母から遠ざけてしまつたほど、始終こぼし話しにしてゐた」(16頁)と思つている。つまり、父親を見下ろし愚痴ばかり言う母親は梶子の目から見れば、人生の不如意を自分で変えることができない存在である。そして、苦勞をしてきた母親は自分の払った代償を、娘に償わせようとし、婿養子を取ることを通して、娘の一生だけではなく自分の老後も安心して託されるのである。上野氏が「女にはふたつの価値がある。自分で獲得した価値と、他人(つまり男)によって与えられる価値だ」²⁰と指摘し、そして、前者の価値が女に期待できなかつた時代に、母親にとって娘が男から選ばれる価値のあることは大切であるため、母親は母であることで、「男から選ばれるという価値は——たとえ不満足であっても——手に入れているから、こちらの価値を手に入れない娘をどんなにできがよくても、母は一生、半端者のように扱ふことができる」²¹と論じている。つまり、母親は妻、母という役割にのみ生きてきて、女として、人間としての欲求が満たされていないと見られる。その満たされない思いを娘への期待や干渉という形で解消しようとする母親は、自分を束縛し、抑圧してきた根本的な原因が世間の価値観にあることに気づかず、娘にそうした価値観を押し付けようとするのである。

母親は今まで光枝を相手に、梶子の「頑に見える性格」(16頁)について話合っているが、許婚以来の数日の間に忠左衛門を相手に、「ほんとに、お父さま似てね、へんな性質の娘なのよ」(16頁)と話すようになってきた。このような話題で、母親は一層忠左衛門を褒め上げるようになったが、梶子の結婚意向が逆に揺れてきた。梶子の動揺する様子を察知している母親は、冬休みが終わる4日前、結婚式を急ぐ必要があると思うため、忠左衛門に「学校へやる前に、只、ほ

²⁰ 上野千鶴子、前掲書(2018年)、161頁。

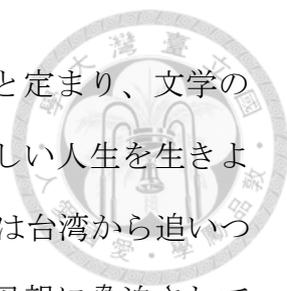
²¹ 上野千鶴子、前掲書(2018年)、163頁。



んの形式の式丈けしておくのですよ。形式だけですよ。あとは卒業してからにして……」(17頁)と強く念を押した。それから結婚式の3日後、梶子は「母の宣言どほり、忠左衛門の手に染まないままの体に袴をつけ」(18頁)で学校へ向かって出発した。ここで、母親が梶子の身体から人生まで支配しつづけるのは明らかであろう。しかしながら、梶子は愛のない結婚生活に対する反抗心がますます高まり、学校のある町に一泊して翌日基隆を出る船に乗り、7日後大阪の祖母の家に到着した。初めて親許を遠く離れた梶子の心境は次のように述べられている。

親を裏切る不安にゆらいで、体がしぼむやうな思ひをしながら、台湾独特の、濁流のさかまく鉄橋をわたり、赤土の山肌のみえる山々のつらなり、甘蔗畑のうねりの眺めを、車窓にぼんやりとみてゐた。景色の隅々にまで、父や母の面影が、からみついてゐるやうに思った。(中略)枕の下から、便箋をとり出しては、父と母とに、手紙を書きを書いた。忠左衛門を愛し得ない、といふことや、都会へ出て、何か立派なものになつて、きつと御恩に報います、というやうな、陳腐な字のつながりであつたが、書きながら、本気で、梶子の体のささへになる言葉であつたこともたしかである。(18-19頁)

車窓からの異郷の景色を見ている梶子の脳裏には親の面影が浮かび上がり、親の期待を裏切ったことに絶えず自責している。それにもかかわらず、自分の未来を自分の手で掴もうとする気持ちが強く、異郷を出立することにした。手紙で親に自分の考えや気持ちを伝えることを通して、梶子は心の苦しみが少し和らいだのであろう。人生に真剣に向き合い、知的な欲求に満ちている梶子には、母親の決めた結婚がそのような自分の人生を満たしてくれるものではないことをよく知っている。母親の基準に従えば、経済力のある男である忠左衛門と封建的な結婚は女の幸せ、人生のすべてと思われるであろうが、梶子には納得できない。



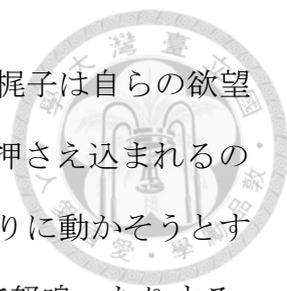
彼女は自分の人生の目標——作家になること——がはっきりと定まり、文学の勉強のために都会へ出てその夢を実現することを通して、新しい人生を生きようとする。しかし、梶子が大阪に到着した日から10日後母親は台湾から追いついてきた。母親の支配からとうとう逃れられない梶子は再び母親に脅迫されている。

「何としたまあ、大へんなことをやつてくれたんぢや」口惜しさや、悲しさの入りまじった声をあげ、母は梶子の前に泣き倒れた。梶子を責めたり、罵つたりしてゐる母の顔が、船での不眠や不食の為め、醜く、腫れたり、ただれたりしてゐる。(中略)「自分の生んだ娘が自分の思ふやうにならぬのですものね、この苦しさは、まあほんとに……」寢床の上に起きたり倒れたりしながら、母は叫ぶやうに云つて身悶えする。それからあと、母も娘も、幾日も幾日も、まるで拷問に堪へようとする囚人のやうに、気を張つては、何も食べられない肉体の衰へに打ち倒れ、倒れながら、尚ほ争ひつづけた。

母の苦しみのたうつ姿をみてみると、それは、梶子の幸福を考へるといふことにつながつてゐるが、直接には、殆んど「母」といふ本能的な痛手の悶えなのであつた。自分の生んだ娘と心がつながらない。そのことが、母の本能にとっては体がばらばらになるほどの苦痛になる様子であつた。(19-20頁)

上野氏が「母が家父長制の代理人としてふるまいつづける限りは、娘と母の関係は調和的なものではありえない」²²と指摘している。上記の引用から見れば、母親はまさに「家父長制の代理人として」梶子に伝統的な性別役割を果たせようとしていることが窺える。そして母親の願望が強ければ強いほど、梶子は母親の

²² 上野千鶴子、前掲書（2018年）、190頁。



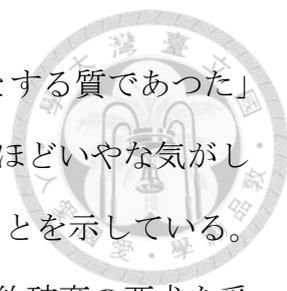
抑圧に反抗し自我を貫こうとするのであろう。言い換えれば、梶子は自らの欲望に忠実に生きようとすれば、家父長制の代理人である母親に押さえ込まれるのである。また、母親は思う理想を梶子に押し付け、娘を思い通りに動かそうとするが、娘の自分の思い通りにならないとヒステリックになって怒鳴ったりする、という感情的な恐喝を通して娘を操作したり支配したりすることが分かる。

このような母娘関係について斎藤氏は、非対称的な関係を母親＝加害者、娘＝被害者という図式に見えると提起し、そして娘は母親の支配に悩まされ、母親は娘を支配していることについて無自覚であると、母娘の間にある支配―被支配関係を見出し、そのような母娘関係の下で娘は「反抗」するか、「出立」にとどまり、そうした母娘関係を反転させるのは全く不可能だと論じている²³。そして、支配―被支配の母娘関係について上野氏は「母の期待に応えるにせよ、母の期待を裏切るにせよ、どちらにしても、娘は母が活着している限り、母の呪縛から逃れることができない。母に従っても逆らっても、母は娘の人生を支配しつづける。母は自分の死後までも娘の人生を支配しようとする」²⁴と指摘している。斎藤氏と上野氏の論に沿えば、支配者である母親は自分の監視下、保護下に置かれている梶子を信頼できる男に嫁がせるということは、梶子の一生は封建的家父長制の支配から逃れられないことを示している。そのため、自分の人生の支配権を取り戻そうとする梶子は、親に反抗するというよりは、むしろ家父長制に反抗するという姿勢が見られる。

その後ある日、父親の代わりに忠左衛門は台湾から追いかけてきて梶子を連れて帰ろうとしたが、梶子はキリスト教の寄宿舎に泊っていた。その夜、梶子は祖母の家を訪れて忠左衛門と話し合うことを通して自ら問題を解決しようとした。しかしながら、忠左衛門は「梶子への一種の執着を、善意によつて裁かうと

²³ 斎藤環、前掲書、151-153頁。

²⁴ 上野千鶴子、前掲書（2018年）、171頁。



する人ではなく、開きなほつて、嚇かしの手立てにたよらうとする質であつた」(24 頁) という男であり、梶子は「こんな人だから、私があればいやな気がしたのだ」(24 頁) というように、愛のない結婚をしたくないことを示している。そして、外出先で酒を飲んできた忠左衛門は、梶子の謝りと婚約破棄の要求を受け入れられなく、激怒した大きな声で「お父さんを、此処へ呼んで頂かないうちは、私は、この解決はいたしませんから」(25 頁) と母親に向かって言い放ったのである。忠左衛門の怒った声が聞こえた梶子は「いよいよ自分の方にも容赦する気はなくなつたのだといふ風に性質の尋常でない生地をむき出してゐるのが感じられ」(25 頁)、祖母の家を出てしまった。ところが、「母も最初は、味方を得た思ひで、何彼と忠左衛門に相談して、梶子を敵にまはしてゐたが、梶子の方で、どうしても折れないといふ様子がみえてくると、どうやら、今度は母にとつて忠左衛門が恐ろしい人間にもなつてくるわけであつた」(22 頁) という風にその夜の出来事から忠左衛門に対する母親の態度が変わったことを垣間見することができた。結局、母親は台湾へ戻り、父親は忠左衛門の持ち出す、不法なまでの大袈裟な条件を散々引き回しされ、問題を解決したのである。

以上から、梶子が自立した生き方を求めるために、第一歩は母親から離れることが分かる。しかしながら、梶子の母親に対する感情は、憎悪と反発だけではなく、断ち切りがたい感情を持っていると言えよう。さて、忠左衛門との問題が落ち着いた後、梶子は大阪から東京へ出ていき、そこでの新生活によってす心境がどのように変化していくのか、次節で見てみよう。

第 3 節 自己への再認識

1. 自己成長に繋がる恋愛

大阪の祖母の家を出てから、梶子はその長い年月の間に一度も母親を懐かしいと思ひ出したことはなかった。梶子の心境は以下のように描かれている。

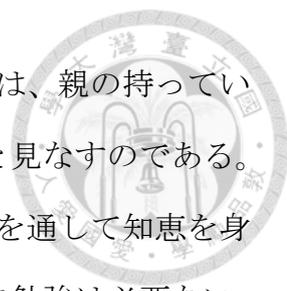


その年月の間を、梶子は、親のない娘でもあるやうに、方向のない生き方で、大へん無駄につかっつけてしまつてゐる。けれど、考へてみると、母とのかういふ感情的な傷は、その間、ずっと梶子の背中に吸ひついてはゐた。その人々の持つ不幸が、それ丈けその人を人生へ向つて深く喰ひこませてゆくものとすれば、梶子は、この背中の母の面影の不幸な分丈け、たしかに、世を深く渡つた、と云へるかもしれない。(26 頁)

このように、梶子は母親が与えた「一生治らない傷」を背負つて十数年以上生きていたのである。この「親のない」ように見える梶子は、東京で一人で自立をして生活をしていくには、心の支えになる人や物が欲しいと思われる。その親の愛情不足の分は、血縁関係のない人に求め、殊に男女の愛を渴望しているのは想像できるであろう。心の支えになってくれる人と出会い、その人から認められて愛されると、彼女がその人にひたむきに愛情を注ぐ姿勢は以下のように見られる。

「若い生命を生かすために、判らずやの親に反抗して飛び出したんだね、君は」と、ある時梶子を、いかにも時代の娘ででもあるやうに眺めたてて、「勉強して、立派な独立婦人になるために努力したまへ」と力付け、指導しようとする人が現はれた。梶子はその人から、両親の誘導され得なかつた、智腦的な啓発を沢山うけた。まるで、初めて巢をみつけたやうに、その人のそばに、ちやんと心の居住居を吸ひつけてしまつたのである。

両親に気がねするやうな神経のすこしもない奔放さから、梶子は自分の行為にいつも勝手な云ひわけをつけ、尊敬から入つたその人と、やがて恋愛になつたりした。妻子のある人であつたので、その人とは、五年ののちには他人にならねばならなくなつた。(27 頁)

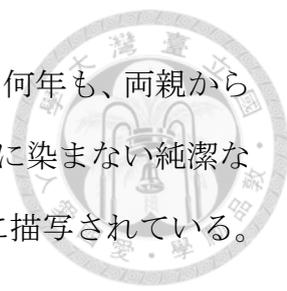


梶子を感動させた「その人」²⁵の考え方や思想、価値観などは、親の持っているのと違い、女性の自立を支持し、自分の出奔を正当な行為と見なすのである。つまり、「その人」で梶子の心が救われる。そして、「その人」を通して知恵を身につけることができ、文学の勉強を続けられる。それは、女に勉強は必要ない、女の幸せは結婚で決まるという親の考えとは正反対である。よって、そのような親の導きで人生はいい方向に行くはずがないとつくづく感じている梶子の親への恨みが窺える。この14年間、「恋愛を失ふにつけ、それから尚ほ一人で自活の道をたててゆかねばならない塩辛さにつけ、梶子は、知らず知らずの間に、ちやんと背中の中の両親の面影に不服をいつてみた。「あなた方が、私に対して無能力者だからですよ」経済的にも、愛情的にも全く何もしてくれない親だと、心で踏みつけてみたりした」(27頁)と自分の思う通りにならないたびにそのような親への恨みを吐いているのである。この描写から、不如意な生活を親のせいばかりする梶子は、実はこうした親への非難を通して心を安定させようとする姿勢が窺えよう。

ところが、「幸福な女の気持ちの安定場をもちたいと焦るやうになった時は、もう三十になつてみた」(28頁)梶子は、母親が電車に轢かれて手術室にいる夢を見たりしている現在は、年下の春吉²⁶という男と同棲を始めたばかりである。

²⁵ 武者小路実篤のことを指している。1925年、大阪毎日新聞の婦人記者に採用される真杉静枝は、インタビュー記事を書くために、大阪から奈良へ向かって初めて武者小路実篤と出会うことになる。武者小路の前に坐った真杉は「子供には子供の自由を尊敬してやりたい。子供に親の注文をそのまま押し込もうとするのは、親の不遜になる」という言葉を聞いただけで、すっかり感動してしまう。未婚の母から生れて以来の、自分の損害を全部洗い落としたような気持ちになるということである。その後、武者小路は真杉に芸術、文学、さらに哲学にわたっておびたしい書物をあげて勉強をさせる。(十津川光子、前掲書、64-85頁と吉屋信子『自伝的女流文壇史』、中央公論社、1977年、101-112頁を参照)

²⁶ 中村地平をモデルにした人物である。昭和8、9年(1933、1934年)から真杉静枝は中村地平と同棲をし、昭和16年(1941年)に別れた。真杉と中村の別れは、喧嘩したり傷つけ合っ



一人息子の春吉は両親に温かく慈しまれ、大学を卒業してから何年も、両親から援助をうけながら東京で絵の勉強をしている。そして、「苦勞に染まない純潔な魂の素地」を持っている春吉への梶子の眼差しは以下のように描写されている。

両親をはなれて以来、自分を育てるもの、自分を温め浄めるものには、何にでも知らず知らず惹かれて来てみた。まるで本能のやうに、身の養ひになるところに、ちやんとその貝殻を伏せて、吸へるものを吸ひとる、そんな生活を過して来た。今、梶子は、照り返されるやうに、春吉のもつてゐる育ちの良さからの、若竹のやうなすくすくと伸びた性格の美しさに打たれ、そこに吸ひ寄るやうに自分の居住居を作らうとしてゐる。そのよさ丈けを吸ひ取らうとする、宿命のやうなものが作用して、この春吉と梶子との生活があまりうまくいつてゐないに拘らず、彼女は、良いものを採つてゐるといふ自分の得の方丈けは、見失ふまいとするのであつた。 (29-30 頁)

以上から見ると、交際相手に惹かれ、愛しているとはいえ、梶子は、自分の欲しいものがよく分かっており、彼らの持っているよいもの、自分に有利なものであれば、それらをできるだけ吸い取り、身に備えて成長し続けてきた女性である。「その人」から知識や思想を得ることも春吉から心を温め身を浄めることも、梶子にとって自分を成長させることに繋がり、つまり彼らは彼女の心の居場所になると考えられる。しかし、下線が付けてある語りのように、梶子と春吉がう

の離別ではなかった。昭和 15 年 (1940 年) に書かれた「ながれ」は、想い合い、労り合いながら別れの日を迎えようとしている二人を描いており、一方、中村地平も、「八年間」(『群像』1950 年 10 月号) という作品で真杉を偲んでいる。(十津川光子、前掲書、85-98 頁、和田芳恵『ひとつの文壇史』新潮社、1967 年、175-185 頁、黒木清次・久保輝巳編「年譜」『中村地平全集第 3 巻』皆美社、1971 年、394-395 頁、十返肇『わが文壇散歩』現代社、1956 年、93 頁を参照)



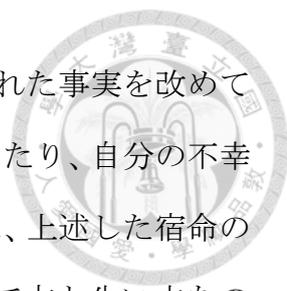
まくいかない原因は、宿命のようなものである。その宿命のようなものとは何であろうか、新しい住居で始められる第一日の日に、同棲生活を喜んでいる梶子とは反対に春吉はずっと物憂げな顔を見せている。以下二人の会話からも二人の関係がうまく行かないことが推測できるであろう。

「あなたは、何か一部不安な不幸なことがあると、それで全部を不幸にしておしまひになる方ね。私は、只一部幸福なことがあると、それで全部を幸福にしてしまはう、とする質なんだけれど」

すると、暫くして、春吉は、もそりとした云ひ方で口を開いた。「さうまで云はれると、僕も、なにかはつきりしたことを云つてしまひたくなるのだけれど」と梶子の方に向きなほり、「やつぱり、いつかは僕に別れてくれるね。こんなところまで来てしまつたけれど、どうしても、両親のことを思ふと、気が落ち着かないんだ……」切り込むやうにひらりと出された言葉であつた。(中略)

「今直ぐ別れてくれといふわけでは、ないけれどね。その気持ちで丈けはゐてほしんだ。親達のことを思ふと、矢も盾もたまらなくなるのでね」こんな会話の中から、ふと梶子は、春吉の背中の両親の面影に対し、自分の両親の顔をば、心の中で、引きあひに出さずにはゐられなかつた。何といふ両親の顔からの作用のちがひだらう。この作用のちがひは、二人の生活の上に、いろいろな蔭をつくつた。(31-32 頁)

春吉の両親が「出戻り女」である梶子を認められないため、春吉とは秘かに付き合っている。春吉と結婚を前提とする交際の不可能が分かっている梶子は、幸福とは必ずしも結婚と繋がるとは限らないと考えている。そこで、交際関係に対して梶子は前向きな姿勢を持っている一方、春吉は鬱々として晴れなかったの

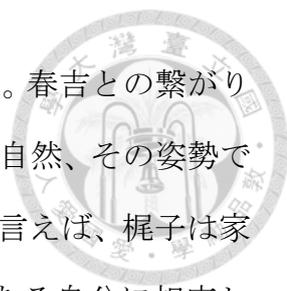


である。そして、春吉との会話から愛している人の親に否定された事実を改めて気づいた梶子は、自分の親を引き合いに出して自己肯定を保ったり、自分の不幸な境遇を親のせいにしたりにしながら甘えるのである。要するに、上述した宿命のようなものが二人の関係に影響を与えたというのは、親の育て方と生い立ちの違いを指しているのではないであろうか。なお、上述した二人の会話以外に、母親から心を込めて届いた荷物をもらって「気重な顔」(33頁)になった春吉は、「梶子のやうな女と親に内緒で一緒に暮らしてゐる自責で、口も利けない面持ち沈み込む」(33頁)という様子を傍から見る梶子の心境は、以下のように描写されている。

いつかは春吉から身を引かねばならない、と観念してゐる自分の顔の後ろの、自分に、何も送つてなどくれない母の面影が、何か大へん遠々しい他人の顔のやうに振り返られる。「こんな親の顔のおかげで、私はいつまでも幸福をつかめないのだわ」そんな風に、自分では甘えと気付かずに、ぽんと一言、悪たれた独言を母の顔に投げつけておいて、ほつと梶子は息をつくのであつた。(33頁)

つまり、ここでは、梶子は春吉の親子関係を羨んでさえいれば、自分の親のことを思い浮かんで恨み嘆いているのである。幼少期に親からまともな愛情を受けなかった梶子は、母親に対する怨嗟というよりは、むしろ親に甘えたい気持ちがここには表れていると言えよう。ところが、いつか春吉と別れる事実を受け入れることは梶子にとっては容易ではないであろう。なぜなら、親の愛情不足で育った梶子は、他人の身から愛情や関心を持たれることを通して自分の中にある欠損の部分をしてできるだけ補おうとしているからである。

今の自分の生活態度について、梶子は「女の小説家として、何か特別な生活の



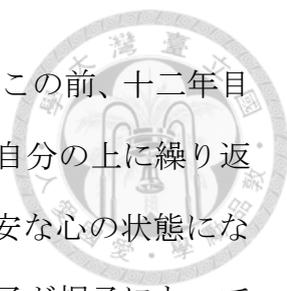
仕方があるのを探らうとする姿勢に、いつの間になつてみた。春吉との繋がり方も、そして、いつかは来るにちがひない春吉との別れ方も、自然、その姿勢で処理する気構へになつてみた」(34頁)と考えている。端的に言えば、梶子は家庭生活と仕事の両立に困難があることに気づき、女性作家である自分に相応しい「特別な生活の仕方」を探し続けてきたのである。恋に落ちたり、失恋したりしても、それは自分の特別な生活の一部になることを認識し、積極的に生き方を探っていると窺えよう。

2. 過去との和解

前述したように、春吉の親の関係で将来が見えない二人は、「立派になりさへすれば、別れたつて、どうしたつて、いいのよ」(37頁)という思いつきがある状況の下で、妹が手紙で母親の病気で入院したことを知らせたから1年経った4月に台湾へ旅行することになった。この旅は、春吉にとっては仕事の上に重要な意義を持っている一方、梶子にとっては15年ぶり²⁷の母親との再会であった。基隆へ上陸した際、梶子と春吉とは別れて別々に旅行することになった。梶子は一人で台北から夜行の汽車に乗って家族のいる南部へ向かった。家族は15年前梶子が出奔して間もなく中部の町を離れて南部の町に引っ越しし、父親の仕事も学校の先生から神主になっている。²⁸夜行の汽車に乗っている梶子は台南に近

²⁷ 1921年真杉静枝は台湾を出奔し、1939年中村地平と共に台湾へ行ったことを推測すると、その旅は18年ぶりの再会であったが、随筆集『甲斐なき羽撃き』においては16年ぶりの再会と書かれている。

²⁸ 十津川氏によると、真杉千里が台中の教職を辞し信仰生活に入ったのは、静枝と武者小路との醜聞が世上をにぎわせた後のことである。(十津川光子、前掲書、32頁)また、『臺灣總督府職員録』により、千里は1922年から1929年にかけて台中州立台中第一中學校(現、台中市立台中第一高級中等学校)に勤め、1930年から1937年にかけて南靖神社(現、嘉義県水上郷)の社掌を務め、1938年から1944年にかけて曾文神社(現、台南市麻豆区)の社掌を務めている。つまり、1939年の静枝は台北から台南へ家族を訪れる。『臺灣總督府職員録』214-427頁、<https://who.ith.sinica.edu.tw/>、「中央研究院臺灣史研究所」、2022年6月9日閲覧)



づけば近づくほど「次第に心が重々しくなるのを感じてみた。この前、十二年目に妹をみた時の打撃が、も一度、他の家族達の面影によつて、自分の上に繰り返る。さういふ予想だけで、病気にかかる前でもあるやうな不安な心の状態になる」。(39 頁) 当時、東京見物に来た 12 年ぶりの妹・光枝の様子が梶子にとっては大打撃であった。それは、「母親のつくつた通りのコースを結婚へと入つたのであつたが、子供を三人も生んで未亡人になつてしまつた。台湾の陽にやけ、未亡人の苦勞で骨のコツコツになつたが、まるで娘時代の面影の少しもない」(34 頁) という光枝に大きな変化が見られる。そこで、長年に渡つて他郷を漂泊してきた梶子は両親のいる故郷に帰ろうとする時、自分のいない間にいかに変わってしまったのであろうかという不安を抱えており、家族と対面するのに怯えているのであろう。

夜明けの 4 時ごろ、台南の小さな駅に着いた梶子を光枝と一番上の子は迎えた。「ほんとに、ようこそいらして下さいましたわお姉さん。みんな、待つてみますのよ。おばあちゃんも、子供達も、電報をみた時から大きわざ。——私はね、御滞在中は、学校のお勤めの方犠牲にしても、おもてなしするつもりだよ、お姉さん」(41 頁) と光枝が梶子に言った。このように、「何が何でも肉親愛で姉の心を家へつながなくては、と手ぐすね引いてゐるところもみられるのであつた」(41 頁) という光枝の態度が見られる。そして、自動車は神社のあたりに到着してから、社務所の玄関で父親と母親は立ち並んで梶子を迎えようとする様子である。「おぢいちゃんの頭は、もう真白なんですから、びつくりなさいますなよ」(42 頁) と光枝は横から梶子に注意した。15 年ぶりにようやく再会する場面は以下のように描かれている。

梶子を迎へて、先づ母が「おほう」といふやうな高い笑ひ声をあげ、みちがへるほど細く痩せた姿でひよこりとお辞儀をしたのである。



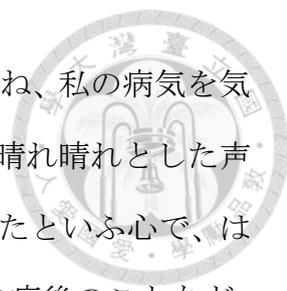
「ようこそ、ようこそ」

父は持前の昔のままな、いくらか品のある口許のうれしげな皺で、早口に云ひながら手をさし出してゐる。母の高い笑ひ声と一緒に、梶子も光枝も何かをかしくてたまらないことでもあるやうに、挨拶のかはりに、只、声をあげて、身をよぢりながら笑ふばかりであつた。(中略)

只、笑ひこけてゐて、涙と皺だけが動いてゐる、そんな瘦せた母の姿には、昔梶子をいやがらせた。あんな女のほひは、もうひと雫もみ出せなかつた、梶子の前にあまりぴつたりと坐つたりせぬやうにと気を配つてでもゐる風に、そはそはと立つて、台所へいつてまで笑ひ声をやめぬやうにしながら、母は何かもてなしにとりかかつてゐる。(42-44 頁)

引用から家族の言葉の代わりに笑顔で今までこじれた親子関係が修復されていることは明らかである。また、下線を引いた描写のように、母親は体形の変化や顔の変化で確実に老けたと見られ、態度も以前と違って柔らかくなり、渡り鳥のように里帰った梶子をもてなす姿勢である。それに、第1節で述べたように、梶子は思春期から母親の女性性に対して嫌悪感を抱いているが、15年後母親の姿が梶子には既に女性性が感じられなくなった老婆である。

台湾の滞在期間、梶子は「この家で、からだの色素が染めかほりでもするほど、幾日もよく眠」った。さらに、家の周りの「果てしない南方的な平野の眺めに包まれ、ほの暖かい南風の息づかひの中で」、彼女は「うつとりとしながら、子供達にからみつかれてゐる間に、ふと、東京の町のことを思ひ出したりしたが、まるで激しい怒濤の流れをでも遠く眺めるやうな気がした」。(44 頁) よって、この描写には十数年前親から離れて東京で生活してきた梶子は今まであてになかった家族のいる家を現在避難場所として怒濤の日々から遠ざかった梶子の心境が垣間見することが出来るであろう。ある日、母親は梶子を連れて以前重病で



世話になった奥さんの家を訪れた。母親はその奥さんに「娘がね、私の病気を気づかづ、わざわざ東京から見舞ひに来てくれましたのよ」と晴れ晴れとした声で言っている。母親の言葉に対して、梶子は「ああ、さうだつたといふ心で、はじめられたやうに、さう云つてゐる母の横顔に眼をやつた。母の病後のことなど、まるで考へにない親不幸な心でここまで来てゐる梶子を、ちやんと知つてゐる母にちがひはなかつたが、母はこれだけの自慢をきつと大分前から此処へ来て云ひたかつたのにちがひない」と考えている。当時、危篤状態に陥っている母親の有り様が奥さんから聞いた梶子には「はじめて、じつくりと梶子の心を嘔むやうにひたして来た」のである。もし和解しないままで母親が死んでしまったらと思つている梶子は「初めて切なくなつた」。(45 頁) このように、「奥さん」の家を訪れることを通して梶子は、長年の間心の中に持っている母親への恨みや不満が次第に消えていくうちに、過去と和解することができたと言えるのである。

さて、梶子は家族のいる家を出発する日、母親だけが汽車で途中の駅まで送つて来た。母娘の再びの別れの場面は以下のように描かれている。

骨ばかりになつたやうにみえる母が、プラツトフォームに立つて、吹きぬけてくるやうな悲しさに堪へようと、薄い肩を、しやんと張つてゐる姿に、梶子は、せいいつばいの笑顔をつくつて、ほら、私は笑つてゐますよ、といふ顔で、別れのあいさつをした。母は、よしよし、といふやうに、気丈らしく頷き返してゐたが、発車のベルのけたたましさに衝かれたやうに、そのくぼんだ眼の上の眉が、ふとくづれるのを梶子はみた。

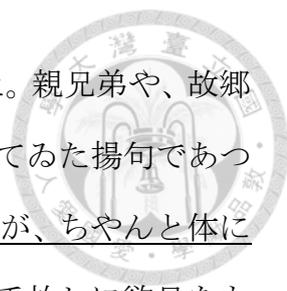
汽車が濁水溪をわたる頃、梶子は、ありふれた感情にちやんと陥ちたわ、と思ひながらも、母にみせなかつた涙を、出放しに流した。何かこんな時にかいておきませうと思ひながらノートを出したが、次のやうなこととしか

書けなかった。「汽車が出る頃から、侘しさがひしひしと胸に喰ひ付いてよ
わりました。東京へ帰りましたら、こんどこそ一生懸命、立派な存在になら
う、と思ひます」(46-47 頁)



下線を引いた描写のように、梶子が母親に心配をさせないため笑顔を作ろうと
するのに対して、母親も娘に支持や肯定の意味を示すように娘の笑顔に頷き返
した、15 年に渡って抱き続けてきた母娘間の葛藤は今回の里帰りを通して解消
したことが示されている。それに、ノートに書かれている「東京へ帰りましたら、
こんどこそ一生懸命、立派な存在にならう」という言葉は、梶子が 15 年前出奔
する時、親への手紙に「都会へ出て、何か立派なものになつて、きつと御恩に報
います」(19 頁) と書いた言葉と余り変わらないが、全く心境が違うと見られる。
なぜなら、15 年前反抗した梶子は親に支え合ってもらえなかったため、自責の
念や怨嗟を抱いている一方、今は心の支えになっている親がいることを感じて
いるため、今度こそ立派になって父母の恩に報いる気持ちがしっかりしている
のであろう。

そして、台北の駅で春吉と合流する梶子は、「母はもう、家へ着いた頃であら
うか」(47 頁) と母親のことを思っている自分を、「大分私は変りましたのよ」
(47 頁) と春吉に言おうとするが、「もの憂かつた」(47 頁) ため結局何も言わな
かった。この旅の終わるとともに、春吉と別れるという現実近づいてきたが、
春吉と別れることには「もうそれほど痛手ではない、——そんな気になつてゐる
自分に、梶子は気付いた」。(47 頁) 言い換えれば、梶子が母親のことを思うよ
うになったのは家族との絆、所属感を持っているからであろう。一方、真杉静枝
は随筆「私の生活」において、十数年ぶりの里帰りに関する感想は以下のように
述べている。



この間、台湾へいつて十六年振りの母に会ったのであつた。親兄弟や、故郷などを、まるで持たない人のやうな生活を、十六年も続けてみた揚句であつたが、会つてから後の気持は、まるで今まで無かつた脊椎が、ちやんと体に入つてやうな感じである。それに、何でも愛する者には、手放しに慾目をもつて仕舞ふ私の癖でいまのところ、珍しい自分の肉親達の面影が大へん美しく心に光つてゐて、その面影がせいぜい私の生活に力を與へてゐる。²⁹

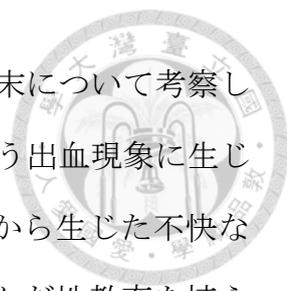
よつて、十数年前、親元を離れる真杉は、心の支えになっているものの無い都会で、恋をして、好きな人に依存しながら一人暮らしをしてきた。しかしながら、好きな人と別れるたびに心の支えがなくなるということが繰り返される中、母親と和解するに至つて真杉はやつと心の支えになる真の存在——家族——が見つかったのである。まとめて言うと、梶子にとって心の支えになっている家族がいるこそ、春吉との別れが怖いものでなくなったのではなかろうか。要するに、十数年ぶりの里帰りは梶子の自己理解と自己成長に重要な役割を果たしたと言えよう。

第4節 結び

第2章では、「むすめ」に登場した主人公梶子が母親との葛藤に注目し、母親との不和からやがて和解に辿り着くまでのプロセスを通して、梶子が少女から女性への成長に伴い自分の人生に対する心境の変化を考察してきた。また、梶子が母親との葛藤がどのように描かれているのかを見ていく過程で、梶子の自己成長及び自意識からその女性像を明らかにしてきた。

まず、第1節では、「むすめ」において梶子の児童期から思春期まで、母親とのこじれた関係の顛末が描かれていないため、先行研究と戦後描かれた自伝小

²⁹ 真杉静枝「私の生活」『甲斐なき羽撃き』（協力出版社、1940年）19頁。



説「或る女の生立ち」と小品「母親」の検討を通して、その顛末について考察した。つまり、「むすめ」において梶子は母親の生理や流産という出血現象に生じた嫌悪感、または自分の初潮を母親に告げた時の母親の冷淡から生じた不快な思い出の原因は、身近な女性である母親が児童期の梶子に歪んだ性教育を植え付け、女性の生理を恥や不祥事であるかのように教育したため、同じく女である梶子が母親の女性性に対して強い反発や嫌悪感を抱いたのである。こういう梶子は児童期から母親に対する疎外感を抱いている一方、思春期から女性の生理現象にも屈辱感と嫌悪感を抱いていることが明らかになった。一方、2-1-2では、ミソジニーの観点から母娘の間に生じたぶつかり合いについて検討した。梶子と龍田先生との会話及びそれに対する母親の反応に関する描写を取り上げ、梶子がミソジニーを核として組み込んだ家父長制に対抗する意識を持っていることが分かった。さらに、家父長制的な意識が浸透している人々に女性と見なされる眼差しは、梶子にとって一種の侮辱のような感じであったことが明らかになった。

次は、第2節では、17歳年上の男との結婚を強いられた梶子は、作家志望で夢を追いかけるため家から出奔し、母親の支配から逃れることを通して自分の人生の支配権を取り戻すという家父長制への反抗の姿勢が明らかになった。つまり、家父長制の代理人として母親は梶子に伝統的な性別役割を果たさせたが、梶子はそうした母親の支配や強権に反抗し自我を貫こうとした女性である。

最後、第3節では、都会で十数年も生活している梶子の心と十数年ぶりの里帰りの心境の変化について論じた。まず、2-3-1では恋愛を通して梶子が成長し、また自分を成長させた彼らは彼女の心の居場所になったことが窺える。そして、春吉との関係がうまくいかない場合、梶子は自分の親を引き合いに出して自己肯定を保ったり、自分の不幸な境遇を親のせいにしたりしながら甘えるのである。一方、彼に比べ、そのような梶子は生き方を探し求め、積極的に人生と向き



合う姿勢が見られる。2-3-2 では、十数年ぶりの里帰りの間に、母親との和解を通して梶子は心の支えになる存在が見つかったほか、梶子は30年以上ずっと縛られていた罪悪感や過去の辛さから解放され、自己理解ができ、大きく成長したのである。そして、家族の絆という心の支えになる存在を確認できたため、梶子が春吉と淡々と別れられたことは、前向きになってその後の人生を歩み出すことができるといえるのであろう。





第3章 「母の傑作」「烏秋」—姉妹をめぐる物語

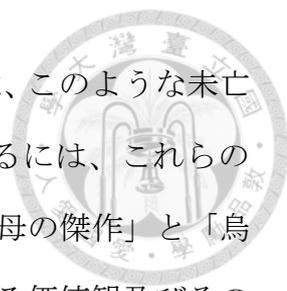
『婦人文芸』1934年7月創刊号に掲載されている真杉静枝の随筆「私の妹」において十数年ぶりに再会する妹・道野勝代への思いが描かれている。台湾を出奔して以来、勝代が姉と両親の間に挟まって仲を取り持っているため、真杉にとっては大切な存在であった。武者小路実篤とのスキャンダルが台湾の新聞に載ったことで、親を悲しませた真杉はその後親から手紙をもらえなくなったが、勝代は「お姉様のお気持、私には、理解出来ます」¹という慰めの言葉を書いた手紙を寄こしてくれた。両親は真杉の失敗を繰り返させたくないため、勝代の結婚は「慎重に扱はれ、極当たり前の事であるけど、当人同志の考へを主にした取り組をさせた」²という通常な結婚であった。しかし、幼い二人の子供をかかえて未亡人になった時、妊娠中の勝代はわずか25歳であった³。未亡人になった勝代は、一家の生計を立てるために公学校の先生⁴になって育児をしながら働いているのである。つまり、育児と仕事が両立する生き方、すなわち性役割と社会的役割を果たしている、真杉静枝とは全く異なる生活を送っている。植民地台湾で三人の子供をかかえて生き抜いていく未亡人である勝代は、「母の傑作」の桂子の妹と「烏秋」の照枝のように、いずれも真杉の小説の主人公として登場している

¹ 真杉静枝「私の妹」(『婦人文芸：復刻版』第1巻、1987年、不二出版)100頁。

² 同上、100頁。

³ 昭和5年(1930年)公学校の校長先生である勝代の夫は心臓麻痺で死亡した。十津川光子『悪評の女』(虎見書房、1968年)、185頁。真杉静枝「私の妹」『婦人文芸：復刻版』第1巻100-101頁を参照。

⁴ 『臺灣總督府職員録』により、勝代が1932年から1937年にかけて台南州水上公学校(現、嘉義市崇文国民小学校)に勤め、1938年台南州麻豆女子公学校(現、台南市培文国民小学校)に勤め、1939年から1944年にかけて台南州曾文家政女学校(現、曾文高級家事商業職業学校)に勤めている。(『臺灣總督府職員録』253-712頁、<https://who.ith.sinica.edu.tw/>、「中央研究院臺灣史研究所」、2022年6月16日閲覧)



である。姉としての眼差しで妹勝代の生き方を見つめる真杉は、このような未亡人及び自分の生き方に対するそれぞれの女性の態度を読解するには、これらの作品が最も効果的な作品と考えられる。そこで、本章では、「母の傑作」と「烏秋」における姉妹二人を中心に、彼女たちが恋愛・結婚に対する価値観及びその女性像を明らかにしていく。

第1節 「母の傑作」一見せられたくない女の姿

1. 「幸福な普通の女の生活」⁵について

「母の傑作」⁶は、1939年7月『婦人公論』に発表された作品であり、主人公桂子の妹が植民地台湾から東京見物に来て、桂子と12年振りに再会する物語である。東京で生活している桂子は妹に見せたい姿が、現在の自分ではないため、妹との再会には少しも嬉しいと思えない。現在の桂子は、「一人の男に捨てられようとしてゐる」(3頁)気がするのである。三ヶ月前から親しくなった恋人平次は最近結婚の話を出したにもかかわらず、急に結婚を躊躇しているように見えるからである。平次は「苦勞をしたことのない、仕合せな境遇で、生活の垢を身につけず、そして純な気持ちをそのまま大きなからだに持つてゐる男」(4頁)である一方、桂子は親の元を離れて自立して「いろいろの苦勞をして、恋愛の経験をも持つてゐる」(4頁)という強情で恋多き女である。よって、生い立ちの違い、対照的な性格を持っている二人は、平次の親の反対⁷で恋愛関係に亀裂が

⁵ 真杉静枝「母の傑作」『万葉をとめ』(人文書院、1940年)16頁。

⁶ 「母の傑作」の引用は真杉静枝『万葉をとめ』(人文書院、1940年)により、旧字体は新字体に改めた。

⁷ 平林たい子が「真杉静枝さんと私」『自伝的交友録・実感的作家論』(文芸春秋新社、1960年、27-42頁)で「二人の同棲を地平さんが国にいつてやつたら、お父さんが早速上京したので、真杉さんは最大限のサービスで、歌舞伎座へ招待したり歓待したけれども、結局両親はこの結婚に反対といふ結論をもつてしまった」(36頁)と述べている。また、「真杉静枝の愛」『ひと



入ったかのように思える。

そこで、恋人のことに煩わされる桂子は、「さんざんなほど、今不仕合せな身の上になつてゐる」(3頁) 未亡人の妹との再会に「何となく恐ろしかつた」(3頁) 上に、「もつと私の気持の幸福なのびのびした時に来てくれればよいのに」(3頁) とさえ思った。また、妹が到着する前に平次と二人で食堂へ行く桂子は、そこで僅かの時間を利用し、二人の関係について話をしようとしたが、平次から妹の滞在時間を尋ねられたら、「どうして二人の根本問題に、いきなり触れてはくれないのだらう、といふやうな苛々した気持で「さあ、十日位ゐでせう。何でもいいから、ごまかして、私追ひかへしてしまふわ」と、さも意地の悪い調子で云つた」。(7頁) さらに、平次は今夜の待ち合わせの約束を取り消そうとするが、桂子は「どうして? 妹来てゐても、私出かけるの、平気よ」(8頁) と苛立たしく言った。このような桂子の態度に対して平次は不快な気持ちになつたため、二人は気まずい雰囲気の中で食事を済ました。要するに、桂子は妹と久々の再会より平次との問題のほうが優先する心境が見られる。桂子は地下道で平次と別れてから鬱陶しい気持ちのままに駅へ妹を迎えに行った。再会した時の桂子の表情に注目してみよう。桂子は「妹だと判つた瞬間に眼をそらした。十二年の間の妹の身の上が、この時一時に大きな弾丸になつて、姉の心を打ちぬいた」。(12頁) そして、「只茫然と、まアまアといふやうな驚きや悲しみの嵐をやり過しながら」(12頁) 暫く口がきけなかつた。12年ぶりに妹の姿を見て衝撃を受けた桂子は妹と一緒に降車口で荷物を受け取るために、長い椅子に並んで腰を下ろす。待っている間に、妹の心境は以下のように描かれている。

『つづの文壇史』(新潮社、1967年)でも「真杉静枝さんは、中村さんの親が結婚に反対なのはわかるが、それにしても、むすこの地平さんが、あまりにも柔順すぎると齒がゆがっていた」(178頁)と述べている。以上から、地平をモデルにしている平次と桂子との結婚は平次の親が原因で二人の関係はうまくいかないと推測できる。



すっかり素晴らしい、都会の女になつてゐる姉が、なんだか他人よりも非常に遠い人のやうな気がしてゐる。一分の隙もないと云へるほどの姉のさつさうとした姿に、妹は、すこし親しまうとはずんで来たのが、はずみぬけたやうな気持がしてゐる。妹は痩せた黒い木片のやうな手を、膝の上に置くといふ、一寸した自分の動作にも、窮屈になつてしまふやうであつた。

(13-14 頁)

遠くから来た妹は、やっと会えた姉との距離を近づけられないことに気づき、姉のそばに窮屈に感じる。一方、桂子の方は、沈黙が続いて気まずい空気になつた時、「どうしたんでせうね、荷物、まだ来てゐないのかしら」(14 頁) と言ひ、「落着き切れない尖つた顔で時計をみたりしてゐる。どうみても他人よりも冷たんな顔付きだつた」。(14 頁) 冷たく振舞っている桂子は、妹の姿で「心でまだその驚きをしづめ切れないのである。時々、ほんの一寸盗むやうに妹の姿を切りとつて眺め、少しづつ姉の心に納得がゆくやうに自分で調子をとつてゐるところ」(15 頁) である。とはいえ、姉の心境を察せられない妹は、姉とさりげなく距離を縮めようとするため、「姉が膝の上に持つてゐる、小さなレクラム版の本を何を読んでいらつしやるの、といふ風に、頁をのぞいたりして」おり、さらに「もつと甘えて、いきなり湧き出るやうな話を、——私もね主人に亡くなられて、大変苦勞をしましたわ。——と云ふ風に傷口でもみせるやうに訴へてみたいのだ。けれど、いきなり姉の方から拍子をはづされた。調子のぬけた手持無沙汰な、とりつき端のない思ひなの」(15 頁) である。

桂子は妹の姿について「子供を産むと、こんなに女の姿はむごたらしく骨張つてくるものであらうか。いや妹は、良人をなくした故に醜くなり、子供を養はねばならぬために、骨張つたにちがひない」(16 頁) と考えている。さらに、このやうな妹を見ているうちに、桂子は 12 年前母親の価値観に抵抗して理想の生き

方を追求しようとするため家出をした時、母親からもらった手紙の内容を思い出した。



お前と云ふ娘には、大した失敗をしたから、妹にはできるだけのことをして、幸福な普通の女の生活をさせるつもりです。妹娘だけは、私の「母の傑作」にするつもりです、といふやうなことがかいてあつた。

「母の傑作」——これがその傑作の姿かしら。——よくまア、こんなにむごたらしい姿にして。——と、いきなり、姉の感情で、妹の姿の痛々しさ丈けを母に叩きつけたくなる。「これでも幸福にしてやつたと云へますか」——妹のせい—ぱいの旅装のつもりらしい洋服は、ギンガムのプリントもので、それに、子供のものみたいな粗末な麦藁帽をかぶつてゐる。姉は、これが「母の傑作」だらうか、と尚ほも心が波立つのである。(16頁)

母親にとって「幸福な普通の女の生活」とは、結婚して主婦になるという妻の役割を果たすことである上に、母の役割を果たすことも女性にとって当たり前のことである。このように、娘の将来に対して支配的な母親は桂子をコントロールしようとしたが成功しなかったため、妹娘に母親の願望を託し、通称の理想的な女の一生を通して自分の「傑作」を作り上げるつもりだったのである。そこで、我の強い桂子と異なり、母親の意思に従って従順に生きている妹は、妻、そして母の役割に献身的な生き方をしている。しかしながら、母親の言う通りに「幸福な普通の女の生活」を送ろうとした妹は、夫の死によって生活が狂ってしまい、結局、悲惨な生活を送る羽目になってしまった。そのような植民地で苦労を重ねる妹の姿を見た時、都会で生活している桂子は、大きな衝撃を受けながら、「幸福な普通の女の生活」という母親の言葉に哀れみと怒りを感じたのであろう。ところで、妹は自分の境遇についてどのような考えを持っているか、次項で考察し

ていく。



2. 妻の役割が終わった妹

その夜、桂子は約束通りに平次と合い、深夜 12 時ごろまで散歩している。しかしながら、妹は下宿でまだ寝ないで姉の帰りを待っている。桂子が帰ってきたら、妹は姉に初めて亡くなった夫のことや植民地生活をについて話した。

「矢張り、あんな時に、私一ばん辛く思ひましたのはね、私が主人に我儘ばかり云つたといふことですわ。あれほど早く亡くなる人だとは思はなかつたので、随分我儘に暮らせて頂いて……」と、ふと声をうるませたりした。

「でも子供は、とても元気ですしね、父も母も彼地でとても大元気よ、お姉さん。私も毎日、学校勤めをしてゐますけど、それもとても楽しくつて、何一つお姉さんに気にかけて頂くやうなことはありませんのよ、お姉さん……」(中略) ——それから、話が明るい方に向いて、妹の教へてゐる土人の一年生達は「ハタ、タコ、コマ、ハト、マメ」の教科書に一々小さな字で台湾語の註をつけてゐること——いろいろとユーモアのある土人の学校風景を話して、姉を笑はせた。(19-20 頁)

夫が亡くなった妹は、姉に自分の苦痛を訴えようとしたかっただろうが、姉に心配させたくない思いで、明るい話題に変えたという妹の優しさが見られる。その一方で、桂子は妹に慰める言葉をかけようと思っていたが、「良人になくなられた妹の人生は真暗ではなかつたのだ」(20 頁) と勘違いしている。さて、再会の時から妹と距離を置いたかのように見える桂子は、この後妹にどのように対応するか、姉妹二人が江の島を散策する場面を見てみよう。



「江の島の景色と鬼がら焼の味は、一生忘れないわ」

妹はそんなことを云った。でも桂子は、かういふ食卓についてみながら、矢張り思ひが平次の方へばかりうばはれて、吐息ばかりがほつと胸を突いて出てしかたがなかつた。食事を終つて、山を登りはじめてからも、何度も吐息が出た。振り返つて「ああ、セザンヌの絵にあるやうな海の色ね」と独言しながらも、心では、そのとほりの言葉で、平次に今日の景色を話しませう、としか思へなかつた。するとこの時であつた。桂子の後に立つてみた妹が、ぼそりと云つた。

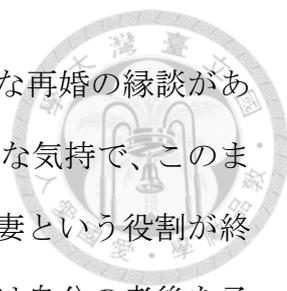
「お姉さん、なにか御心配ごとがおありになるみたいで、御一緒に歩いてみても、気になつて。吐息なさる度に……」

桂子の頬が、じいんと凍つたやうな気がした。妹の調子は、とても、昔桂子におぼえのある母の言葉に似てゐた。

「眠り足りないからよ、屹度」

途中、幾度も姉妹は休みながら山を登つたけれども、何かもの悲しい気持で、二人共あまり口を開かなかつた。(22-23 頁)

特別に休みをアレンジして姉妹二人で江の島へ行つたが、桂子が平次のことばかり考えて悩んでいる様子が描かれている。また、悩んでいる自分の様子が妹に気づかれたら、自分の不如意が見えないように虚勢を張っている桂子の強情な性格が窺える。さらに、妹に対して素直になれない点も、かなり妹を傷つけた。なお、頂上に着いた後、気まずい空気をほぐそうとする妹が「私、子供の成長をたのしみに未亡人の生涯を終つたからと云つて、決して、子供に恩をきせようとは思ひませんのよ」(23 頁)と親子関係に対する考えを話した。桂子は「さうなら、大へん安心よ。子供から何かを返して貰へるといふ期待で、一生を犠牲にしたら、それこそ子供にも迷惑なことだし、大へんみじめな晩年を送らねばならな

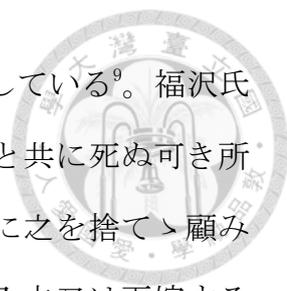


いからね……」(23-24 頁)と賛同の意を表した。妹はいろんな再婚の縁談があったが、それに「一寸も自分の心が動かず何でもない極く自然な気持で、このまま落着いてゆけさうな気がする」(24 頁)のである。つまり、妻という役割が終わった妹は、子連れ再婚したくない心境が窺える。しかも、妹は自分の老後を子供に丸投げな親にならないことや、子供に過度な期待をかけずに依存しないとはっきりと考えているのも明らかであろう。なお、水田宗子は文学に描かれている女性について、以下のように語っている。

従来、文学に描かれてきた女性は、多く、社会的に規定された性役割を持つ存在であったり、妻であったり、未亡人であったり、独身女であったり、石女であったりする。このような性役割、そしてまったく個人的な性的特質が、そのまま社会的役割と同意義であるところに、文学に描かれてきた女性像の特徴があった。(中略) 女性の場合は、教師であることと独身であるが奇妙に一致していたり、職業を持つ女性が、伝統的な性役割を果たさない女性と同一のイメージで描かれたりする。女性像が常にステレオタイプ化の犠牲になりやすかったのも、この性役割と社会的役割の直線関係、あるいは同一性によるところが多い。⁸

つまり、水田氏の指摘に従えば、文学における未亡人は単なる性役割を果たしている女性像として描かれているのである。しかしながら、桂子の妹は、夫が亡くなった後、経済的に安定する教師という職業に従事しながら子育てをする、所謂仕事と育児を両立させる逞しい女性として描かれている。ところで、「未亡人」という言葉の意義について改めて考えてみよう。まず、福沢諭吉は『福翁百話』

⁸ 水田宗子『ヒロインからヒーローへ』(新版)(田畑書店、1992年)135頁。



第44章「婦人の再婚」の中で、「未亡人」という言葉を批判している⁹。福沢氏は「良人を喪へば乃ち目するに未亡人の名を以てし恰も良人と共に死ぬ可き所を不思議に生き残りたるものゝやうに視做して親戚朋友の間に之を捨てゝ顧みる者なく假令ひ或は家道生計等の都合に迫られて止むを得ず入夫又は再嫁することあるも其実は之に満足するに非ず本人に於ても聊か恥かしく思へば周囲の人も窃に悦ばざるの意味ある」¹⁰と述べている。加藤秀一は、「夫を亡くした女性が、いわば「良人と共に死ぬ可き所を不思議に生き残りたるもののように」みなす風習の上に成り立った言葉だからである。それから百年以上がたった現在もなお、この言葉が堂々とまかり通っている現実を思うと、女性を男性の付属物のように扱う文化の変わらなさにため息が出るようである」¹¹と語っている。なお、上野千鶴子が「未亡人」については「そもそも「未だ亡き人」という呼び方自体が差別的だ」と提起した上に、「夫に死におくれた女性は社会的に存在してはならないカテゴリーであり、夫の死と共に、火葬の火に身を投げて後を追うべきだとされている。妻におくれた夫についてはこの規定はないのだから、これは全く男性優位の二重基準である」¹²と批判している。しかし、このように見てくると、女性が男性に従属するものという発想から生まれてきた言葉は、男性はもとより、女性自身もその言葉に不審を感じないで使用しているという社会の一般的な常識が通用しているという現状も事実であろう。そのような現象について、小泉譲が「男性中心主義の社会道徳が産んだ慣習を永い歴史によって自然に置き替えてしまったから、そこに日常性を感じ、そういう言葉に抵抗を感じないでいられるわけでしょう」¹³と論じている。そのため、経済的な理由で再婚すること

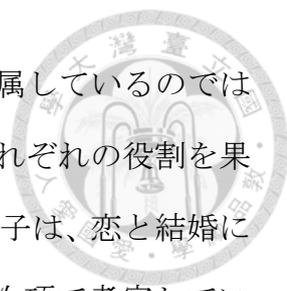
⁹ 福沢諭吉『福沢全集』第7巻（国民図書株式会社、1926年）88-90頁。

¹⁰ 同上、89頁。

¹¹ 加藤秀一『＜恋愛結婚＞は何をもたらしたか』（筑摩書房、2004年）81頁。

¹² 上野千鶴子『女は世界を救えるか』（勁草書房、1986年）147頁。

¹³ 小泉譲『女性文学論』（朱雀社、1959年）25頁。



ではなく、自立して経済力を持っている桂子の妹は、男性に従属しているのではなく、経済面でも、家庭内でも独立した一面を見せ、立派にそれぞれの役割を果たしていると言えよう。引き続き、平次のことで悩んでいる桂子は、恋と結婚に対してどのように考え、どんな姿勢を構えているだろうか、次項で考察していく。

3. 結婚に至らなかった恋

さて、平次のことばかり考えている桂子は、妹に結婚を催促された後、苛立っている場面を見てみよう。

「お姉さんこそ、早く何々夫人と云はれるやうにおなりになればいいのね、うちでもお母さんはそればかり云つて、今度はぜひさういふ話もするやうにつて……」

桂子は、立つて足許の石ころを一つひろつて、カーぱい高く海に向けて投げてみながら「気持が悪くはないの？」と、何気ない調子で云ひ出した。

「気持が悪くつて、何をですか？」

「私が、結婚する話なぞしたら、——あなたは若いに、未亡人だし、尚ほ、それで押し通さうとしてゐるのに……」

「どういたしまして」妹は陽気に云つた。

「できることなら、さういふお話で、うんと喜ばせて頂きたいのよ」

「何も彼も、うまくゆかなくてね」と、ふと、平次のことが唇を出かけたけれど、桂子はそれをやめた。そして、よろこばせて頂きたい、と云つた言葉にあたへる気で、「勤め先は、とても愉快で、いいんだけど、ね、貯金も、大分できさうよ」と云つた。(24-25 頁)

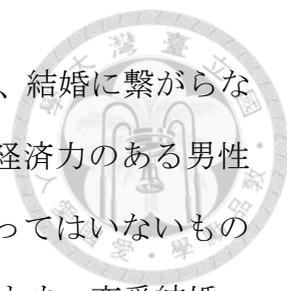


恋愛がうまくいかない桂子は、妹の無心な言葉が嫌味や皮肉のように聞こえ不快を感じ、自分の不如意を妹に話したくないため、更に妹を傷つける言葉で言い返した。本来、妹は「母の傑作」のように幸福な人生を送っていたが、夫に死なれた後、生活が一変してしまい、妻という役割が突然終わった。言い換えれば、結婚が即ち幸せであるなら、結婚制度の外側にいる女性は、不幸せな存在であると意味していることであろう。そのため、結婚制度の外側にいる桂子は、恋愛を結婚に繋ごうとしたかったが、思う通りにならないため、幸せ者と言えない、さらに、そのような自分を妹に知られたくないために、却って仕事を通しての自立実現、経済的な自立の一面をアピールをしている。

ところで、恋愛と結婚に対して作者真杉の考え方はどうであろうか。この点に関しては彼女が語った以下のような心境を手がかりにして明らかにしてみよう。

結婚によらない女性の生活を憧れたのではあつたが、恋愛までも、結婚によらず処理するといふ自覚はなかつた。(中略) 人を好きになる、といふことと、その人を自分の良人に持つといふこととはちやんと一緒に考へられてゐた。(中略) 親をはなれて、結婚によらない女性の生活を希んだのまでは、たしかに、一つの進歩であつたかもしれない。しかし、結果からいふと、自覚が今一步足りなかつたのである。自分の恋愛の本能を、どう取りかたづけけるか、といふことには、何の準備もなかつた。(中略) 結婚によらない恋愛が可能だと思ひこんだ、あやまちであつた。誤算に気付いてまもなく、私の二十歳代は終つた。¹⁴

¹⁴ 真杉静枝「甲斐なき羽撃き」『甲斐なき羽撃き』(協力出版社、1940年) 42-43頁。



このように、真杉が武者小路との愛人関係¹⁵で悟ったことは、結婚に繋がらない恋愛は自分が望ましいものではないという心境が伺える。経済力のある男性と結婚して、その人に依存して生きていくという価値観を持ってはいないものの、経済的に自立し、幸せにする結婚を恋愛の終着点——すなわち、恋愛結婚——は最も望ましい結婚だと二十代の時の真杉は考えていたのであろう。そして、30代、中村地平と恋愛していた真杉は、中村の親に結婚を反対されたことが分かっているにもかかわらず、「ひたむきに、愛する者を追う、いちずなもの」¹⁶という姿であると和田芳恵が評価している。従って、恋愛において、追われるより追う側に立っている真杉は、主導的な立場で恋愛を求める女性であることは明かであろう。しかし、真杉が中村と付き合っている間、「真杉さんのように台所へたつことがきらいな人は、きっと、男から、棄てられる」¹⁷と、林芙美子が和田氏に言ったことがある。言い換えれば、料理できない女性が結婚できないという性役割が厳しく要求されていた当時には、真杉のような恋愛を追いかける積極的な姿勢、あるいは自活の道を歩んでいこうとする女性は評価されなかったのは想像できよう。上野氏がこういう『『台所は不可侵な女の聖域』というイデオロギー』¹⁸を提起した上、「長い間、女性を台所に閉じこめ、男を家事の雑務から解放するという機能を果たしてきた」¹⁹と指摘し、さらに「多くの女性は、「夫が台所に立っている姿を見たくない」「女の恥だ」と考えている」²⁰現象も批判している。

一方、上野氏によれば、『『青鞥』の創刊によって日本の近代フェミニズム思想

¹⁵ 真杉静枝は大阪で女性記者として働いている時期、武者小路実篤と知り合い、1927年から1930年かけて武者小路の愛人になっている。「或る女流作家の生涯——時代に生きた真杉静枝女史の場合」『週刊サンケイ』4巻29号（扶桑社、1955年）18頁。

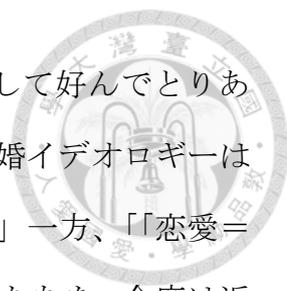
¹⁶ 和田芳恵「真杉静枝の愛」『ひとつの文壇史』（新潮社、1967年）181頁。

¹⁷ 和田芳恵、前掲書、182頁。

¹⁸ 上野千鶴子、前掲書（1986年）、144頁。

¹⁹ 上野千鶴子、前掲書（1986年）、144頁。

²⁰ 上野千鶴子、前掲書（1986年）、144頁。



が最初の産声を上げた時、当時の女性たちが女性解放思想として好んでとりあげたテーマである「恋愛の自由」、すなわち近代思想の恋愛結婚イデオロギーは「歴史上の一時期、たしかに解放思想としての役割を果たした」一方、「「恋愛＝結婚」という新たな制度をつうじて、伝統家族から逃れた女性たちを、今度は近代核家族のオりに囲いこんだ」²¹という両義性を持っているのである。例えば、「愛がある」と思いこんでいられるかぎり、女性はよろこんで従順な妻の役割を引き受け、あるいは「いつもすまないね、おまえ」と夫がやさしい声をかけてくれさえすれば、妻の苦労など吹っ飛ぶのである²²ということで、すなわち、恋愛結婚イデオロギーは、「女性を「妻の座」におさめることで、そのセクシュアリティをまことに有効に搾取する装置として作用してきた」²³のであると上野氏がさらに批判している。つまり、対等な関係を強調する恋愛結婚は、伝統的な役割にとどまっている女性を抑圧する結果に終わるのである。こうした恋愛結婚を望んでいる真杉は、結婚後、伝統的な役割を確実に果たすのか興味深い問題であるが、ここでは踏みこむ余裕がないため、今後の課題に譲る。

さて、物語の後半では、妹を見送った後、桂子と平次との関係に変化をもたらす出来事が起こる。それは、平次の婚約者が父親に決められたことである。

父は、平次の花嫁を、もう他にきめてあるらしい、といふのであつた。それを叩きこはすほど強くなるには、平次の優しい性格が許さないばかりでなく、平次に、親にも反対させるほどの元気をあたへるには、もつと魅力にとんだ桂子でなくてはならなかつた。

苦労でカサカサになつてゐる桂子のどこに魅力があろう。

²¹ 上野千鶴子『女という快樂』新装版（勁草書房、2006年）115頁。

²² 上野千鶴子、前掲書（2006年）、116頁。

²³ 上野千鶴子、前掲書（2006年）、116頁。



「別れてくれね」と云ひ出された時、それで桂子は、うんと自分を虐めつけてやる気で大きくなづいてみせた。(中略)

男を持たないで、苦勞だけがカサカサところがつてゐる桂子の、これからの永い一生が眼の中にひろがつた。

するとこの時、ふいに妹の言葉を思ひ出した。人の好い口調で「どういたしまして」と云つた。

あんな妹を。——と思ふと、突然、桂子の胸から、かたい栓がぬけたやうに、大波のやうな涙が、うねり出てきた。いきなり、大声をあげると、桂子は、草の上に、身悶えのたうちながら泣き伏した。(27-28 頁)

引用から、桂子は親に柔順な平次を責めるとは反対に、自分には魅力がないせいで、平次が親に反抗することができないと理解したため、自分を責めたのである。いくら悲しくても、相手を責めなくて何も言わずに別れ話を受け入れた桂子は、自分が一生独身で生きていく可能性があると考えたと考えると、育児や家事など一人で頑張っている妹のことを思い浮かべ、涙が止まらないほど泣いた。12年ぶりに妹がせつかく来たのに、桂子は思いやりのある妹を労わると逆に、八つ当たりしたかのように言葉で妹を傷つけた。桂子の妹への態度の原因については范淑文が、「妹の出現によって、桂子には台湾から来たというレッテルが貼られ、平次との結婚にマイナス的な条件になる」²⁴と指摘している。序論で述べたように、当時の台湾在住の日本人にとって、台湾生まれや台湾育ちは言いづらいことである。そのため、桂子は台湾育ちという背景を背負って今日まで一人で歩いてきた自分に魅力がないと感じたのである。そして、平次との結婚が破局になったこ

²⁴ 范淑文「真杉静枝文学に語られる「壁」——「烏秋」、「母の傑作」の主人公たち」『お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所比較日本学教育研究部門研究年報』第14号（お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所、2018年）127頁。

とに気づいた桂子は、夫を亡くした妹の喪失感のようなものをここで味わい、妹の気持ちを理解することができたと言えよう。

一方、上野氏が恋愛の中で、カップルは「アイデンティティの取り引きをする。それは一種の相互依存ゲームである。アイデンティティの相補的な供給源であるあなたとわたし。しかしこのゲームは、不安定な天秤のように傾きやすい」²⁵と指摘し、つまり、恋愛というものは「自分のアイデンティティの根拠を相手にゆだねる、いわば自我の譲渡である。相手の出方だけで、アイデンティティの基盤は不安定にさらされる」²⁶と述べている。上野氏の指摘に従えば、平次を失うこと、平次に振られることに心配して不安を感じる桂子が苛立たしそうな身振りをしていることや、魅力がない自分、あるいは台湾育ちの自分を責める描写から見れば、桂子は恋愛の中で自我を相手に託し、相手の態度をもとに自分の価値を判断するようになると考えられよう。なお、水田氏が恋愛関係におけるカップルについては「男であれ女であれ、誰でも他者の自我に向き合うはずである。恋愛が人を変えるのは、他者の自我との対決の衝撃が強烈であり、他者の自我の受容を余儀なくされるからにほかならない」²⁷と論じている。その上、「女性にとって、恋愛の勝利は結婚ということになっていたが、結婚は個人としての女性の自我を充足させるものではなく、密閉するものであったから、不成功に終る恋愛のみがかりうじて成長を助けたといえる」²⁸と上野氏が述べている。言い換えれば、恋愛は自由で自己成長の糧である一方、結婚は女性の自我を伝統的な性役割に封じ込めものである。さらに、上野氏の説に従えば、平次と別れること、つまり「不成功に終る恋愛」というプロセスを経て、桂子は成長したと言えよう。

²⁵ 上野千鶴子、前掲書（2006年）、9頁。

²⁶ 上野千鶴子、前掲書（2006年）、9頁。

²⁷ 水田宗子、前掲書、35頁。

²⁸ 水田宗子、前掲書、39頁。



第2節 「烏秋」—たくましい女の生き方

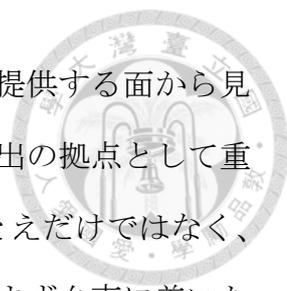
「烏秋」²⁹は、1941年6月『婦人公論』に発表された作品であり、主人公桐野八重は日本をたつて、台湾、支那へと絵の写生を目的とする50日余りの旅程の中に、日本に帰る前の10日余り台湾に滞在して台南にいる家族の家に立ち寄ることが描かれている。序章でも言及したように、真杉静枝の二回目の台湾旅行は1940年の暮れから1941年早春にかけて南方軍隊への慰問を兼ねた里帰りであるため、「烏秋」はその経験を題材にして描かれた物語と推測できる。「烏秋」は姉八重の視点を通して、妹加納照枝が植民地台湾での未亡人生活を描き出している。

八重は台北から台南に向かう汽車に乗っているところ、席の前にある内地から来たばかりの紳士が高い声で、「あれは、烏秋だ、烏秋だ」(51頁)と叫び、「烏秋、あれは烈しい鳥だ。日本では、台湾にしかゐない。何しろ、空を飛びながら、鷹に挑びつくんだからね。あの小さい体で……(中略)鷹にとびついたからには、その鷹が口にくはへてゐる獲ものをはなすまでは、挑びかかつていつてはなれないんだといふからね」(51頁)と感激したような声を出した。烏秋の話が続き、車内でほかの内地人が「なにしろ、地図でみても解りますやうに、日本はこんなに小さい国であつて、相手の支那大陸は、こんなに図体が大きいんですがね……」(52頁)と烏秋の精悍と勇敢を借りて日本を表現しており、日本は烏秋のように、領地が広い大陸に勝てるに間違いないと比喩している。

また、「日本では台湾にしかゐない」鳥とされている烏秋は、「日本の南方進出における重要な基地である台湾の換喩として捉えられ」³⁰ると李文茹が指摘して

²⁹ 「烏秋」の引用は真杉静枝『ことづけ』(日本植民地文学精選集19)(ゆまに書房、2000年)により、旧字体は新字体に改めた。

³⁰ 李文茹『帝国女性と植民地支配：1930～1945年における日本人女性作家の台湾表象』(名古屋大学博士論文、2005年)120頁。



いる。つまり、面積が狭い台湾は、農業や糖業生産などを物資提供する面から見れば、他のところでは取って代われない重要な存在で、南方進出の拠点として重視されているのである。一方、烏秋は明らかに国や領地のたとえだけではなく、台湾在住の人々の暗喩ともされていると思われる。なぜなら、まず台南に着いた八重は、迎えに来た母とバスに乗っているとの母との会話の場面を見てみよう。

「どうだった？——現地は、大へんだったでせうね」

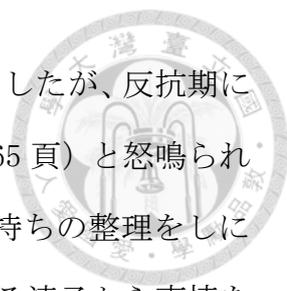
と、口に出して問ひながらも、しかし、ちやんと、その大変だといふ言葉の姿勢に、自分等の生活も添ひきつてあるといふ、何か強い反ったものがあった。

「大変は大変でも、しつかりしさへすればいいんです。たれでもが……」

八重は、気取ったやうな、怒った口の利き方をした。窓の外の甘蔗畑の上を、烏秋が、さつと宇宙に黒い緑で刷きたてるやうな速さで飛んでみた。(53頁)

南支那にせよ植民地台湾にせよ、戦争期の生活は大変だったけど、その大変さに負けないようにするという気持ちで、八重は「しつかりしさへすれば」と自分に言い聞かせた。台北から列車に乗っている時と同じく、バスに乗る時も窓の外には烏秋の姿が再び現れてきた。三十年も台湾在住の家族が辛抱強く、暮らしてきたのは烏秋のような「へこたれない意志の強さ」を持っていると考えられる。とくに、植民地台湾生活の辛さに対して台湾在住の日本人の根気に呼応する象徴であると考えられよう。

では、八重が見た植民地台湾で暮らす未亡人の心境に注目していく。照枝は、22歳で未亡人となり、さらに三児の母として子供の面倒を見ることと公学校で児童に「国語」を教える仕事という育児と仕事を両立するのに苦勞している。あ



る日、夕食前に照枝は新しい服を長男である一郎にあげようとしたが、反抗期に入る中学生の一郎に「そんなもん学校へ着ていかれて！」(65 頁)と怒鳴られてから、一人で神社外苑の孔子廟のあたりにある甘蔗畑へ気持ちの整理をしに行った。家に帰ったばかりの八重は、小学校一年生の末娘である清子から事情を聴き、「妹の照枝の容易ではない若い未亡人の暮し」(65 頁)を思っているところ、五年生の次男である二郎が「八重子伯母さんが、お客様に来てゐる間だけでも、兄ちゃん、お母ちゃんのをきくつて約束だつたんだけど……」(65 頁)と不安そうな声で話す。そこで、妹を心配する八重は次郎と一緒に自転車で照枝を探しに行った。製糖会社が見える場所で、木麻黄の樹のところの草むらに、照枝が白い姿で坐っている。八重は妹に近づいて話をかけると妹が鳥秋に関する話をしている場面が以下のように描かれている。

明るい製糖会社の方にじつと顔を向けてみながら、照枝は、ほのかな光りの中にその頬が涙でぬれてゐるのを、かくさうともせずに見た。

「ここでみると製糖会社は、近いのね」

八重が話しかけた。

「お姉さん、おかしげな句が一つできましたよ。

——鳥秋に似て猛けかれと母ごころ」

いかがでせうといふ風に、妹は言葉を切つた。八重は、都会で絵の修業をしてゐて、結婚をしないので、年齢を忘れて若い気であるのであつたが、妹は、このやうな子供を持つ母の心で必要以上にも老けてゐる。八重は、ふと、その妹の俳句を作るといふ、老けた心の年齢に眼をやつて、淋しく思つてゐる。(70 頁)

八重は仕事と育児を両立する照枝を見ると精神的な老いを感じ、悲しさが溢



れてくる。また、照枝が八重には「未亡人の生活の中にある深刻なもの」(69頁)を隠しているが、ここで鳥秋に託した自分の心境を俳句で表し、八重は妹の「黙ってゐる声がきこえるやうな気がした」(71頁)のである。続いて照枝は、植民地台湾での生活に関して次のように語っている。

「もう何年も何年も、私はこの風の音の中に耳を澄ましては來たんです。実に何の変化も起こりません。一年の半期は製糖会社が休みますが、休みが終つて、パツと会社の灯がついた日の、何ともいへない明るい気持。反対に灯が消えた日からの淋しい気持——それだけですわ、変化といへば…
…(中略) 真冬といふ季節のない土地ですからね、季節の変化はあまり、いちじるしくはありませんわ。でも、鳥秋をみてみると、とても季節の変化が、鳥の姿にでますのよ。秋になつて、鳥秋がいちばん猛る時になつて、電信線の上に並んで、チヨンチヨンとにぎやかにさへづり始めると、その頃の鳥秋は、とんびなんか、へえちやらですよお姉さん、鷹にだつてとびかかつていつて勝つんですもの」

云ひながら、段々、彼女も、その鷹にさへ勝つといふ小さな鳥の意欲が乗り移つてでも來たやうに、声を明るくして云つた。

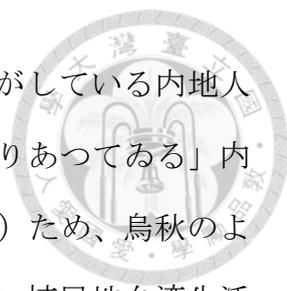
「秋になると鳥秋の姿をみて、さあ、やつぱり、しつかりとやつてゆくのだぞ！つて、自分の心にも叩きこむやうに云ひきかせますわ」

「さうでせうね」

歩きながら、八重は、心の深い声を出した。

妹の、植民地での未亡人生活の春夏秋冬を、みんな聴いたやうな気がした。(71-72頁)

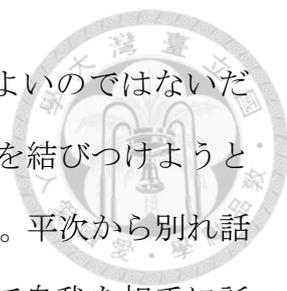
ここで何十年もの間、台湾で暮らしている照枝は、物語の前半に描かれた台湾



に来たばかりの「新鮮な活気のみなぎりあふれた顔」(50頁)がしている内地人の心境との違いが窺える。「高い声で南方開発事業について語りあつてゐる」内地人は「どの声も、まだ現実の台湾には未経験らしい」(50頁)ため、烏秋のような台湾に植民地の建設や発展に期待をかける。それに対して、植民地台湾生活は照枝にとって季節の変化がない上に、何の刺激もなく、ただ寂寥や苦しみに満ちた生活であった。こうした状況の中で照枝は、親として家計も育児も努めなければいけない責任で烏秋のように強い意志を持たなければならないと自分に言い聞かせながら、能動的に行動している強い姿が窺える。さらに、照枝は製糖工場の休まず操業や勇猛な烏秋の姿を見れば、明るい気持になり、親の役割を果たし続けられるという自分を励ます、生きていきたい姿を見せる。

第3節 結び

第3章では、「母の傑作」、「烏秋」に登場した姉妹二人を中心に、彼女たちが恋愛・結婚に対する価値観及びその女性像を考察してきた。まず、第1節では、「母の傑作」において桂子と妹の生き方の考察を通し、母親に反発した桂子は母の押し付けた生き方に逆らい、自分らしく生きていきたいと思う女性であり、それに対して妹は母親の意思に従って従順に生きている、いわゆる伝統的な女性の役割を果たしている女性であることが明らかになった。また、12年ぶりに妹との再会で桂子は、母の傑作という幸せなはずの期待の姿とは裏腹に非常な苦労を重ねた妹の姿に大きな衝撃を受けながら、「幸福な普通の女の生活」という母親の言葉に哀れみと怒りを感じるため、妹に冷たく接していた。なお、妹は娘の将来に対して支配的な母親と異なり、自分の老後を子供に丸投げな親にならずに、子供に過度な期待をかけて依存するようなことはしないと深く考えた新しい女性の考え方を持っている一面も窺える。本来、伝統的な女性の役割を果たしている妹は、夫の死亡により妻の役割が終わった後、仕事と育児を両立させる



逞しい女性になった。これも一種の新女性の姿と見なしてもよいのではないだろうか。その上、結婚制度の外側にいる桂子は、恋愛と結婚とを結びつけようとするが、思う通りにならないため、幸せ者と言えないのである。平次から別れ話をされた時、桂子の反応に関する描写から、桂子は恋愛の中で自我を相手に託し、相手の態度次第で自分の価値を判断することが明らかになった。

次は、第2節では、「烏秋」において姉桐野八重の視点を通して、妹加納照枝が植民地台湾での未亡人生活と妹の心境を考察した。汽車で乗客の会話とバスで八重と母親の会話の考察を通し、烏秋は国や領地のたとえだけではなく、生活の辛さに対して台湾在住の人々の根気にも呼応する象徴であると明らかになった。一方、照枝は烏秋に託した自分の心境を俳句で表し、烏秋のように強い意志を持たなければならないと自分に言い聞かせ、自らを励ます能動的に行動している姿が明らかになった。また、照枝が八重に自分の心情を吐露したため、八重は今回の滞在を通し、こうした植民地台湾在住の妹の生きていたい姿を理解できるようになったのである。このように、本章で取り上げた姉妹像は、違う生き方をしており、それぞれが人生の逆境を有しながら、それに強く立ち向かう女性として描かれている。





結 論

本論文は、1920年代から1940年代の日本植民統治期における台湾地方社会を背景に、日本の女性人物を主題として描かれた作品を中心に、真杉静枝文学における日本人女性像を考察した。真杉文学の中で恋愛と結婚に苦闘する女性人物が最も鮮明に語られている身辺小説「駅長の若き妻」、「異郷の墓」、「南方の墓」と「南海の記憶」の4つの作品、及び母との葛藤を通して自分探しをする女性を主人公とする、自伝的色彩の強い作品「むすめ」と二人姉妹それぞれの生き方をめぐる物語「母の傑作」、「烏秋」を研究対象として、作品の中に登場している女性人物に焦点を合わせ、「女性の自我」という視点から彼女たちが、それぞれ制度内で期待される性役割を果たす女性であるか、制度内の調和からはみ出す女性であるか、または自我意識を制度内の役割に封じ込められたか、などを考察してきた。さらに、作中の女性像を考察することによって、我の強い真杉が描いた女性人物は恋愛、結婚、人生などの問題に直面した時どのような姿勢を構えているのか、という問題を明らかにした。結論としては次の3点が挙げられる。

1. 因習的な社会に縛られる女性

第1章では、「駅長の若き妻」の美那子、「異郷の墓」の医者妻、「南方の墓」の駅長の娘と唐山氏の娘、「南海の記憶」の絵描きの妻と志保子という因習的な社会に縛られる女性たちを取り上げ、それぞれの特性を探し出しながら、その共通点と相違点を見極めた。まず、「駅長の若き妻」で、間違っただけで結婚したと感じた美那子は、女性のあるべき姿である「良妻賢母」に反抗する意識があるものの、真正面から制度に立ち向かう勇気の欠乏で空想に耽りながら救済者のような男性の現れを祈っており、人生の墓場のような結婚生活を続けるしか選択肢がない、いわゆる男性に依存する女性として描かれている。次に、「異郷



の墓」の医者妻は、肺病になってから芸者の仕事ができなくなり、日常的に夫と継子に暴力を振るわれる苦境から抜け出すため、自ら命を絶つという選択を余儀なくされる、すなわち男尊女卑の社会に殺され、社会制度による女性の抑圧が描かれているのである。

引き続き、「南方の墓」の駅長の娘は、自我に目覚め、不幸な結婚から逃れ、家出をすることを通して、家父長制への反抗をした女性である。一方、駅長の娘と対照的に、唐山氏の娘は母親に進められた縁談に対して、自分の権利や価値を考える前に現実を受け入れ、自己を完全に抑圧するような「良妻賢母」の運命に受け入れる女性である。しかも、母親に洗脳された唐山氏の娘は、自分が優れていないので、理想通りの結婚相手との結婚は有り得ないと信じ込んでいる、すなわち親の決定に従う結婚するしかないと自分自身を卑しめる女性である。最後、「南海の記憶」は、自分に正直に生きるために既定の婚姻関係から逃れた絵描きの「妻」は、内地の夫を捨てて愛人と台湾へ駆け落ちしたが、結局のところ現実に追われ、自由に自分の人生を生きることができなくなった上、自分も経済力がないので居場所が得られず、男に依存するような状況に陥って、異郷に残ったまま生涯を終えるしかない。却って、都会生活に対する憧憬がある志保子は、自分が望む生き方を選択し、自分らしく生きることができる、すなわち彼女は夢のままにとどまらず、自分で居場所が作れる女性として描かれているのである。

まとめてみれば、第 1 章で取り上げた結婚前後の時期にある女性像は、男性側の選択権に重点が置かれているという封建的な結婚に縛られたくない、自由恋愛による結婚に憧れる女性として描かれている。しかしながら、彼女たちはこのような因習的な社会に反抗しようとする考えを持っているものの、経済的自立ができない理由で家父長制に拘束され、女性としての苦境から脱出できなかったことが窺える。言い換えれば、親の一方的な価値観の押し付けに抵抗しようとしても、自分で考えて物事を判断できること——精神的自立——に加え、女性

のやりたいことの支えとする経済力を持つこと——経済的自立——がその時代の女性が自由に生きられるかの重要な要素であることは言えよう。



2. 気骨のある女性

第2章では、「むすめ」に登場した主人公梶子が母親との葛藤に注目し、母親との不和からやがて和解に辿り着くまでのプロセスを通して、梶子が少女から女性への成長に伴い人生に対する心境の変化を考察した。また、梶子が母親との葛藤がどのように描かれているのかを見ていく過程で、梶子の恋愛感情および自己意識からその女性像を明らかにしてきた。

まず、第1節では、戦後描かれた自伝小説「或る女の生立ち」と小品「母親」の内容を参考しながら、「むすめ」における梶子の児童期から思春期まで、母親とのこじれた関係の顛末について考察した。要するに、「むすめ」において梶子は母親の生理や流産という出血現象に生じた嫌悪感、または自分の初潮を母親に告げた時の母親の冷淡から生じた不快な思い出の原因は、身近な女性である母親が児童期の梶子に歪んだ性教育を植え付け、女性の生理を恥や不祥事であるかのように教育したため、同じく女である梶子が母親の女性性に対して強い反発や嫌悪感を抱いたのである。それに、ミソジニーの観点から梶子と龍田先生との会話及びそれに対する母親の反応に関する描写を考察し、梶子がミソジニーを核として組み込んだ家父長制に対抗する意識を持っていることが分かった。さらに、家父長制的な意識が浸透している人々に女性と見なされる眼差しは、梶子にとって一種の侮辱のような感じであったことが明らかになった。

次は、第2節では、17歳年上の男との結婚を強いられた梶子は、作家志望で夢を追いかけるため家から出奔し、母親の支配から逃れることを通して自分の人生の支配権を取り戻すという家父長制への反抗の姿勢が明らかになった。人生に真剣に向き合い、知的な欲求に満ちている梶子には、母親の決めた結婚がそ



のような自分の人生を満たしてくれるものではないことに目覚めたため、自分探しの旅に出るといふ、自分の生き方と自分の居場所を求める積極性が見られた。つまり、こうした梶子は、家父長制の代理人である母親の支配や強権に反抗し自我を貫こうとした女性である。

最後、第3節では、都会で十数年も生活している梶子の心と十数年ぶりの里帰りの心境の変化について論じた。まず、恋愛関係において梶子は、自分を理解してくれる人との付き合いを通して、相手の持っているよいもの、自分に有利なものであれば、それらをできるだけ吸い取り、身に備えて成長し続けてきた女性である。なお、恋人の春吉と結婚を前提とする交際が不可能だと分かった梶子は、いつ別れても平気で生きていけると、この交際に向き合っている積極的な態度が見られる。一方、十数年ぶりの里帰りの間に、母親との和解を通して梶子は、心の支えになる存在、すなわち家族の絆が見つかったほか、梶子は長年にわたってずっと縛られていた母親への恨み、罪悪感や過去の辛さから解放され、自己凝視ができ、大きく成長したことも明らかになった。そして、家族の絆という心の支えになる存在を確認できたため、梶子が春吉と淡々と別れられたことこそが、梶子の女としての大きな成長であり、前向きになってその後の人生を明るく歩み出すことができたと言えるであろう。

まとめて言えば、自我の意識を持っている梶子は、母親から押し付けられた結婚に反抗し、果敢に自分らしい生き方を追求し、精神的に、経済的に自立し、一人で生活していける気骨のある「新しい女性」¹ではないだろうか。

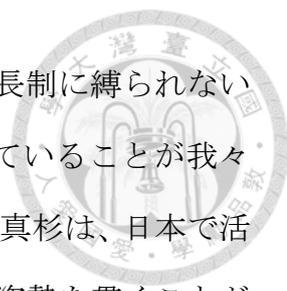
¹ 「新しい女」について、『大辞泉 第二版』（小学館、2012年）の「新しい女」項目に記された「明治44年（1911）から大正5年（1916）にかけて、雑誌『青鞥』を出した女流文学者のグループ（平塚らいてう・伊藤野枝ら）が中心となって主張した、近代的自我に目覚めた進歩的女性のこと。封建的な因襲を打破し、社会的にも家庭的にも、新しい地位を獲得しようとする女性。」という解釈に従う。したがって、本論文では「むすめ」梶子の女性像を考察することによって、彼女は「新しい女性」だということが窺える。



3. たくましい女性

第3章では、「母の傑作」と「烏秋」における姉妹二人を中心に、彼女たちが恋愛・結婚に対する価値観及びその女性像を明らかにした。まず、第1節では、「母の傑作」における桂子の妹は夫が亡くなった後、経済的に安定する教師という職業に従事しながら子育てをする、所謂仕事と育児を両立させるたくましい女性の一面が見られる。都会的な桂子から見れば、母親の決定に従って結婚した桂子の妹は封建社会の旧女性であるかもしれないが、経済的な理由で再婚——男性に従属すること——をせず、自力で家計を支え、経済面でも家庭内でも独立した一面を見せるその妹は、立派にそれぞれの役割を果たしている一種の新しい女性とみなしていいのではないであろうか。さらに、親子観についても、桂子の妹は、娘の将来に対して支配的な母親とは異なり、子供に過度な期待をかけない、依存しないという考えを持っている。一方、桂子が恋に悩んでいる表現、そして妹との会話を通して、桂子は恋愛の中で自我を相手に託し、相手の態度次第で自分の価値を判断する女性であることが明らかになった。次に、第2節では、「烏秋」における姉八重が妹照枝の母親としての辛さを目撃し、妹の心境への理解ができたことが窺える。照枝は、姉に子供に心を傷つけられた姿を見せたくない一方、烏秋に託して自分の心境を姉に話したことを通し、照枝は如何なる困難でも乗り越えて生きていたい気持ちを表し、人生の逆境に立ち向かおうとする女性の強さが見られる。

以上の3点を踏まえれば、真杉静枝文学における女性像は「因習的な社会に縛られる女性」、「気骨のある女性」、「たくましい女性」であることが明らかになった。このように、本論文は真杉の出発作「駅長の若き妻」をはじめ、「異郷の墓」、「南方の墓」、「南海の記憶」などを通して計7つの作品を具体的に検討してみた。真杉文学における当時の日本人女性像をある程度把握できたと言えよう。



真杉が 4 つの身辺小説を通して、因習的な社会あるいは家父長制に縛られないために、女性には精神的自立と経済的自立は必要条件とされていることが我々読者に提示してくれたと言ってよかろう。また、作家を志した真杉は、日本で活躍しようとするため、家父長制に反抗し、本心に従って反抗の姿勢を貫くことができたこそ、「家」の枠にはめられなかったのである。その自我の目覚めも、自伝的小説「むすめ」の梶子によって、十分に反映されたのであろう。最後、「母の傑作」と「烏秋」における姉の視点からみた未亡人の妹は、一見不幸せな人生を送っているが、自力でその状況から抜け出し、不幸な気分から解放され、前に進む姿には自我の目覚めの曙光が見えたと言えよう。結果から言うと、真杉の作品に登場する女性は「苦境に陥る」、「反抗する」、「自己と向き合う」というプロセスがあることが明らかにした。さらに、真杉文学には女性の人生は自分で決めるという女性解放の重要性も示唆されている。このように、本論文は今までの真杉文学研究と異なる視線を提供したと考えられよう。

本論文は 7 つの作品しか扱わなかったが、真杉が恋愛結婚に憧れていたことや、結婚・離婚の経験がどのようにかわるかなど、まだ解明していない点が残っている。それらの問題を解明するには、例えば、真杉の自らの恋愛遍歴をもとに、三人の主人公の人生行路、女性に関する事件や出来事が描かれた戦後の長編小説『花怨』（1948 年、六興出版部）のような種類の作品が挙げられる。真杉文学における女性像の全貌を理解するには考察範囲をさらに広げて研究する余地がある。それを今後の課題とする。

参考文献（著者名五十音順）



1. テクスト

真杉静枝

- (1929) 「異郷の墓」『若草』(5巻1号) 宝文館
- (1940) 「甲斐なき羽撃き」『甲斐なき羽撃き』協力出版社
- (1940) 「母の傑作」『万葉をとめ：真杉静枝短篇傑作集』人文書院
- (1948) 「むすめ」『愛情の門』国際女性社
- (1999) 「南方の墓」『小魚の心』(近代女性作家精選集 17巻) ゆまに書房
- (1999) 「南海の記憶」『小魚の心』(近代女性作家精選集 17巻) ゆまに書房
- (1999) 「母親」『ひなどり』(近代女性作家精選集 18巻) ゆまに書房
- (2000) 「駅長の若き妻」『その後の幸福』(近代女性作家精選集 44巻) ゆまに書房
- (2000) 「鳥秋」『ことづけ』(日本植民地文学精選集 19) ゆまに書房
- (2003) 「或る女の生立ち」『戦後の出発と女性文学第8巻』 ゆまに書房

2. 単行本・叢書

- 巖谷 大四 (1989) 『物語女流文壇史』 文芸春秋
- 上野千鶴子 (1986) 『女は世界を救えるか』 勁草書房
- 上野千鶴子 (2006) 『女という快樂』(新装版) 勁草書房
- 上野千鶴子 (2018) 『女ざらい—ニッポンのミソジニー』 朝日新聞出版
- 宇野 千代 (1995) 『作家の自伝 32 宇野千代』 日本図書センター
- 尾形 明子 (1993) 『「輝ク」の時代——長谷川時雨とその周辺』 ドメス出版
- 尾形 明子 (2000) 「作家・真杉静枝—復権のための序章—」『その後の幸福』
(『近代女性作家精選集 44巻』) ゆまに書房
- 加藤 秀一 (2004) 『<恋愛結婚>は何をもたらしたか』 筑摩書房

- 
- 河原 功 (2000) 「解説」『ことづけ』(『日本植民地文学精選集 19 巻』) ゆまに
書房
- 河原 功 (2009) 『翻弄された台湾文学——検閲と抵抗の系譜』研文出版
- 木村 涼子 (2010) 『〈主婦〉の誕生：婦人雑誌と女性たちの近代』吉川弘文館
- 黒木清次・久保輝巳編 (1971) 『中村地平全集 第3巻』皆美社
- 紅野 敏郎 (1987) 「解説」『女人芸術 別冊』不二出版
- 高良留美子 (2013) 『樋口一葉と女性作家——志・行動・愛』翰林書房
- 呉 佩珍 (2013) 『真杉静枝與殖民地台灣』聯經出版公司
- 呉 佩珍 (2020) 「真杉静枝と坂口禰子の台湾表象——「自伝的小説」に描か
れた日台植民地史」『明治維新を問い直す——日本とアジア
の近現代』九州大学出版会
- 小泉 讓 (1959) 『女性文学論』朱雀社
- 斎藤 環 (2008) 『母は娘の人生を支配する——なぜ「母殺し」は難しいのか』
日本放送出版協会
- 清水 信 (1967) 『作家と女性たち』現文社
- ストリンドベリ著・茅野蕭々訳 (1924) 『ストリントベルク全集 第1巻』岩
波書店
- 竹中 信子 (1996) 『植民地台湾の日本女性生活史 大正篇』田畑書店
- 竹中 信子 (2001) 『植民地台湾の日本女性生活史 昭和篇〔上〕』田畑書店
- 田端泰子・河原和枝・野村幸一郎 (2009) 『母と娘の歴史文化学——再生産さ
れる〈性〉』白地社
- 茅野 蕭々 (1928) 「あとがき」『近代劇全集 第3巻 北欧篇』第一書房
- 十返 肇 (1956) 『わが文壇散歩』現代社
- 十津川光子 (1968) 『悪評の女』虎見書房
- 中島利郎・河原功・下村作次郎 (2001) 「作家紹介 (真杉静枝の巻)」『日本統治

期台湾文学・文芸評論集 第3巻』緑蔭書房（初出『台湾芸術』1940年5月号）



女人藝術社内輝く会編・尾形明子解説（1988）『輝ク：復刻版』不二出版

平林たい子（1960）『自伝的交友録・実感的作家論』文芸春秋新社

深尾須磨子（1955）『現代日本詩人全集 第9巻』東京創元社

福沢 諭吉（1926）『福沢全集 第7巻』国民図書株式会社

水田 宗子（1992）『ヒロインからヒーローへ』（新版）田畑書店

吉屋 信子（1977）『自伝的女流文壇史』中央公論社

和田 芳恵（1967）『ひとつの文壇史』新潮社

3. 機関雑誌・論文

邱 雅芳（2010）「殖民地新故郷—以真杉静枝〈南方之墓〉、〈南方的語言〉的臺灣意象為中心」『文史臺灣學報』第2号、國立臺北教育大學臺灣文化研究所

許 麗芳（2014）「試論真杉静枝《南方紀行・臺灣の土地》（1941）的鄉愁內涵」『國立彰化師範大學文學院學報』第9号、彰化師範大學

吳 佩珍（2014）「真杉静枝と林芙美子——「台湾」という記号をめぐる」『浮雲』第6号、林芙美子の会

吳 佩珍（2017）「真杉静枝の『花樟物語』三部作とその台湾表象」『立命館文学』第652号、立命館大学人文学会

蜂矢 宣朗（1995）「真杉静枝と台湾—「むすめ」と「ながれ」から—」『天理台湾学会年報』第4号、天理台湾学会

蜂矢 宣朗（1997）「真杉静枝と窪川稻子—『南方紀行』と『台湾の旅』—」『天理台湾学会年報』第6号、天理台湾学会

范 淑文（2018）「真杉静枝文学に語られる「壁」——「烏秋」、「母の傑作」

の主人公たち」『お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所比較日本学教育研究部門研究年報』第14号、お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所

- 吉屋 信子 (1962) 「真杉静枝の生涯」『小説新潮』6月号、新潮社
- 廖 秀娟 (2018) 「真杉静枝「リオン・ハヨンの谿」「ことづけ」論—白百合を手がかりとして」『台大日本語文研究』第35期、台灣大學日本語文學系
- 林 雪星 (2006) 「兩個祖國的漂泊者—從坂口禱子的《鄭一家》及真杉靜枝的《南方紀行》《囑附》中的人物來看」『東吳外語學報』22号、東吳大學外語學院
- 李 文茹 (2005) 『帝国女性と植民地支配：1930～1945年における日本人女性作家の台湾表象』名古屋大学博士論文

4. 新聞・辞書・インターネット

- 共同通信社編著 (2016) 『記者ハンドブック』第13版、共同通信社
- 『臺灣總督府職員錄』(1898) 台湾日日新報社 (<https://who.ith.sinica.edu.tw/>、
「中央研究院臺灣史研究所」、2022年6月9日閲覧)
- 中村地平 (1939) 「がくげい抄」『台湾日日新報』1939年3月18日
(<http://huntenq.com/ddn.htm>、「大鐸資訊」、2021年11月1日閲覧)
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編 (2001) 『日本国語大辞典 第二版』小学館
- 真杉静枝 (1940) 「汽車弁当に地方色を」『台湾日日新報』1940年12月13日
(<http://huntenq.com/ddn.htm>、「大鐸資訊」、2021年11月1日閲覧)